代官利友

貞清毎年社納分ヲチ押領スル御蔭山神幸等ノ大禮闕怠ス

不易之地、被恩補之上者、縦寄神事、雖被成直務御下知、自今以後、不去渡在所、永領知不可有相違之旨、被載御下知御文言、爲請之本領、被補御恩證跡明鏡也云々、既不歸以他人沙汰云、殊更當社太神宮領可爲社家進退之旨、忝御成敗堅固之處、不掠申者、爭可有御許容者乎、然上者、貞清掠給之御下知之御文言等、恣好之申請之段、爲歴然者哉、其咎不輕、次利友被官人、貳十貫文引取之由、并使者在庄、運賃路錢禮物引之由、爲猛惡之旨、先度申上之處、貞清不及返答之上者、令承伏者哉、

一貞清帶御下知之上者、非押領云々、社家直務之時者、相定社納分、毎年無相違、日供神事執行之處、貞清恣依令自專、御蔭山神幸以下之太禮等、近年令闕怠之上者、一圓ニ押領之段、不可爲御成敗者也、次去文龜三年、以岩藏妙善院申之由、以外虚言也、次去明應九年十二月、貞清掠給御下知、文龜以來梅原庄事、依致押領、當社之儀爲如此之條、無勿躰之由、就無其隱之儀、如先々可申成之由、去永正三年、當右京兆(細川政元)内々被申之處、永代契約仕之由、貞清申上之間、爲虚言之由、言上仕之處、不及返答上者、虚說之至事實也、次代官利友年貢不運上之由、可申無子細之上者、貳千七百餘貫文押領之段社家

貞清大神宮領ヲ私領ト稱ス

貞清公用ヲチ掠メナガラ國代官ヲ掠メ取ルト稱ス

義尹入洛スルモ社領相違アルベカラズ

貞清御蔭山神幸ノ神事ヲ怠ル

申事、更以不令參差、次太神宮領於稱私領、貞清乍致神敵、奉祈天下安全、社務祐平祝光將氏人等、悉可被處御罪科之由、申上之、其咎難遁者也、一不可上公用旨、申下之由、代官注進也云々、嚴重之神事要脚於貞清恣就令自專之儀、利友申上之歟、於社家者不存知者也、次文龜三年、同二年、二千疋可渡之由、雖申、不請取之由、勿論、京定三百九十貫文宛之處、兩年之間、只二千疋可請取哉、殊爲社家不定置之、爲代官之間、不及是非之由申上之處、此段祐平承伏也云々、子細何事哉、更以無其謂者也、而相語國代官妨年貢運上云々、以外虚言也、年々公用恣掠取之間、可陳申依無子細申歟、言語道斷之次第也、

一去八月、對代官利友、貞清遣之書狀之趣者、就御入洛之儀、當知行在所者、不可有相違之由、大内左京大夫(義興)被申間、御同心候、殊梅原庄事、被成下還補御判之由申下之時者、今度帶御判證、貞清書狀之見文言訖、然延德二年之沙汰者、更以無之者也、

一依貞清所行近年令闕怠御蔭山神幸之神事、御代爲千秋萬歳之間、彌爲天下安全、去八月廿八日執行之、就順路之御成敗、梅原庄事、如先々可被成下

永正五年十一月是月

直務御下知之旨言上仕之處、去九月十七日、忝被尋下貞清之處、九月廿四日之日付之以申狀、十月十八日、御返事言上之間、則寫取之、祐平重申狀、同廿四日、出帶之、同廿五日、貞清寫取之、至于今月八日迄、不出帶之二答之狀、十月之日付也、去十四日、祐平寫取之、則如此令言上者也、然就三問三答之御沙汰、陳狀訴狀出帶事、凡日數相定歟、於度々貞清以外延引、是又可被任御法者乎、

右、於貞清其咎者雖事多、爲文明之補任（於）元文每度申掠、一方向御下知之御文言等、恣好之申請事、慈照院殿樣御成敗破之申事乍致去狀陳申事、社司氏人中不殘一人、社家一同奏之連判證狀、可被召出之事、二千七百餘貫致押領事、剩近鄉神領可致知行由申事、前司負累不可懸後任證文去明應三年□（捺）申之處、無支證之由申事、女房奉書破之申事、神事御祈禱懃之社司氏人悉可有御罪科之由申事、□□勅書勅使及數十度之由申、奉掠叡慮事、就御入洛、大內左京大夫被申間、貞清被成下梅原庄還補御判之由申事、兩度返答致延引事、如此條□謀略嚴重神領依致押領、每度神事令闕怠、殊去九日、相嘗會太禮于今延引之條、天下重事、太無勿躰□□□申掠社家理運之旨、被聞食分、被成下直務御下知者、一社成大慶思、當神事以下、致無爲之沙汰、彌可□（擧カ）抽天下安全御長久懇祈矣、仍謹言上如件、

永正五年十一月日

十二月大盡甲子朔

一日、甲子、御祝、

〔實隆公記〕三十九　十二月一日、甲子、天晴風靜、臘朔幸甚々々、○中略御祝、入夜中將參入、(三條西公條)(清彥)三宮御方渡御、

四日、丁卯、前伊勢國司北畠政鄉卒ス、

〔諸家傳〕十一下北畠　政鄉本政具母、年月日從五位下、年月日右權少將、長祿四年正月五日從五位上、于時政具、寬正五年十一月六日正五位下、文明八年正月六日從四位下、同十年八月十七日從四位上、年月日任右權中將、年月日出家、永正五年十二月四日卒、

〔尊卑分脈〕村上源氏北畠

敎具　文明三三廿二(三イ)薨、參木、右中將、權大、從二、

政鄉　永正五十二四卒、右中將、正四下、改一具、

材親　參木、左中將、權大、正二、本具方、

〔北畠源氏系圖〕

敎具

三條西公條參內　皇子清彥參內

官歷

系圖

淨眼寺殿

政鄉　右イ左中將、正四位下、伊勢國司、號北畠、又云淨眼寺殿、

政勝

材親

孝緣

政鄉　後花園帝寶德元年己巳生、長祿元年月日敍爵、十一歲イ九歲、元名政具、同二年改政鄉、十二歲イ十歲、侍從少將中將、後土御門帝文明三年、爲伊勢國司、卅一(三イ)歲、于時中將、或云少將、自應仁元年至文明九年京都兵亂、諸國物忩、其間政鄉國中討賊、武功屢多、文明十年月日出家、三十歲、或三十二、法名逸方、道號無外、信佛道、入臨濟家宗、後遭大空和尙、入曹洞家宗、又信眞盛上人、隱居後號大石御所、文明十八年、立淨眼寺、以大空爲開山、文武賢才歌人、永正五年、送遺狀於多氣殿(北畠材親)、同年十二月四日卒、六十歲、或云六十二歲、其像在淨眼寺、自畫自贊云々、

〔北畠系圖〕

敎具

政鄉　左中將、正四位下、伊勢國司、號北畠、

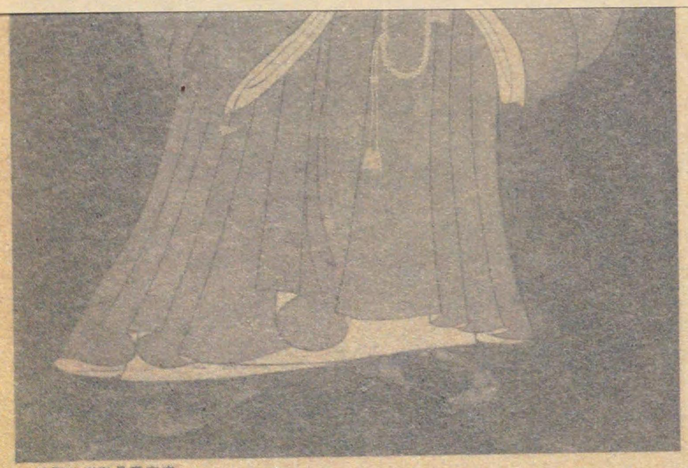
材親

出家

法名道號

大石御所ト云フ

永正五年十二月四日



東京寫眞印刷社製版

伊勢多氣ニ卒ス

足利義政ノ偏諱ヲ受ケ政具ト稱ス

玄虎政鄕壽像ノ讃ヲ書ス

政鄕ノ自讃

政鄕　寶德元己巳年誕生、文明十戊戌年出家、三十歲、法名逸方、道號無外、信佛道、遷大空和尙隱居、後號大石御所、文明十八丙午年建淨眼寺、學禪家臨濟宗、又後曹洞宗也、三十八歲、大空爲開基、依號淨眼寺殿、永正五戊辰十二月四日、於多氣卒、六十歲、號高德院殿無外逸方大和尙、

〔星合系圖〕

敎具

政鄕　正四位下、右中將、元政具、國司、義政賜諱字、稱政具、又改政鄕、常嗜弓馬和歌之道、有其令譽、家傳弓馬、附屬于星合、永正五年出家、同十月二日卒、

材親

〔北畠政鄕畫像讃〕　○伊勢淨眼寺所藏

謹奉嚴命、書當寺開基無外逸方大禪定門之壽像、

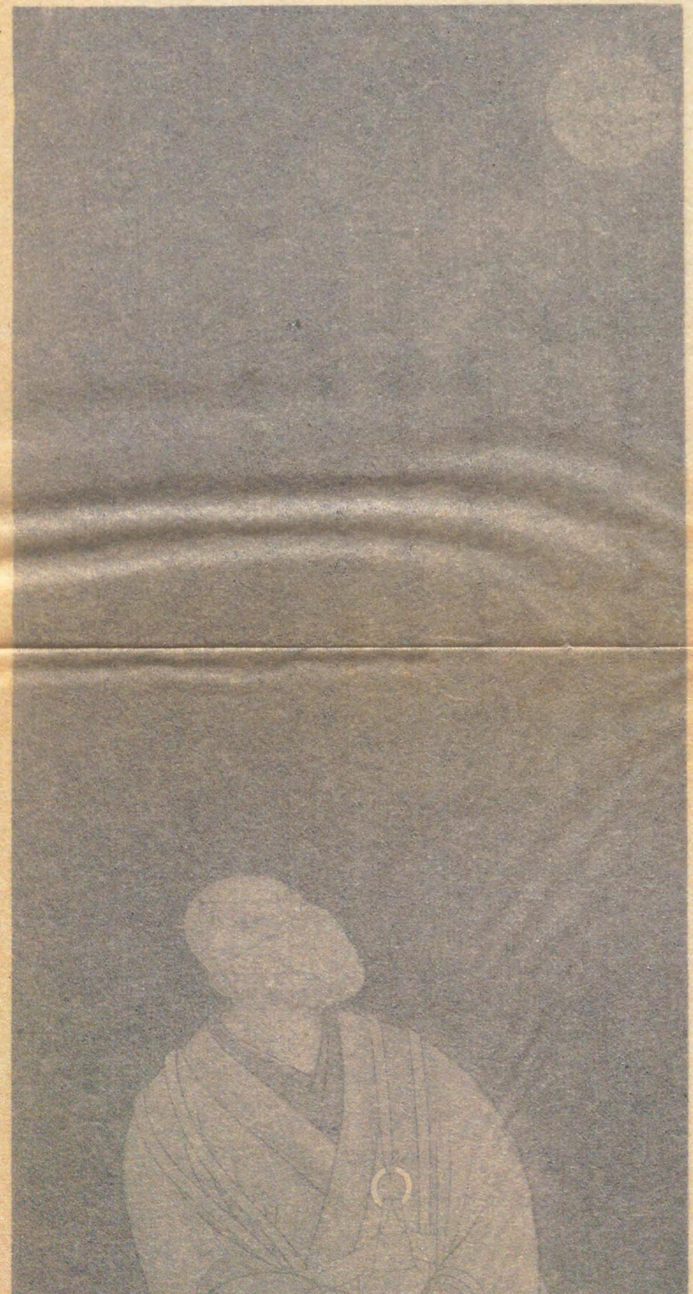
覺了本心、無一

星事、生也無生、

死也無死、

逸方御自贊、

明應（三年）甲寅解制日、



北畠政鄉畫像　伊勢淨眼寺所藏

原寸

縦一・〇七〇
横〇・三七三

永正五年十二月四日

政鄉　寶德元己巳年誕生、
佛道、遷大空和尙隱居、後
濟宗、又後曹洞宗也、三十
月四日、於多氣卒、六十歲

伊勢多氣ニ卒ス

〔星合系圖〕

教具

足利義政ノ偏諱ヲ受ケ政具ト稱ス

政鄉正四位下、右中將、元政
歌之道、有其令譽、家傳

材親

〔北畠政鄉畫像讚〕

○伊勢眼寺所

謹奉嚴命、書當寺開基無外
覺了本心、無一
星事、生也無生、
死也無死、
逸方御自贊、
明應甲（二年）寅解制日、

玄虎政鄉壽像ノ讚ヲ書ス

政鄉ノ自讚

原寸
縦 一・〇七〇
横 〇・三七三

東京寫眞印刷社製版

伊勢多氣ニ卒ス

足利義政ノ偏諱ヲ受ケ政具ト稱ス

玄虎政鄕壽像ノ讃ヲ書ス

政鄕ノ自讃

政鄕　寶德元己巳年誕生、文明十戊戌年出家、三十歲、法名逸方、道號無外、信佛道、遷大空和尙隱居、後號大石御所、文明十八丙午年建淨眼寺、學禪家臨濟宗、又後曹洞宗也、三十八歲、大空爲開基、依號淨眼寺殿、永正五戊辰十二月四日、於多氣卒、六十歲、號高德院殿無外逸方大和尙、

〔星合系圖〕

教具

政鄕　正四位下、右中將、元政具、國司、義政賜諱字、稱政具、又改政鄕、常嗜弓馬和歌之道、有其令譽、家傳弓馬、附屬于星合、永正五年出家、同十月二日卒、

材親

〔北畠政鄕畫像讃〕　○伊勢淨眼寺所藏

謹奉嚴命、書當寺開基無外逸方大禪定門之壽像、

覺了本心、無一

星事、生也無生、

死也無死、

逸方御自贊、

明應（三年）甲寅解制日、

北畠政鄕畫像　伊勢淨眼寺所藏

原寸　縦一・〇七〇　横〇・三七三

永正五年十二月四日

政鄕　寶德元己巳年誕生
佛道、還大空和尚隱居、後
濟宗又後曹洞宗也、三十
月四日、於多氣卒、六十歲

伊勢多氣ニ卒ス

〔星合系圖〕

敎具

政鄕

足利義政ノ偏諱ヲ受ケ政具ト稱ス

材親

〔北畠政鄕畫像讃〕　○伊勢淨眼寺所藏

玄庵政鄕壽像ノ讃ヲ書ス

政鄕ノ自讃

謹奉嚴命、書當寺開基無外
覺了本心、無一
星事、生也無生、
死也無死、

原寸

縦 一・〇七〇米
横 〇・三七三

東京寫眞印刷社製版

伊勢多氣ニ卒ス

足利義政ノ偏諱ヲ受ケ政具ト稱ス

玄虎政鄕壽像ノ讃ヲ書ス

政鄕ノ自讃

永正五年十二月四日

政鄕　寶德元己巳年誕生、文明十戊戌年出家、三十歲、法名逸方、道號無外、信佛道、遷大空和尙隱居、後號大石御所、文明十八丙午年建淨眼寺、學禪家臨濟宗、又後曹洞宗也、三十八歲、大空爲開基、依號淨眼寺殿、永正五戊辰十二月四日、於多氣卒、六十歲、號高德院殿無外逸方大和尙、

〔星合系圖〕

教具

政鄕　正四位下、右中將、元政具、國司、義政賜諱字、稱政具、又改政鄕、常嗜弓馬和歌之道、有其令譽、家傳弓馬、附屬于星合、永正五年出家、同十月二日卒、

材親

〔北畠政鄕畫像讃〕　○伊勢淨眼寺所藏

謹奉嚴命、書當寺開基無外逸方大禪定門之壽像、

覺了本心、無一

星事、生也無生、

死也無死、

逸方御自讃、

[illegible]

法名

政鄕連歌合

宗祇

當山住持比丘玄虎書之、

〔北畠家代々法名記〕○伊勢

多氣御所五代正四位左中將政鄕

高德院殿心祖先天大居士文明十年死、

〔北畠家連歌合〕一條禪閤（兼良）判詞並跋文親筆

戀部

百四十一番左勝　右中將政鄕

人ニ見をはや我袖乃うゑ

あとぬ世ふゑへて待と□□□しらし

右　僧宗祇

さても此身よなにとゝくさむ

天地をしる許ある物おもひ

天地ハ四知の中ニ侍れと、事々しきやうこきこえ侍り、左ハ優美ニ侍れハ、勝ニて侍らんゝし、

百四十九番左持　右中將政鄕

永正五年十二月四日

永正五年十二月四日

かれさの心ゑらすとうなさ
うすならぬ憂身なからも猶待て

右　　參議具茂（堀川）

ゑれみうさしな昵言のすゑ
ゐさし身い契盡さむ物ならて

左右無殊事、不及盡言詞、〇中略

權大納言敎具	勝九句	負六	持廿二
桑門光曉	勝九句	負八	持廿
參議具茂	勝八句	負九	持十八
右中將政鄕	勝十一句	負九	持十五
侍從顯豐	勝八句	負十四	持十三
僧宗祇	勝八句	負十四	持十五
僧宗怡	勝九句	負十三	持十五
三枝幸高	勝十四句	負六	持十四
平章棟	勝六句	負七	持廿四

平重孝	勝六句	負九	持廿一
平千盛	勝七句	負八	持廿
藤原季理	勝十一句	負十	持十四
傳阿法師	勝十句	負五	持廿一
賀阿法師	勝八句	負七	持廿〇兼良ノ跋文略ス、文明三年三月二十三日、北畠敎具薨去ノ條ニ收ム、

〔新撰菟玖波集〕六冬連歌

なかむるかたはかせもをとせす
こゝろなき時雨の雲に月まちて　源政鄕朝臣（北畠）
はまの眞砂そいろもわかれぬ
かけにちるあられ松原かせふきて　源政鄕朝臣

〔新撰菟玖波集〕十戀連歌下

かせ身にしみつ物おもふころ
わか袖に草葉のしらぬつゆおきて　源政鄕朝臣

〔新撰菟玖波集〕十二羇旅連歌下

永正五年十二月四日

のりのみちにはさかひありけり
たひ人の舟ひきすつるとをひかた　源政郷朝臣

〔新撰菟玖波集〕十三雜連歌一

やゝさむけなるあめのおり〳〵
たれかすむ木葉うつろふみねの庵　源政郷朝臣

傳

〔伊勢國司記略〕五　五世政郷朝臣　右中將政郷朝臣ゟ、權大納言敎具卿れ男ゟり、分脈系圖、始の名ハ政具、後ニ今の名ニ改給ふ、

按するに、諸家傳、勢陽雜記等ニ、政郷元政具とゐ事、從ふへし、他書或ゟ元政郷、後政具といふゟ非なり、

いつれ頃ニや、年月闕、從五位下右少將とゟり給ひ、長祿四年正月五日從五位上、寛正五年十一月六日正五位下、文明八年正月六日從四位下となり給ふ、諸家補任、此國司わゟき御時より、禪理を好みて、玄虎和尚といへる禪僧ニ參し給ふ、ゐる時の御歌ニ、

我心おゝ法と志れゟ佛なり餘所の佛の佛さのまし

禪ヲ玄虎ニ學ブ

玄虎和尚返し、

佛とも志らは心のゐさてにて志らぬ心そ佛ゟりゟん一本系圖、

文明十三年、法體となり、無外逸方と號し給ふ、系圖、諸家傳、勢陽雜記、

按するに、或人の說に、政郷朝臣、文明十八年、從四位上ニ敍し給へハ、其以前法體もゐき理ゟし、系圖ニ載する所も誤ゟりといへり、余思ふニ、法體以後敍任せさるゝと、上世はさもありゟん、中昔より此方ゟ、法體の人敍任なきニゐらす、まつ北畠れ先祖親房卿、元德二年、剃髮入道し、宗玄と號し給ひ、其後元弘二年ニ、准大臣從一位となり給ふ、されゟ政郷朝臣法體已後、敍爵し給ふと疑ふへきニゐらす、又按するに、阿阪淨眼寺由緒、松阪來迎寺緣起ニ、淨眼寺殿無外逸方をゟ、材親卿の法號とす、系圖、諸家傳、勢陽雜記等志るに所と異なり、おれ本寺れ傳る所ゟれと、誤さるゝとを志れり、其證いゟニといふニ、澤家文書の內ニ、延德二年及ひ明應三年ニ、國司より澤氏へ賜ゐる書三通ゐり、皆逸方と志るし給へり、志いらく其一をゐく、

淨眼寺殿無外逸方ヲ北畠材親ノ法號ト爲スノ誤寺傳ノ誤謬

澤殿　逸方

就分領神戸六郷之法度制札事、如先代申沙汰旨、令存知候也、謹言、

永正五年十二月四日　三四三

延徳貳

後八月十一日　　澤兵部大輔とのへ

又玄虎和尚自筆ゖ、當寺開基無外逸方大禪定門自贊の落款ょも、（本書を未見ゖ。其寫を見さり。）明應甲寅とゐり、玄ゥるに材親卿は、永正八年、四十四歳ょて落飾し給へる由、公卿補任、諸家傳、勢陽雜記ょ見えて、延徳ゖ頃よりゐ、二十餘年後なれゐ、延徳明應の頃ゐ、二十歳前後の御時ょて、法體もし給ゎぬょ、法號ゖゐ給へるいゎれをかしゝ、まゃ淨眼寺由緒ょ、文明十年戊戌ょ、諸堂全備する由玄るしさり、玄ゥるに、公卿補任、歷名土代ょ、材親卿、文明八年九歳ょて敍爵し給へるょし見えされゐ、文明十年にゎ、ゐつゥょ十一歳の御時ゎれと、後生ゖ爲ょ寺立給ふへきいゎれをかし、又五鈴遺響といへる書ょ、淨眼寺の傳記を引て、淨眼寺と、政鄕朝臣追福ゖためょ立給へる由いへり、玄ゥるょ政鄕朝臣ゐ、永正五年卒し給ふ由、尊卑分脈、寬永系譜等ょ見えさり、文明十年ゖ、永正五年より三十餘年前ゐるも、追福を行ふへきいゎれをかし、淨眼寺、來迎寺ゖ、北畠氏ょ緣ある寺ょて、書翰類ゐいゥょ

もそのゥみの眞物と見えされと、緣起の類ゐ、後世の追錄ょ出て、謬誤ゐしといふへゥらにさされゐかく諸實錄と齟齬をるなるへし、余思ふょ、淨眼寺ゐ政鄕ゖ草創ょて、材親ゖ修補なるへし、且二代ともに玄虎を信仰し給ひしゥゎ、後世傳へあやまりて、父子を混せしおらん、

（分脈、諸家傳）

同十八年十月七日、從四位上ょ敍し、（歷名土代、諸家補任、）右近衞中將ょ任し給ふ、（年月闕、）いよ〳〵玄虎ょ隨喜し給ひ、壹志郡阿射加山ゖ麓ょ大伽藍を建立し、此年成就しゐれゎ、正法山淨眼寺と號し、寺領を寄附し給ふ、（淨眼寺文書、）

按するに、前ょいへる如く、淨眼寺由緒ょゎ、文明十年、諸堂全備とゐれと、文書ょゎ、十八年成就の由見えさり、文書ゎ當時の物なれゎ、尤信すへし、故今おれょ從ふ、文書左の如し、

當寺開山之事、速成就、誠以歡喜不可過之乎、仍爲寺領三拾石貳拾貫寄進之、可被全寺務之狀如件、

文明十八年二月十日　　政勝花押

具方花押

淨眼寺玄虎長老

明應三年、國司其壽像を造りて自ら贊し給ふて云、覺了本心、無一星事、生也無生、死(也脫カ)無死、玄虎をしておれを書しめ給ふ、(勢陽雜記、永正五年十二月四日卒し給ふ、御年詳ならず、分脈系圖、此國司弓馬の道も、和歌れ道もうせうらす、時の譽れありといへり、寛永系圖、男材親家を嗣く、次男親忠、三男親泰相繼て大河内家れ養子とある、其次孝緣といふ、興福寺別當東門院僧正となる、分脈、末子四郎具盛神戸家れ養子となり、藏人と稱し、入道のれち樂三と號す、一女長野家の妻となれり、北畠物語、又田丸顯晴も、政鄕朝臣の子なり、(本傳に詳なり、)

○政鄕、父敎具ノ後ヲ嗣グコト、文明三年三月二十三日ノ條ニ、義政、政鄕ノ兵ヲ徵スルコト、同四年三月十六日ノ條ニ、政鄕ノ兵、奈良手害ニ陣スルコト、同年五月二十二日ノ條ニ、長野又四郎ノ伊勢神戸司職ヲ押妨スルヲ幕府ニ訴フルコト、同五年九月三日ノ條ニ、綸旨ヲ政鄕ニ下シテ、秋山某ノ興福寺領大和鳥子、檜牧兩莊ノ土貢ヲ押妨スルヲ停メシメラルヽコト、同六年九月十日ノ條ニ、政鄕ニ勅シテ、畠山政長ニ屬シ、同義就ヲ討タシメラルヽコト、同九年九月二十八日ノ條ニ、又政鄕、長野政高ト戰ヒ、越智家榮之ヲ調停シテ和セシムルコト、同十二年

四月十五日ノ條ニ、關胤盛ヲ援ケテ、政高ヲ擊ツコト、同年八月二十七日ノ條ニ、坂內房卿ヲ大和ニ遣シ、畠山義就ノ聲援ヲ爲スコト、同十四年十月二十二日ノ條ニ、家ヲ子具方ニ讓ルコト、同十八年八月六日ノ條ニ、幕府、政鄕ノ、新關ヲ伊勢ニ設ケ、神郡ヲ侵略シ、豐受大神宮兵燹ニ罹ルヲ責ムルコト、長享二年二月是月ノ條ニ、政鄕、近江日吉社領筑摩十六鄕ヲ占有スルヲ以テ、幕府之ヲ諭シテ、同社ニ還付セシムルコト、延德二年十一月十六日ノ條ニ、兵ヲ率キ、同社祠人山田、上野ノ黨ヲ擊ツコト、明應二年八月二十二日ノ條ニ見ユ、

〈參考〉

〈勢陽雜記〉三一志郡　一正法山淨眼寺、(松坂ヨリ乾行程二里、)阿坂村ニ在、多氣ノ御所ト云ヒアガメケル、無外逸方居士、眞通先天ノ御爲ニ、文明二(甲辰、)年建立アリヌト云々、(中略、)又多氣ノ御所自畫自贊ノ御影ニ、虎藏主筆ト云々、(讀上ノ北畠政鄕畫像讀ニ同ジ、)(略ス、)

出雲、隱岐、飛驒守護京極政經卒ス、

〈實隆公記〉三十九　十二月四日、丁卯、晴、風靜、(略、)中京極大膳大夫(政經)入道於雲州出雲ニ卒ス

永正五年十二月四日

淨眼寺多氣御所ト稱ス

死去云々、

〔江北記〕

一正覺寺殿（勝秀）ト申ハ、寶性寺殿（京極持清）御息、殊御嫡子也、其御次大膳大夫政經、其御次遍照寺殿（政光）ト申ハ、黒田ヘ御養子候、其御次環山寺殿（高清）宗意、當國初亂ヨリ、御家督被持候、環山寺殿ハ御幼少之間、遍照寺殿御名代ヲ被持候、五六ケ年之間歟、

一大膳大夫殿御嫡子治部少輔殿（材宗）、其次吉童子殿也、

〔佐々木文書〕

（四）〇周防 佐々木系圖

持清 六郎、大膳大夫、中務少輔、號寶生寺、法名正觀、

- 勝秀 三郎、中務少輔、號正覺院、
- 政高 六郎、大膳大夫、治部少輔、號栖雲寺、出雲安國寺ニテ逝去、
- 政光 四郎、早世、黒田養子、
- 高清 六郎、中務少輔、後京極惣領、
- 孫童子 早世六歳、

〔諸家系圖纂〕

九ノ一 佐々木 京極

持清 六郎、中務少輔、大膳大夫、

- 勝秀 初名政高、六郎、大膳大夫、侍所、號栖雲寺、政經病者、亦亂國之間、京都置侍所、持高無子卒、仍繼家督、
- 政經 初號政高、六郎、大膳大夫、侍所、號栖雲寺、政經病者、亦亂國之間、京都置侍所、所代、家子多賀豐後守高忠、謂之所司代、政經爲御相伴衆、文安元年八月三日、公方御成政經亭、
- 政光 高清若年間、名代家督、黒田養子也、四郎、號遍照寺、法名道器、
- 高清 六郎、中務少輔、政光弟、家督、法名道意、號還仙院、永正四年二月卒、遠井記佐環山寺、
- 材宗 治部少輔、文安三八月、於江州彌高寺自害、
- 經秀 治部少輔、童名吉童子、

〔讃岐丸龜京極家譜〕 乾

第廿一代 持清 從四位上、大膳大夫、中務少輔、侍所、持高無子卒、仍繼家督、

第廿二代 勝秀 從五位下、中務大輔、

第廿三代 政光 從五位下、治部大輔、壹岐守、勝秀男高清仍爲幼稚繼家督、

第廿四代 政經 始經秀、從五位上、大膳大夫、治部大輔、政光早世、高清未仍爲幼稚繼家督、

第廿五代 高清 從五位下、中務大輔、

〔讃岐丸龜京極家譜〕 坤

第廿四代從五位上大膳大夫源政經、持清三男、母不詳也、童名號六郎經秀、後從將軍義政公、賜諱政字、號政經云々、政光早世、高清幼稚

世系

初名政高 栖雲寺ト號ス 出雲安國寺ニ卒ス

初名經秀

經歷義政ノ偏諱ヲ受ケ政經ト改ム

而平素多病、依之政經相續京極之家督訖、
文明五癸巳年十二月十九日、義尚(足利)公御敍爵、同廿五日參內之時、細川右京大夫政元、竝經秀(于時治部大輔、供奉、騎馬、
文明七乙未年十月十五日、依爲前將軍義政公四十賀、當將軍義尚公於花御所有御祝儀、而犬追物興行之時、多賀豐後守(高忠)依爲佐々木家犬追物之古實者、蒙仰爲撿見、犬五十疋、(小、大)政經參上御所畢、
文明十二庚子年、政經(于時大夫)被加御相伴衆訖、長享元丁未年七月、將軍義尚公大將拜賀參內之時、政經辻々固之畢、(其人數細川右京大夫政元、畠山尾張守尚順、山名右衞門佐政豐、細川上總介勝久、同淡路二郎尚春、武田大膳大夫宗勤、富樫介政親等也、)同年六角四郎高頼再三背御下知、依之爲征伐、九月廿日、將軍家(義尚公、)發向于江南、張陣於坂本給、政經供奉之、
當家數代忠功依異于他、爲動功賞、重賜佐々木一家大總領職之御證文、其文曰、

佐々木大總領職事者、建武年中任御判旨、領掌不可有相違之狀如件、
延德三年　月　日　　(足利)義材御判

大膳大夫殿

明應元壬子年八月、將軍家(義材公、)發向于江南之時、政經供奉之、
同三甲寅年、六角高頼侵江北之境、仍及合戰云々、
文龜元辛酉年六月、江南江北合戰之時、伊吹彈正、上坂彈正、上坂治部等有戰功云々、
同二壬戌年十月廿三日卒、行年五十、戒號栖雲寺殿巨川宗濟、

〈列國譜〉(三京極)　治部少輔政經出雲に在國し、文明十三年五月、年始の獻物、東山(足利義政)殿へ太刀千疋、上樣(義政夫人富子)へ千疋、(足利)義尚公へ太刀千疋を獻じ、十五年三月、まゝ年始の獻物あり、同月東山へ遷徙有しを賀して、太刀三千疋を獻じ、十八年、出雲より參洛して、父大膳大夫とゝもに出仕して、兩御所より謁見に、(親元日記、)延德三年五月、義稙將軍(六角)高頼征伐の先陣承て進發し、明應元年、將軍まゝ近江に出陣し給ひ、高頼伊勢に(伊勢)貞宗を亭にて拜謁も、二年閏四月、河內征伐より從ひ、堺の浦まで、根來衆及紀伊の敵を防き、正覺寺の軍變して、細川政元敵方にかこまれしかい、(政經ノ誤)持清も政

文龜二年卒ストノ說傳記

佐々木家犬追物

相伴衆ニ加ヘラル

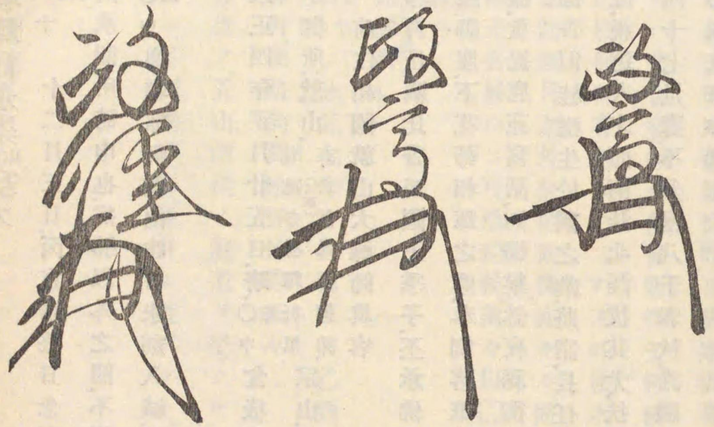
佐々木總領ト爲ル

元とおなしく、政長をせめ亡し、五月歸洛し、新將軍家（義澄）ニ謁ス、太刀萬疋を獻ス、（蔭涼日錄、季世記、）後事詳ならス、（案に、系圖に、政經をしめ政高といひ、大膳大夫ニ任し、侍所たり、病身により、京ニ所司代を置て、その身ハ在國をといふ、此事正しきものに所見なし、よていま注文ニ附をといふ、）

○幕府、政經ヲ出雲、隱岐、飛驒ノ守護ト爲スコト、文明三年閏八月二十一日ノ條ニ、政經、飛驒國司姉小路基綱等ヲ逐フコト、同五年十月十一日ノ條ニ、近江ノ守護ト爲ルコト、同五年十月三十日ノ條ニ、尼子經久ニ出雲美保關公用ヲ徵スルコト、同六年十一月十七日ノ條ニ、又經久ニ出雲生馬鄕利弘保、竝ニ阿陀加內青木分等ヲ安堵セシムルコト、同月二十九日ノ條ニ、幕府、政經ヲシテ、延曆寺僧徒ヲ援ケ、六角高賴ヲ擊タシムルコト、同七年八月六日ノ條ニ、大膳大夫ニ任ゼラルヽコト、同十八年七月二十五日ノ條ニ、孫吉童子丸ニ、惣領職、出雲、隱岐、飛驒ノ守護職等ヲ讓ルコト、永正五年十月二十五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕（キ之部）京極政經



○佐々木文書（一周防）
文明三年九月二十一日書狀

○同上
十月十七日書狀

○日御崎神社文書（二出雲）
十月十八日書狀

五日、戊辰、相國寺聯輝軒永崇就山寂ス、

〔實隆公記〕三十 九 十二月三日、丙寅、晴、終日念誦、早朝相公羽林詣聯（永崇）輝軒、彼軒病病以外之由承間、所訪申也、病躰以外之間、不謁給云々、驚入者也、

六日、己巳、晴、〇略中抑聯輝軒就山昨日未刻入滅、四十七歲、自少年知己、哀慟無極者也、

〔宣胤卿記〕永正四年正月廿五日、晴、〇略中食後著衣冠參內、御月次和漢聯句御會也、出御小御所、就山、相國寺聯輝軒黑衣、式部親王御弟、宗山、同前、就山御弟、萬松軒、

〔翰林葫蘆集〕前住相國就山大禪師眞容

宗嗣赤縣、姓尊青丘、竊比香至國王季子、丕承佛日帝師孫謀、風吹仙衣、入桃源常德之府、日照御座、下花蓼相輝之樓、奉制落筆九天上、投閑讀書五更頭、逐花隨草春意契機、重提鹿苑舊話、刻燭擊鉢夜聯衙口、猶憶龍翔同遊、戒體如蓮花不爲泥所染、德香似桂樹生於磵之幽、將謂長任僧錄〇鹿苑院ニ住スルコト、詳ナラズ、以左街右街御正厥位、親選人才而南涯北涯拔其尤、扶樹大法、黼藻宗猷、邈然如許、老矣也休、纔數四十七世壽、不多兩八千春秋、誰識法身本無相、丹靑畫出使人愁、

〔實隆公記〕〇永正五年七月九日裏文書

三回忌

立秋佳節雅席納凉御床敷候、抑昨日武家御昇進珍重候、〇義材、權大納言ニ任ゼラルヽコト、七月一日ノ條ニ見ユ、先日ハ舊官委細注給候、忻懌至極候、御昇進官位可注給候、諸寺院へ自當院□□觸候條、存知候ハヽ不叶候、次一夕徒歩よて來話所希候、不斷戀岡對几案語風月之外無他候、憐察々々、將又漢書帝紀新卷御本一二卷可申請候、無御差合候ハヽ可借給候、萬々以□□可述意緒候也、不宣、

永崇（花押）

（永正五年）立秋日

（三條西實隆）聽雪軒 几下

〔實隆公記〕四十 三 永正七年十二月三日、乙酉、晴、明後日就山第三回也、爲燒香相公參聯輝軒、便路向萬松宜竹等云々、

〇幕府、永崇ノ、五山僧徒ノ贈遺ヲ受クルヲ禁ズルコト、文龜三年九月是月ノ條ニ、足利義澄、聯輝軒ニ遊ブコト、永正三年三月五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕釋家之部 永崇

永正五年十二月五日

花押

六日、己巳、幕府、善法寺興清ニ、石清水八幡宮領伯耆山田別宮ヲ安堵セシム、

〔菊大路文書〕三〇山城

石清水八幡宮領伯耆國山田別宮之事、當知行之處、近年有名無實云々、早任奉書之旨、彌被全領知、可被專御祈禱之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正五年十二月六日　　前丹後守（松田長秀）　花押

沙彌（諏訪貞勝）　花押

善法寺雜掌

幕府、伊勢貞宗ヲシテ、訴訟ノ事ヲ掌ラシム、

〔實隆公記〕三十九　十二月六日、己巳、晴、季綱（阿野）朝臣早朝來臨、武家雜訴事、貞宗（伊勢）

○實隆公記永正五年七月九日裏文書

（永正五年）立秋日　永崇書狀

朝臣每時可存知云々、珍重々々、

八日、辛亥、禁中觀雪ノ宴アリ、

〔實隆公記〕三十九　十二月八日、辛未、雪降雪御賞翫可參之由、自女中有催之間、携一桶參內、中御門（松木宗綱）新大納言、新中納言（豐尾）隆康朝臣、雅業（日川）等候之、御盃六獻、沈醉退出了、

十一日、甲戌、細川政賢ノ第、火アリ、

〔後法成寺尚通公記〕三　十二月十二日、乙亥、去夜、典厩（細川政賢）在所火事、不殘一宇也、

十四日、丁丑、義尹、酒饌ヲ獻ズ、

〔實隆公記〕三十九　十二月十四日、丁丑、晴、略○中　今夕可參候之由、有女房奉書、仍參內、自室町殿、御折御樋等被進上之、爲御賞翫也、季綱（阿野）朝臣爲御使之間、被召加之、於三間有一獻、三獻予候御酌、五獻天酌、六獻引重獻之、供御之外季綱朝臣候御酌、取替也、其後又有御盃、公條（三條西）卿候御酌、以外沈醉、夜漏闌後退出、

義尹讀書始、

〔實隆公記〕三十九　十二月十四日、丁丑、晴、略○中　今日室町殿御讀始、宣賢（舟橋）候之、

舟橋宣賢論語ヲ講ズ

論語序記、諸善言マテ申云々、銀釼(劍)給之、依無御平轄、銀釼也、後日可給代物云々、伊勢守於御前給之云々、御馬同拜領云々、宣賢狩衣也、主人御直垂云々、

〔足利家官位記〕惠林院殿　義稙　始義材、又義尹、慈照院贈太政大臣爲子、實大智院義視卿男、同年(永正五年)十二月日、御讀書始、

三條西實隆不參

十五日、戊寅、曇、華院尼(義視ノ女)參內ス、

〔實隆公記〕三十　九　十二月十五日、戊寅、雨、曇、花院殿今日御參內云々、御上洛後初度也、

〔實隆公記〕三十　九　十二月

○義視ノ女、曇華院元揉尼ノ弟子ト爲ルコト、文明九年七月十九日ノ條ニ見ユ、

十六日、己卯、禁中田樂アリ、

〔實隆公記〕三十　九　十二月十六日、己卯、陰、今日有田樂事云々、自勾當內侍可參之由、內內雖被示之、申所勞不參、

十九日、壬午、晴、今日田樂事可參入之由、雖被仰不參、

○十九日、田樂ノコト、便宜合敍ス、

十八日、辛巳、勘解由小路在重ヲ治部卿ニ任ズ、

〔實隆公記〕三十　九　十二月十八日、辛巳、雪、○中略　在重朝臣(勘解由小路)申治部卿事、今日勅許、則申職事秀房(萬里小路)了、

十九日、壬午、幕府、南御所ニ、同所領河內十七ケ所ノ地ヲ安堵セシム、

〔寶鏡寺文書〕六　○山城

河內國十七ケ所當寺御料所事、任御當知行之旨、彌可令全領知給之由所被仰下也、仍執達如件、

永正五年十二月十九日　　對馬守(松田英致)(花押)
　　近江守(飯尾貞運)(花押)

南御所雜掌

興福寺喜多院空覺ノ附弟空實得度ス、

〔永正元年記〕永正五年　十二月、

一十九日、○中略　今夜喜多院附弟得度、實名空實(德大寺實淳)　太政大臣(太政大臣)十五才、云々、

二十二日、乙酉、權大納言中御門宣胤ヲシテ、朝倉貞景ヲ諭シ、禁裏御料所越前河合莊ノ貢租ヲ納メシメラル、

〔宣胤卿記拔書〕十二月廿七日、○中略　去廿二日之記女房奉書到來、越前御料所河合庄

宣胤返書

近年緩怠ス

貞景部下ノ緩怠

甘露寺元長第ニアル貞景室

事、御返事在左、

かしこまりてうけ給候、仰乃おとく、久しくしこう仕候ハて、所存れ外ニ存候、今度歡樂仕候て、おを〳〵老くつ仕候、昨日ハ御番ニ祇候仕候て、御料所れ事も申入候ハんもるよし、うけてハ存候へハ、御神樂れ御神事ニ、きやうふくの事ニて候程ニ、万いり候ハて、所存れ外ニ、越前（候脱カ）御料所れ事、さゝめて（元長）うんろしにも、やかて仰られ候らんと存候へハ、いまさ仰候ハぬやうニ仰候、おとろき存候、さ候程ニ、ゆさくしより人をくさし候ニ、近年くハんさいれ事ニて候程ニ、申へきれ事しさい申候、さゝめてくさう上使を下され候ハんもるよしを申候て、まつをとし候て、あおされ心（えカ）えれやうをも見候へ、もしおとろき候て、いつものふんをもさゝし候て、うけとり候へ、ちともえしんも候ハゝ、おうけとり候そと、申つきて候、あさくらハくハんさい候ハぬを、しさ〳〵ニてふさゝ仕候程ニ、さやうニまつをとし候て見候へと、申て候らんとれ世のけちめニ、ちとけニ〳〵と、うハ事候むきを候ハてハと存候、うやうニ申入候も、御をう所万いり候やうにと存候心中候、さ候程ニ、うんろし申くさし候ハゝ、しうほへく存候、あさくらハ女房う母、甘露寺所

ノ母ニ書状ヲ托スベシ

年始公事再興ヲ望ム

三千疋獻上

こ候程ニ、さい〳〵ニ、ひんきも候よし申候、文しさゝめて（らし）、とく仰候ハゝ、しかほへく存候、年始の公事御さいこうれ御さゝも候へうしと、老後れ宿望候、御料所うへり候ハぬ御事も、推量をいさし候、ゆさくしにもかされとくの知行にしの七條やきハらひ候て、一ううにとしは候ましきよし申候、めいゆく仕候、よろつしこう仕候て申入候へく候、これよし御心え候て、御ひろう候へく候、しゆ

ゑちせんれ御料所河合れ事、あさくらおや氏景、せんてうにしん上仕候へきよし申を候ニつきて、うそうれ事とし〳〵仰いささを候へとも、三千疋おらてハ、しん上仕候ハも候事、申とゝきも候ハぬやうニ仰られ候、めいゆく仕候、きつく三千疋さへ、一兩年ハあくるとし秋ニなり候て（らし）、武家れ御代かハりにて候へハ、さゝめていつうさへを仰いさされ候ハんもる程ニ、ゆさくしれ申へ事ハ、しさい申入候、御心得候て御披露候へく候、うしこ、

勾當内侍とのらう　（中御門）れふ胤

永正五年十二月二十二日

○宣胤ヲシテ、朝倉氏景ニ諭シ、越前御料所ノ貢租ヲ納メシムルコト、文明十八年六月是月ノ條ニ見ユ、

二十三日、丙戌、内侍所恒例及ビ臨時御神樂、

〔公卿補任〕四十五　十二月廿三日、内侍所御神樂、

奉行萬里小路秀房

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲百五十二　御ゟくらの事　文龜より天文まて假名記

一同年（永正五）十二月廿三日、御ゟくらおこなハるゝ、ふ行ひてふさ（萬里小路）、御きんりしのおの中將（隆康）、御きん、御きよ、御しやく、中山の頭中將（康親）、御さうゟいひてふさ、しそく大内き（五條爲學）、とく少將（白川雅業）、ちゝやうゐんの侍從もろなゟ、御とも大もけとの、しん内侍との、こくけんの御内いつものとし、さいせんしき御くられ事よ、いさゝゟちゝして、四のもたよしつきよなり、七のすきよもる〳〵とさつる、めてさし、ゟく人さんしやうよあり、ゐうしやうやふ（範久）、同宰相中將（四辻公音）、りしのおの中將所さ人なり、こくけんよ雨ふりてうきよてあり、

所作人雨儀

〔京都御所東山御文庫記錄〕宸翰掛引繼第十八番第二號ノ十二　四方拜竝御神樂之事

永正五年十二月廿三日、御ゟくら、ふ行ひてふさ、御きんわしのおの中將、御きん、御きよ、御しやく中山の頭中將、御さうゟいひてふさ、しそく大内き、とく少將、ちゝやうゐんの侍從もろなゟ、御とも大もけ、新内侍殿、大せんしき御くうの事よつきて、いさゝゟちゝして、四のもたよしゆつきよなる、七のもきよする〳〵とさつる、めてさし、ゟく人さんしやうよあり、ゐうしやうやぬ、同宰相中將、りしのおの中將所さ人なり、

〔實隆公記〕三十九　十二月廿三日、丙戌、晴、入夜雨降、明重（半井）朝臣來、今夜内侍所御神樂也、藏人右少辨秀房申沙汰也、於此亭著裝束、永宣（裕泉）卿刷之、蘭臺送一桶之間勸一盞了、○中略、四辻公音奏慶ノコトニカヽル、七月十六日ノ條ニ收ム、御神樂出御、職事頭中將康親朝臣、右少辨秀房、脂燭殿上人爲學朝臣、雅業、基親（持明院）、源諸仲（五辻）、典侍、大納言（勸修寺藤子）典侍、掌侍、新典侍云々、所作人公音（四辻）朝臣、和歌、本拍子隆康朝臣、其外地下云々、恆例和琴陪從新參多氏者云々、雨儀於日花門下被行之、臨時一座了還御云々、隆康朝臣候御劍云々、相公羽林候番、

職事中山康親

日華門下ニテ行ハル

〔宣胤卿記拔書〕十二月廿三日、内侍所御神樂、奉行藏人右少辨秀房、御劍隆康朝臣、脂燭爲學朝臣、雅業、源諸仲、職事頭中將康親朝臣、候御裾、秀房等參云々、所作人散狀、

所作人散狀

内侍所臨時御神樂

内侍所御神樂

永正五年十二月二十三日　三六三

所作人
本拍子
四辻新大納言
末拍子
隆康朝臣（鷲尾也、）
付歌
忠時
篳篥
安倍季音
笛
景通（笛ハ篳篥ノ上ニ可書也、）
和琴
公音朝臣
人長
安倍季敦

所作人
本拍子
隆康朝臣
末拍子
忠時
付歌
久泰
篳篥
安倍季音
笛
景道
和琴
多久盛
人長
安陪（倍）季敦

近衞召人　近衞ノ召人ハ、人長ノ上ニ可書也、
多久盛
久泰

幕府、曾我元助ニ、其總領職及ビ諸國散在所々知行分等ヲ安堵セシム、

〔和簡禮經〕上（目錄在別紙、）

惣領職幷知行分諸國所々事、早任去年七月十三日同名平次（敎助）譲状之旨、可被全領知之由所被仰下也、仍執達如件、

永正五年十二月廿三日　　下野守（飯尾之秀）判
左衞門尉（遊佐貞豪カ）判

曾我又次郎（元助）殿

大友親治、豐後賀來社ニ、同國田北村ノ地ヲ寄進シ、祭禮ヲ營マシム、

〔柞原八幡宮文書〕五（大友十六世）○豐後

前豐前守政親代於田北村、雖令勸請賀來社八幡大菩薩、依無祭禮之法、田北御神領除本帳之内（坪付在別紙之、）妄、令寄附訖、不增豐年、不減凶年之、祭祠（祀下同ジ）、不可有闕如狀如件、

永正五年十二月二十三日

右惠林院殿義稙御代、號嶋ノ御所、

永正五年十二月廿三日　大友十八世　源備前守親治(花押)

實相寺等玉禪師

十箇度祭祀

文明十八暦、丙午、於田北村御神領、故大守政親雖奉勸請由原八幡大菩薩、更無祭祀之法焉、於茲府君親治任御下知之旨、由原當社以一躰也、然者御神領内帳迦七斗六升蒔、參ヶ所在之、彼土貢可爲壹石、升五入、不綺風旱水損、請取定米、年中十箇度可執行祭祠云々、夫拾箇度者、則

正月三ヶ日、幷七日、十五日、　三月三日、

五月五日、　八月十五日、

九月九日、　十二月十四日是也、

右可爲税所寶積寺、若有怠慢之儀者、可改易者乎、仍爲末代裒書如件、

永正五年戊辰十二月廿四日　社奉行實相寺　等玉(花押)

大神(親照)　左衞門大夫(花押)

本庄(繁榮)　伊賀前司(花押)

坂折(新左カ)　□□衞門尉(花押)

興福寺ニモ閉門センコトヲ求ム

開門

義興歸國ノ後渡サントス

一萬田　治部大輔(花押)

朽網　兵庫頭(花押)

○政親、田北村ヲ賀來社ニ寄進スルコト、文明十八年三月六日ノ條ニ見ユ、

是ヨリ先、大内義興、東大寺領周防國衙ヲ横領ス、是日、東大寺、寺門ヲ閉鎖シテ、之ヲ訴フ、

〔永正元年記〕永正五年　十二月、

一廿三日、東大寺閉門、付大内左京大夫、爲訴訟云々、

大佛之鐘不搥之、當寺(興福寺)へも雖及牒送、不能閉門、

〔永正元年記〕永正六年　二月、

一二日之夜東大寺開門云々、珍重々々、

〔春日社司祐彌記〕二月二日、

一今日東大寺開門候了、

〔實隆公記〕三十九　十一月廿七日、辛酉、晴、○中略信花坊來、周防國衞事(衙下同ジ)、大内歸國之後可渡之由、今日稱之、東大寺忽滅亡之基也、迷惑之由談之、

勘解由小路在重三條西實隆ニ諮ル

國衙ヲ東大寺ニ還付スベシ

〔實隆公記〕四十　永正六年一月六日、己亥、晴、在重朝臣來、東大寺訴訟周防國衛事(衙下同ジ)、不可然之儀也、此事可令入魂大內之趣、內々舊冬相語、件事有相談之旨、

十五日、戊申、晴、○中略抑周防國衛事(衙下同ジ)、東大寺々訴議不可然之間、可廻籌策之由、在重朝臣相談、問田(弘胤カ)書狀今日到來、仍調書狀、明曉可差下南都之由報了、

廿日、癸丑、晴、○中略南都使節西春上洛、周防國衙之事、在重有相談之旨、自阿野有使者、被送美物兩種、

廿二日、乙卯、晴、○中略在重朝臣早朝送使者、今日南都使者同道可向問田宿所、其間之儀、參此亭可申合云々、諾之處、午前來、所存之旨示之、則南都使者可罷向問田許之由申含了、及晚彼朝臣又來、南都使者同來、所詮任寺門申旨、於國衙事者、可申付之由也、尤神妙、明朝早々使者下向、可相調大衆之群議之由申含了、且以重種(庭田)朝臣奉書遣信花坊了、在重朝臣又書狀也、

廿六日、己未、晴、南都使者上洛、年預五師書狀、信花坊狀等委細令披見、所詮明旦可令持向在重朝臣許之由、申付使者了、

廿八日、辛酉、晴、○中略及晚在重朝臣來、南都東大寺領周防國衙事可去渡之由、

義興國衙領還付ノ書狀ヲ實隆ニ送ル

大內書狀送賜予許者也、此儀如法雖斟酌、先以領納、南都使者同召寄之相談、及晚調書狀、明日使節早朝可下向之由也、此間事不能巨細注之、

二月三日、乙丑、晴、○中略南都使者上洛、昨夜已大佛殿、八幡宮等開門之由注進、尤珍重、則以奉書申遣在重朝臣許了、

四日、丙寅、晴、早朝在重朝臣來、罷向大內許、南都返事可申云々、巨細申含、小時歸來、尤大慶之由有返答、午後問田大藏(弘胤)少輔來、彼間之儀尤大慶之由謝之、南都粗返事申下了、

○義興、國衙領ヲ東大寺ニ還付スルコト、六年四月十三日ノ條ニ見ユ、

二十四日、丁亥、足利義尹ニ諭シ、前左大臣花山院政長ノ罪ヲ赦サシム、是日、政長、義尹ニ謁ス、

〔實隆公記〕三十九　十二月十九日、壬午、晴、○中略抑花山院前左府(政長)武家參賀事、自禁裏御口入之儀、女房奉書被下之、季綱朝臣可申談之由也、

廿日、癸未、晴、○中略花山事、以書狀申遣阿野許了、

廿二日、乙酉、○中略抑花山前左府武家御對面事、勅定之上者、不可有子細之由、今日阿野以書狀申送之間、其旨又以書狀申入了、

政長謝禮ノ條ノ爲メ三條西實隆ヲ訪フ　實隆阿野季綱ニ依リテ幕府ニ說ク

廿四日、丁亥、晴、風吹、入夜雪降、令掃煤祝著之儀如例、花山前左府今日初而被參室町殿、御對面云々、稱禮被來此亭、掃煤之間不謁申、尤遺恨也、今度彼出頭事、以女房奉書內々被仰談、愚身付阿野申武家了、其間事不能記之、

廿五日、戊子、雪數尺積、〇中略早朝以書狀謝花山昨日來臨了、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲後柏原院御記百五十　永正六年正月廿四日、自花山院茶垸石鉢引合十束被進、今度武家へ參賀之事、予口入之禮云々、

〇政長ノ罪ヲ赦サル、コト、六月十六日ノ條ニ見ユ、

二十六日己丑、幕府、河內傳宗寺ニ、同寺領ヲ安堵セシム、

〔森川文書〕〇山城

御祈願寺河內國傳宗寺同寺領事、雖善法寺雜掌有申子細、去延德二年九月廿一日御判幷奉書等炳焉之上者、被返付之畢、如元寺家全領知可被專御祈禱之由、所被仰下也、仍執達如件、

（追筆）〔遍林院カ〕〔法住寺殿〕

永正五年十二月廿六日　　近江守（飯尾貞運）（花押）

丹後前司（松田貞秀）（花押）

當寺住持

越階消息宣下

足利義滿ノ例ニ依ル

一條冬良ノ意見ニ依ルベシ　五條爲學位記持參

用脚期ニ合ハザルニ依リ陣ノ儀ナシ

上卿松木宗綱　取次白川雅業

二十七日、庚寅、從三位足利義尹ヲ從二位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十五　權大納言從三位源義尹、四十三、十二月廿七日敍從二位、越階、消息宣下、

〔實隆公記〕三十九　十二月十九日、壬午、晴、〇中略早朝季綱朝臣以使者彦部相談云、當月室町殿御加級、越階從二位、任永和御例、〇足利義滿、從四位下ヨリ從三位ニ敍セラル、コト、永和元年十一月二十六日ノ條ニ見ユ、有其沙汰、其間儀可爲如何樣哉云々、永和度被付小除目了、今度陣儀可爲難事行歟、消息宣下（五條爲學）右事可治定、大內記可令持參位記之事、此條者不可相替、常之儀砂金代等可有用意也、其外不可有別事哉之由報了、

（一條冬良）

廿七日、庚寅、晴、〇中略今日柳營御加級、從二位越階、永和御例也、御用脚不合期之間、不及陣儀、消息宣下也、此間之儀內々季綱（阿野）朝臣相談之間、愚意所存申了、頭中將康親（中山）朝臣宣下、上卿中御門（松木）新大納言宗綱卿也、大內記爲學（五條）朝臣持參位記、取次伯少將（白川）雅業、女房新兵衛督取入云々、參賀之儀如例云々、抑副使事、內記方更不可有此儀事也、近例掠申之儀也、此事委見建聖院（萬里小路時房）內府正長記者也、但今度猶副使出仕云々、內記錄沙金（砂）事等、大概如例云々、

昇進及ビ歳暮ノ禮ヲ兼ネ行フ

〔拾芥記〕中　十二月廿七日、天晴、室町殿御加級、自從三位令敍二位給間、今日未尅位記持參、束帶作法如常、爲消息宣下間不及陣儀、故予不帶劍、砂金代且五百疋自阿野被渡之、

〔後法成寺尙通公記〕三　十二月廿七日、庚寅、晴、今日武家昇進間、佳(賀)歳暮等之禮一度ニ可被申之由、時元(小槻)宿禰申間先參內、○下略

〔和長卿記〕二　十二月廿七日、敍位從二位給、大內記爲學朝臣持參位記了、今度消息宣下也、

〔室町家傳〕將軍家義材、改義尹、又改義稙、十二月廿七日、敍從二位、越階、消息宣下、奉行頭中將康親朝臣、上卿中御門新大納言、位記大內記爲學朝臣持參之、取次伯少將雅業、

〔足利家官位記〕惠林院殿　義稙始義材、又義尹、慈照院贈太政大臣爲子、實大智院義視卿男、同月廿七(永正五年十二月)日敍從二位、越階、消息宣下、

○義尹、從三位、權大納言ニ敍任セラルヽコト、七月一日ノ條ニ見ユ、

二條尹房元服、正五位下ニ敍シ、禁色昇殿ヲ聽サル、

〔公卿補任〕四十五　從三位藤(二條)尹房　永正五年十二月廿七日元服、十三才、同日正五位下、消息宣下、禁色、同昇殿、

尹房ト稱ス

東坊城和長名字勘進　冷泉爲廣第ニテ行フ　加冠一條冬良　理髮中山康親

輕服中著陣ハ不可

〔宣胤卿記拔書〕十二月廿七日、

二條ゟふ元服ゟて候、名字尹房候、正五位下ゟらひにきんしきれ事申さを候、御心え候て御披露候へく候、しもし、

勾當內侍とのへ御局へ　れふ胤(中御門)

〔實隆公記〕三十九　十一月廿一日、乙卯、晴、○中略伯二位來、二條元服事有荒增云々、當年十三歳、尤可然之事也、

十二月廿七日、庚寅、晴、○中略今夜二條若公十三才、首服、名字尹房、和長卿勘進云々、則被敍正五位下、不及陣儀、略儀也、於民部(冷泉爲廣)卿入道亭有此事、加冠一條前關(冬良)白、理髮頭中將康親(中山)朝臣、著座中御門大納言(宣胤)、扶持公卿忠富(白川)卿、脂燭殿上人雅(白川)業等云々、其間之儀可尋記之、直衣爲新冠、愚物被借用之間遣之、愚袍又借遣宣胤卿了、大內記(五條爲學)大帷、赤大口、中將(三條西實條)沓冠等借用、遣之了、

〔實隆公記〕○永正五年十二月十六日裏文書

○上略抑二條若公元服事、雖難事行候、先內々有增之由候、深隱密子細候、可得御意候、就其陣宣下奉行事、宣胤亡母喪復任以後、未遂著陣候、今度又輕服候、輕服中遂著陣事不可然候歟、先規不審存候、去辛酉(文龜元年)仗儀、甘露寺中納言(元長)重服

元服ノ時輕服著座ハ子細ナシ

義尹ノ名ニ依ル

本尊チ土佐光信ニ描カシム

一條兼良元服ノ例チ徵ス

參陣、改元定之時起座先規云々、復任之後不遂著陣候事如何、元服日輕服著座不可有子細候歟、御直衣御袍可申請候、恩許可爲恐悦候、直衣事新冠被拜加冠時用候、先規被申巨細候、當時不叶候、密々可申請候、但他之方便候歟、重可申候、○中略、全文ハ十一月二十日、小路師富卒去ノ條ニ收ム、

十二月七日　宣胤

〈實隆公記〉○永正五年十二月裏文書　首服在所上冷泉（爲廣）宿所分候、始終契約望候、是又難事行分候、先當日許歟由候、可被申武家名字分候、尚々御本尊可參謝候、

御本尊恩許恐悦難申盡候、御形像大概寫置、早令返納候、新圖出來候者可入見參候、申付土左（佐）（光信）候、兼亦彼首服廿七日分候、一向難事行樣候、敍品禁色可爲消息宣下之由候間、初例不可然候由申候ッ、桃花（二條雅良）前殿於南都元服候、若其時非陣儀候哉、亂中候、可被引勘之由申候了、又先日御札分申候、御悦喜候、祖母公一兩日出京候、先御歸候歟無音候、諸篇難周備分候、旁期參拜存候、恐惶謹言、

十二月十二日　宣胤

上卿中御門宣胤東坊城和長

參賀ノ人々太刀チ贈ル

三條殿

〈後法成寺尚通公記〉三　十二月廿七日、庚寅、晴、○中略（衆書）「二條若君元服事」

一條前關白加冠云々、著座上卿中御門大納言、（東坊城和長）菅中納言兩人云々、此趣一條相語、猶可尋記、一條冠大帷等借用之、冷泉入道（爲廣）在所元服云々、屏風等借用遣之、實名尹房云々、

〈二條家譜〉尹房（號後大染金尚基男、）永正五年十二月廿七日元服、十三歲、同日敍正五位下、（消息宣下、聽禁色昇殿、○諸家傳異事ナシ、）

○尹房侍從ニ任ゼラルヽコト、六年正月十六日ノ條ニ見ユ、

公卿等、幕府ニ歲暮チ賀ス、

〈後法成寺尚通公記〉三　十二月廿七日、庚寅、晴、今日武家昇進間、佳（賀）歲暮等之禮一度ニ可被申之由、時元（小槻）宿禰申間、先參內、次曇花院、入江等ニ參申、次參大樹、一條下官、直垂衆十人計也、今朝花山（政長）院、中御門等令參賀、有對云々（面脫カ）、

〈和長卿記〉ニ　十二月廿七日、○中略　今節歲末御禮之人々御太刀進上云々、

幕府、東寺チシテ、二星合チ祈禳セシム、

永正五年十二月二十七日

〔東寺百合文書〕コ一之十四 ○山城

「東寺年預御房（包紙）　對馬守英致」

二星合御祈禱事、殊可被致精誠之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正五年十二月廿七日　（松田英致）對馬守（花押）　（齋藤基雄）美濃守（花押）

東寺年預御房

幕府、東寺内實相寺ヲシテ、同寺領九條照明寺田ヲ所務セシム、

〔東寺百合文書〕ニ一之二十五 ○山城

九條照明寺田事、被寄附當寺内實相寺之處、收納以下有名無實云々、太無謂、所詮爲寺家嚴密被執沙汰之、可被全彼雜掌所務之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正五　十二月廿七日　（齋藤）基雄（花押）　（松田）英致（花押）

東寺雜掌

幕府、山城廬山寺栖賢庵ニ、同庵領山城大原内花尻名、同賀茂水田、及ビ

收納等有名無實

上北小路大宮南東頰角屋地等ヲ安堵セシム、

〔保阪潤治氏所藏文書〕二 ○越後筆陣二

廬山寺塔頭栖賢庵領山城國大原之内花尻名、同國賀茂水田參段半、幷上北少路大宮南東頰角屋地丈數在本券、等事、任證文之旨、早可被全領知之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正五年十二月廿七日　（諏訪信佑）沙彌（花押）　（齋藤基雄）美濃守（花押）

當庵住持

是ヨリ先、山城勸修寺門跡、山科言綱ト山科ノ地ヲ爭ヒ、幕府ニ訴フ、是日、幕府、言綱ノ違亂ヲ停メテ、之ヲ同門跡ニ安堵セシム、

〔勸修寺文書〕二十三 ○山城

一勸修寺宮門跡雜掌謹言上

右子細者、山城國山科鄕内所々ニ散在田地、當寺鎭守八幡宮領事、帶數通證文、數百ヶ年當知行無相違之處、先御代仁自山科家被申掠之間、理運之通依申披、御下知被成下之處、猶以違亂之條、爲御糺明、及三問三答、寺家理

勸修寺門跡初度申狀　勸修寺八幡宮領ハ數百ヶ年知行ス

永正五年十二月二十七日

山科家支狀
後白河院御影堂領
山科鄕ハ山科家ノ知行
勸修寺雜掌奉書ヲ掠ム
中間狼藉法ニ依リ山科家知行ス

永正五年十二月二十七日

運不相紛之段、既意見狀相調被備上覽之處、有御披見、可被成下御下知之由被仰出、數日被打置、剩山科家江被成御下知之條、不便之儀迷惑至極、其時意見狀案文同支證等捧之、然間八幡宮日御供年中度々御祭禮、堂社之勤行、佛供燈明以下令退轉者也、所詮憲法之以御成敗任理運之旨、被成下御下知者、彌爲致天下安全御祈禱丹誠、仍粗謹言上如件、

永正五年八月日

山科家雜掌謹支言上

右子細者、後白河院御影堂領、山城國山科鄕之內、東西庄諸散在事、先御代捧數通之證文、就歎申仁、理運之被聞召分、一圓被返付之、被成下御判、知行之處、勸修寺御門跡雜掌被掠給奉書之條、重依申上子細、被置所務於中、御糺明之半、御門跡雜掌被押取年貢之條、任中間狼藉之御法、被成下御下知、于今當知行之地也、然今度御門跡雜掌種々儀依掠申之、爲御糺明被置所務於中之條、不便之至也、所詮被退彼妨、任證文幷當知行之旨、領知不可有相違之段、被成下御下知者、忝可畏存者也、仍謹支言上如件、

勸修寺門跡第二申狀
山科家支證ノ後白河天皇御影堂領ハ格別ノ地
中間狼藉ノ實ナシ
山科家第二支狀

永正五年十月日

勸修寺宮門跡雜掌謹重言上、

右山科家被支申分者、後白河院御影堂領事、此方不存上者各別之地歟、當寺八幡宮領於山科鄕東西庄之內所々散在入組地者、保元保安古帳、永曆官符、文和御判、嘉慶明德御敎書、殊者東山(足利義政)殿樣御自筆御書、其外帶數通證文等、數百ヶ年當知行無相違之處、先御代仁被致奸訴之間、依歎申、爲御糺明被訪意見之處、門跡理運之段一同之意見狀見之訖、仍中間狼藉之事、一向無覺悟之處、以內儀被掠申、一方向仁被成御下知事、不便之至也、所詮任理運之旨、被御成敗者、彌爲致天下泰平御祈禱、粗謹重言上如件、

永正五年十月日

山科家雜掌謹重支言上、

右如勸修寺御門跡雜掌申狀者、後白河院御影堂領事、此方不存知上者、各別

永正五年十二月二十七日

永正五年十二月二十七日

之地歟云々、於此在所者、當家本領之間、無存知段勿論也、次御門跡之證文者、保元保安古帳、永曆官符、以此等之旨、被掠給御敎書幷御內書者歟、不足信用、當家本領之上者、被召出御門跡雜掌、相傳之本文有御糺明者、可爲顯然者乎、或號買得、或稱寺社寄進、方々競望之族、無謂之條、爲一圓進止之地、可全領知之旨、公武證文明白也、次先御代被訪意見之處、御門跡理運之段、一同意見之訖云々、意見事者、雖爲一兩輩、於有意趣者、所存之通別被捧意見狀之旨、先々在之由、承及之、況意見衆數輩不參之處、一同之儀與被掠申之條、恣言上歟、次中間狼藉事、一向無覺悟云々、爲御糺明被置所務於中之處、御門跡雜掌被押執年貢之旨、百姓註進狀在之、既被背御法之條、被成下御下知、當知行之上者、爭可被及異論者乎、此等之趣被聞召分、被退彼妨、爲被成下嚴重之御成敗、粗謹重支言上如件、

永正五年十一月　日

勸修寺宮門跡雜掌重而謹言上、

當寺鎭守八幡宮御神領、城州山科鄕東西庄之內、所々散在入組等事、山

科家重被支申掠條々、

一後白河院御影堂領事、如先度申上、此方一向不致存知者也、於當寺領八幡田、新八幡田、大宅寺新御領以下諸散在者、保安以來被書載數通之證文、數百年致知行、他之手仁渡事、曾以無之上者、不混彼御影堂領之段、歷然明白也、若被知行勸修寺領支證在之者、可被召出者哉、

一當門跡證文等事、以保元保安古帳、永曆官符此等之旨、掠給御敎書幷御內書者歟、不足信用云々、既自往古之證文、手繼御代々御判、御敎書、御下知等、只今備上覽之上者、彼方申狀卒爾之至、以外之爲過言者歟、山科家被號本領、支證不分明者濫吹申事也、以八幡田被混御影堂領、被掠申之段、無謂第一歟、

一先御代被訪意見之處、當寺理運之段、一同意見狀仁見之由申上之處、彼雜掌如申者、雖爲一兩輩、於有意趣者、所存之通、別被捧意見狀之旨、先々在之由、承及云々、既數輩有評諚連判之上者、何非一同之儀哉、不參人數無判形事、不限此訴陳者歟、若別意見狀在之者、可被出對也、

一中間狼藉事、百姓一行在之云々、各被捧意見狀而後、相語彼家領之百姓、被

永正五年十二月二十七日

下知狀

掠申之條、恣言上也、

一當寺八幡宮者、仁壽三年九月廿一日卯一點之御影向也、爲三社准據異于他鎭守也、如此御神領、於山科家被企奸訴事、言語道斷次第也、

右條々、肝要者意見狀ニ具見畢、所詮理運之旨、嚴重被成下御成敗者、彌可爲御祈禱之瑞(禮)一者也、仍粗重謹言上如件、

永正五年十一月　日

如此重而被遂御糺明、被成下御下知訖、於末代永山科家可爲訴訟斷絶者也、

一當門跡領城州山科鄉東西庄內、八幡、新八幡田、大宅寺新御領所々散在田畠山林等事、先御代山科家掠給之間、今度糺明之處、云度々證文明鏡、云先度淵底意見狀、理運之上者早退山科家競望、如元被全領知、可令致御祈禱精誠給之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正五年十二月廿七日　　(松田英秀)對馬守判

(松田長秀)前丹後守判

勸修寺宮門跡雜掌

一城州宇治郡山科之內、勸修寺宮御門跡領之事、舊冬被成御下知之上者、不及是非候、殊安祥寺分之儀委細存其旨候、然上者彌可被全御知行事專一候、恐々謹言、

(永正六年)壬八月十二日　　伊勢八郎　貞就判

勸修寺御門跡雜掌

○勸修寺門跡、山科家雜掌ト、山科ノ地ヲ爭フコト、文龜二年九月是月ノ條ニ見ユ、

越後守護上杉定實、同國長松院及ビ諸末寺領ヲ、郡司不入ト爲ス、〔上杉古文書〕十　○羽前

當院領幷諸末寺領、可爲郡司不入之狀如件、

永正五年戊辰十二月廿七日　　(上杉)定實(花押)

長松院

○長尾爲景、長松院及ビ其末寺領ニ、課役ヲ免ズルコト、七年八月九日ノ條ニ見ユ、

元信ノ祈願寺

若狹守護武田元信、同國根本神宮寺ニ、諸課役等ヲ免除セシム、

〔神宮寺文書〕乾 ○若狹 (武田元信)(花押)

若州根本神宮寺依爲彥(元信)次郎殿御祈願寺、諸役事被免除畢、此通各令存知、彌勤行等任先規、無相違可被守護伽藍之旨、可申由候也、仍執達如件、

永正五年十二月廿七日　右京亮(花押)

左京亮(花押)

神宮寺年預坊

二十八日、辛卯、前關白近衞尙通、子某(道增)ヲ、聖護院道興ノ附弟ト爲ス、

〔後法成寺尙通公記〕三　七月三日、己亥、晴、小雨濺、○中略備後來、令對面勸一盞、內々小童事、聖門(道興)弟子ニ申定之儀也、

八月十二日、戊寅、晴、聖護院江罷向也、先度及度々日來間、爲其禮也、三荷三種送之、有五獻、

附弟タルコト略定マル

十三日、己卯、晴、○中略從聖門、以書狀昨日罷向事、祝著被申送之、小童大略弟子分、

十二月十八日、辛巳、晴陰、時々雪降、○中略備後花臺院御返事持參也、御附弟事不可有疎略由申之、

十九日、壬午、晴陰、雪飛、若王子へ聖門附弟之事申遣處、得其意由有返事、心中念誦如例、

廿八日、辛卯、晴、○中略從聖門有狀、附弟事領義也、

聖護院道增

〔華頂要略〕百四十三 諸門跡傳第四 園城寺聖護院 道增准三宮(近衞)後法成寺關白尙通公息、母太政大臣實淳(德大寺)公女、准子、四十四才、

法務大僧正、三井長吏、三山撿挍、新熊野撿挍、天文廿一(イ廿年)年九月二日寂、

二十九日、壬辰、關白九條尙經、山城隨心院門跡ト、光明峯寺領同國小鹽莊ヲ爭ヒ、之ヲ幕府ニ訴フ、

〔田忠敎忠氏所藏文書〕乾

九條關(尙經)白家雜掌申、光明峯寺領城州小鹽庄事、可被遂御糺明之間、置所務於中、可被明申候由被仰出候也、仍執達如件、

永正五 十二月廿九日　貞運(飯尾)花押

尙經夫人三條西實隆ニ諮ル九條道家置文

實隆意見ヲ述ブ

隨心院門跡支狀

道家ノ寄進以來寺務進止ス

隨心院門跡雜掌　英致(松田)花押

〔實隆公記〕三十九　十二月廿一日、甲申、晴、〇中略九條北政所來臨、光明峯寺領事、有示給旨、峯殿(九條道家)置文一卷一見了、

廿二日、乙酉、〇中略北政所被歸、光明峯寺領事、予愚意分申了、

〔隨心院文書〕坤〇山城

隨心院門跡雜掌謹支言上

就城州小鹽庄之儀、九條關白家雜掌申狀無謂事

一當庄者、光明(九條道家)峯寺殿御寄附以來、爲寺務進止之地、及三百箇年、知行無相違之處、掠稱本家、押妨之企背御法之旨歟、

一舊冬彼訴狀云、任當年十月廿三日惣安堵之旨、可致所務所詮、之趣、尤不審之題目也、於去年十月廿三日之御奉書者、當門跡申請事、

一當寺務職事、曾非一旦轉任之儀、帶代々御判等、古來更无他妨者也、次閣寺官之族云々、何事哉、子細不分明、

一如彼申狀、仰寺務者其寺之棟梁官領之主也、仍庄薗寺官諸役人以下爲門跡令進止事、有何僻事哉、

一寺家門跡一味也、然上者當關白家之御綺、本寺何可爲安堵之基哉、

此等條々被披聞召、退彼濫訴、彌可全門跡領知之由、重而被成下知者、可爲惣寺幷門跡御興隆專一者也、仍支言上如件、

永正六年二月　日

〇義政、隨心院嚴寶ニ、小鹽莊ヲ安堵セシムルコト、文明十年二月八日ノ條ニ、尙經、此地ヲ隨心院ニ寄進スルコト、明應四年十月十二日ノ條ニ見ユ、

誓願寺ハ圓福寺三福寺ノ預トナル

三十日、癸巳、幕府、山城圓福寺三福寺ノ、誓願寺散錢等ヲ押領スルヲ停メ、之ヲ同寺ニ安堵セシメ、其修理造營料等ニ充テシム、

〔誓願寺文書〕一〇山城

誓願寺事、慈照(足利義政)院殿御代、住持錯亂□(之カ)刻、一旦被預置圓福寺三福寺之處、參錢以下恣被自專之條、太無謂、所詮如先規令進退、可被專修理造營香花燈明之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正五年十二月卅日　下野守(飯尾之秀)(花押)

當寺衆僧御中

左衛門尉（花押）

誓願寺事、今度圓福寺雜掌捧申狀、雖及訴陣（陳）、爲理運之上者、任去年還補奉書之旨、參錢以下令存知之、專造營可被致御祈禱精誠之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正六年六月廿四日

當寺衆僧御中

（飯尾之秀）下野守（花押）

（松田長秀）前丹後守（花押）

今度圓福寺三福寺與當寺御相論事、被遂糺明之處、依寺家御理運無紛、被成御下知候、御祝（祝）著奉察候、彌御興隆之儀肝要存候、恐々謹言、

（附箋）「永正六年巳」

七月廿四日　　之秀（花押）

誓願寺衆僧御中

○誓願寺圓福寺、三福寺ト相論ニ就キテ、誓願寺緣起ヲ叡覽アラセラル、コト、六年正月二十九日ノ條ニ見ユ、

五千疋　三條西實隆ノ口入ニ依ル

朝鮮王李　倭材盛ノ賊倭ヲ捕ヘシヲ喜ブ　使者ヲ款待ス

是歲、幕府、御服ノ料ヲ獻ズ、

〈實隆公記〉四十　永正六年正月廿四日、丁巳、晴、餘寒甚、〇略中抑自禁裏青帷三百疋賜之、是舊年御服用脚萬疋內、且五千疋武家御進上云々、此事予種々口入申之條、公私喜思食由被仰者也、

幕府、細川高國ヲ管領ト爲ス、

〈執事補任次第〉

一高國　六郎、民部少輔、右京大夫

從永正五年廿ヶ年治世、管領職、任武藏守、三ヶ日則上表、法名常桓、道號松岳、號三友院、

宗材盛、使ヲ朝鮮ニ遣ス、

〈中宗大王實錄〉五　戊辰（永正五年）二年　大明正德三年、二月朔、己巳、對馬島主宗材（材）盛遣余時羅來獻方物、

（二日）辛未、上御思政殿、見對馬島主特送源國胤命禮曹判書金應箕語國胤曰、汝島主向我國効誠捕賊倭、以來予甚嘉之、特許接見耳、船主代官使送伴人皆令入就階上、張樂賜酒各賜物有差、

日鮮貿易ノ標準價

標準價ヲ減ズ

價格ノ低減ニ依リ貿易セズ

宗氏ノ使者ハ便殿ニテ謁見スベシ

〈中宗大王實錄〉六　戊辰（永正五年）二年　大明正德三年、五月朔、戊戌、甲子（二十七日）、慶尙道觀察使狀啓、對馬島主擒送賊倭三甫羅沙也文、行刑梟首、廣示諸倭、

八月朔、丁卯、丙子（十日）、領議政柳洵、右議政柳順汀、戶曹判書李季男、禮曹判書申用漑、議啓曰、前者倭人銅鐵五斤半折價緜布一匹半、以爲公貿、至庚申（明嘉九）年、特送盛種所持銅鐵多至十一萬五千餘斤、畢貿爲難、故量貿三分之一、其後壬戌（文龍二）年、請畢貿、國家慮將來之弊、量減其價、銅五斤以一匹改定、又許價三分之一、倭人嫌其比前不同、不受價而去、丙寅（永正三）年、更來請之、又依壬戌之價許貿、亦不受而去、今特送貞勝欲依庚申之例受價、固請不已、銅鐵於國用不緊、且國法已定、不可輕改、以此開說貞勝、若欲受價而去、則修書契諭道主何如、

（二十四日）庚寅、上御勤政殿、引見對馬島主宗弋（材カ）盛特送倭人弘明等、政院待罪、仍啓曰、對馬島主特送非國王使臣之例、當引見於便殿、不當接見於正殿、而又不宜宣敎之意、院中僉議而不卽啓之故、通禮院不知而依儀註待宣敎而後引、故玆以遲留、傳曰勿待罪、

流星
京都洪水
甲斐大雨不作
陸奥大雨
遖風
京都火事

年末雜載

災異、

〈實隆公記〉三十八　三月廿一日、己未、晴、〇中略今夜有流星、其大如甕云々、

五月廿四日、辛酉、宿雨洪水、以外也、

六月一日、丁卯、霽、〇中略磯山彌三郎上洛、魚市、塔森月別少々到來、有申旨等、不能記之、洪水路次難儀之趣演說之、以外之水也云々、

〈妙法寺記〉〇甲斐　此年（永正五）、大雨シキリニメ、作毛言語道斷惡シ、〇中略此ノ年ハ秋作ハ悉ク惡シ、

〈塔寺八幡宮長帳〉五〇岩代　永正五年戊辰正月八日開白十日結願裏書

〇上略此としひたすら雨ふりと沈し、諸人のおゝきなり、

〈實隆公記〉三十九　八月十七日、癸未、晴、〇中略（通世）中院使者同嬰、此災云々、不便々々、

十二月一日、甲子、天晴、風靜、臘朔幸甚々々、〇中略入夜西洞院邊有火、

〈後法成寺尚通公記〉三　十二月二日、乙丑、晴、〇中略去夜南方有火事、

神社、

〈春日社司祐彌記〉四月、

一五日當方神人補任案文

春日御社政所符　南鄉神人職事

定補

采女才次郎

右以人所補彼職也、宜相從神事之狀如件、不可違失、故符、

永正五年卯月　日

執行正預從四位下中臣連判

〈實隆公記〉三十九　九月一日、丙申、晴、入夜雨、〇中略大乘院若公書狀持來、春日社司職事也、

廿日、乙卯、雨降、〇中略（尊能）雲龍院來臨、松殿（忠顯）三位來、春日社權預事、祐稱所望事、一社連署十一人在之、其外舊記等携來、有申旨、所詮可爲（九條尚經）殿下進止、可被申南陌之由報了、

廿二日、丁巳、晴、（九條尚經）執柄有書狀、春日社權預職事、祐恩、祐稱相論事、社中連署等一見、愚意分申了、〇下略

春日社南鄉神人職

祐稱權預職ヲ望ム

九條尚經ノ進止ニ俟ツ

祐恩祐稱ト權預職ヲ爭フ

廿三日、戊午、陰雨、甘露寺來、春日社權預事、自執柄有示給旨、就長者宣事、有相談之旨等、其趣申南陌了、

〔春日社司祐彌記〕九月廿二日、

一□祐稱、祐恩所職改易之事、則正預被成下長者宣□(爭カ)(女カ)又在之、廿六日早朝ニ祐稱方宣下、以下以殿番神人被送畢、驚入者也、則自今日當番祐稱勤之、

〔春日社司祐彌記〕永正五年戊辰、天晴、天下太平國土安全、殊者寺社再興、正(復)(往カ)遷宮早速、武家國中退散、神事、法會悉以可複性代條、併今春幸甚々々、珍重々々、

(方)日御强御供二ケ度、音樂之、兩惣官四本立之、支配如例、

見參社司、家興、師和、祐辰、祐維、祐園、祐恩、祐智、

中臣氏人、祐次、祐稱、

大中臣氏人、家統、時殖、經賴、師順、時就、家康、家賢、師重、時具、

□之趣如常、但若宮へ別ニ不及參者也、榎本ヨリ東へ南門□ニ參之、社司ハ疊ノ上ニ著座之、氏人ハ圓座ニ著座之、□之兩氏人出仕次第ニ著座之、

正預　正預長者宣ヲ祐稱ニ下ス　年中行事

御强供御

社司見參

中臣氏人

大中臣氏人

社司ハ疊上ニ著座、氏人ハ圓座ニ著ス

□裝束自南北申之、其後社家出仕之、

□職沙汰之南鄉座中節之事、近年國之治亂付旁以難調之間、令無沙汰者也、然ニ先年南鄉一旅死闕出來、重而□人神殿守之內死闕出來之刻、彼座中申事ニ、近年御□之事種々雖申之、無御承引上者、任先規、彼一旅之任料□給テ爲座中彼御節ヲ可沙汰之由申、不致沙汰、面々前ヲ押□□多重雖問答、不致承引者也、仍學侶へ披露之刻、惠心院之延信房、爲口入種々被□歸了、所詮彼任料錢半分、可有執沙汰、相殘之事ハ、可預故實之由、數反被申候間、當職申之□、然ニ彼任料過分之儀、隨御意上者、後年之節無沙汰有之共、迎送之事致其沙汰候樣、御下知可爲肝要候由申候處、慥以領狀之、雖然後年春驕而違反、以外之事、所存無極者也、然ニ舊冬彼延信房五師爲口入、色々侘事之子細有之、殊當年之節事、雖無其沙汰、迎送之事涯分□致其沙汰之旨、慥以被申候間、屬無爲者也、仍自今朝如先々迎送沙汰之、

二日、天晴、

一御强御供二ケ度、音樂之、初度二本立也、

一御節供御神事如例、日並朝夕、御節供、藤井庄上役神人南鄉參之、見參社司(出合)

氏人昨日ニ同之、但神主不參之、正預者參勤之、

一今日一御殿日並朝夕樂所ニ下行之、圓鏡ハ不下之、如何之、御神供住吉前ニ神人交替之、

一昨日神戸リホン(マヽ)ノ御下知返條、得其意由申之、

一社家之少者共、昨日少々登廊ニ祗候之由、此條不可然旨申合、今日ハ各登廊南之ワキニ祗候之、

一御神供下半則(刻カ)風宮之御後ニテ神人交替、外見可然、殊先例モ如此云々、向後尙可爲此例者也、御神供已後御タカツキハ風宮井垣、金剛童子ノ井垣等ニ懸品也、〇春日社司祐稱記異事ナシ、

門跡等ヘ參賀

四日、天晴、

一今朝兩門跡(一乘院良譽、大乘院經尋)並寺家(兼經)權別當(光慶)ヘ參賀也、仍寺家並權別當御對面也、殊御盃被下候了、同寺中入道也、祐園、祐次同道也、松林院殿ヘ同參賀也、無御對面也、

魚初

一當屋御魚初在之、於旬御供、爲正預祐彌出之、各頂戴之、酒ハ祐次振舞之、有合故也、

十日、天晴、

田植

一御田植之次第如例、

一□殿番御田植之番沙汰之間、任例一獻進上之、

十五日、天晴、

粥神事

一御粥之御神事如例、見參延光、當番、師和、神主代、祐園、正預代、時就、已上四人、

一支配之事、一二御殿兩惣官、三四御分見參之四人一反拜領之、

一今日於若宮神主館目出在之、大酒如例、

松本莊神供闕如

一今日松本庄御節供之事、去年就民家入國、當給人一向彼神用不除之間、御神供之事可有闕如之由、舊冬ヨリ名主神主ヘ注進之間、此子細披露于寺門、爲寺門給人方ヘ種々雖被申屆、更無其實之間、闕如必定之處、寺家修南(兼繼)院殿ヨリ名主ヘ被仰出者、彼御神供一向可退轉之條無勿躰之間、一貫文可被付、相當神供ヲ代ニ可備進之由間、以本六種備進之由披露之、

三月節供

三月三日、雨下、

一今日節供之六種闕怠也、

庵治莊

一今日庵治庄之事、土佐大平方洽(給カ)人之間、惣殊院ト申合、種々雖申屆候、更以無承引之間、此子細披露于寺門、更無其實之間、無力令退轉候由令披露者

也、

五月、

一五日、天晴、

五月節供

一今日節供六種闕如也、

一庵治庄闕如也、其子細出仕之時分、祐園披露也、

七月、

索麵

一七日、天晴、卯剋御索麵如例、兩惣官一度(宛カ)□調進也、

見參師和、神主代、祐園、正預代、時就、氏人、已上四人一杯ツヽ取テ、□一杯ハ就上首師和拜領也、

神事

〔春日社司祐彌記〕正月四日、天晴、

一御神事、日並朝夕、四種、淺宇田祐次、四種、三嶋庄御節供之代權預祐辰、四ヶ度、

一自今日當參社司上四人者束帶、平之權官衣冠、氏人者布衣淨衣等也、今日若宮神主數刻雖相待遲參也、仍若宮常住ヲ召、可相催旨下知之處、既參懃之由申之、○コノ後、恒例ノ神事、異事ナキヲ以テ略ス、

〔春日社司祐彌記〕七月七日、天晴、

神戸神事
神戸小莊
神戸大莊

一神戸神事如例、音樂在之、先日並朝夕四種、西殿庄代、神戸小庄大庄、名主祐次、

日並朝夕四種經賴備進

一今日若宮神主不參ノ由披露之、仍日並朝夕四種ハ、彼神主代經賴備進之、於神戸者、以旬之時之例、上首家興本社祝已後、若宮ヘ渡テ備進之、大莊同之、兩惣官不參故也、

乙木莊

一今日小莊御供ニ若根無之間、以一種ハ油物一種フリニテ可備進之由也、兼日雜掌神人案內申也、幷カウホ子予ニ無之間、ナスシ(マヽ)ニテ備進也、

一十五日、御神事、日並朝夕、乙木庄、一二、

一若宮殿於日並朝者、彼神主代經賴備進、節供ハ就上首家興渡テ備進也、奉下テ西ノ口ヘ退出也、

九月、

小田中莊
三橋莊

一九日、御神事如例、音樂在之、日並朝夕八種、西殿庄代時殖、七八給之、神戸小田中庄、三橋庄、以上六ヶ度、

吐田莊

一今日吐田莊重而可有備進之由、以雜掌神人披露之、仍九十鵺ハ吐田莊ヲ相待者也、本式日備進之時ハ、吐田ヲハ七八給之、

但七八可待歟、此條七八鵺爲隨意、去年も七八種ヲ給之、當年同之、

一今日本社神戸之祝已後、家輿若宮殿へ參テ、神戸小田中、三橋莊等備進也、
前々日並八種等、彼神主代經賴備進也、

〔春日社司祐彌記〕正月一日、

一旬御神事如例、年預經賴、時就、白杖已下之日並朝夕、恒例、本六種師順、四種、所役北鄕方神殿守參之、川原庄代、四種祐次、神戸、大柳生、已上七ケ度、

一見參社司、神主師種、執行正預祐彌、權神主家輿、新權神主師和、權預祐辰、權預祐維、加任預祐園、新預祐恩、若宮神主祐智、

一中臣氏人、散位祐次、散位祐稱、祐資、

一大中臣氏人、中務大輔家統、大藏少輔時値（殖カ）、大膳亮經賴、刑部大輔師順、民部大輔時就、內藏助家康、兵部少輔家賢、散位師重、雅樂助時具、散位時宣、

一□（不カ）參社司、延光、延俊、第五未補數年就正預兼帶、延家御出仕之砌、八丈曳之、兩惣官卅枚宛、權官者十枚宛也、氏人者三枚宛、□四參斗、但近年者、不參氏人ニモ曳之、社司者不依參否者也、若宮神主五十枚也、彼方氏人十枚宛歟、何以三方常住定役也、

一出仕之砌、時就、師重、時具、時宣口宣披露之、

出仕ノ有樣

社司ハ束帶、氏人ハ狩衣、布衣又ハ淨衣

音樂

幣持神人

一出仕之樣、先自慶賀門入テ、移殿ニ著座之已後、南門ヲ出テ、榎本社參、自慶賀門移殿參之、若宮殿へ者、一向不參之、移殿へモ自東戸口入之、若宮御分別ニ不能參、一所ニ御座故也、

一供奉神人者、移殿へ社參時、南門之內ニ待之、

一社司束帶、氏人者狩衣、布衣、淨衣等也、社司裾曳之、

一年始御神供闕如分、今日出仕之砌、各不能披露、舊冬（廿九日カ）於渡屋社司集會之時披露之故歟、

一音樂ハ住吉邊ヨリ催之、

一白杖之神人者、登廊之下橋之上ニ立也、是モ住吉之邊迄罷向テ、（マヽ）ミサキ上之惣別少御供ノトキモ如此沙汰之、音樂方可存知用（事カ）也、先例如此、

一御幣散米等之神殿守モ、移殿東之口サヘノ外ニ立之、御神供備進終彼（後カ）御內入、祝師ニ御幣ヲ奉ル、御幣持神人ハカリハ御內ニ祗候也、

一末座社司祐恩旬御幣奉獻以後、本座ニ著、若宮旬見合テ參之、別ニ著座無之、

一樂所ヘ下行之旬御供者、住吉前迄神人持向之、其邊上迄寺侍以下罷向テ

請取之、

一神□(白カ)御飯タカツキニ難奉置間、三御殿御分旬之圓ハンヲ召寄、其上ニ奉居候了、若宮御分同御籠之針ニ御飯指合間、同旬之圓ハンニ奉居也、

一祝木ニ奉居油物爲備進、四足之下ナルヨコヘ、御幣串ヲワタシテ備之、若宮御分同四御殿四足ト兼テ御幣串渡之、各常住ヲ以下知之、

一本社之御供ヲハ、風ノ宮ノ前ニテ、社家之下部共取之、ソレマテハ神人如常交替之、仍□自御前見通之間不可然、自明日者、風ノ宮ノウシロニテ神人可交替旨、以常住下知之、若宮殿御供ヲハ西ノ遣戸之口、石タンノワキニテ神人交替之、朝御供拜殿ヘ下行之分モ、拜殿中者、下女ヲ召具テ來、御神供請取云々、

一御白散者、御殿東之脇ニ置之、若宮殿御分者、四御殿トノ合ニ置之、神戸備進之時者、取ノケ、社司著座之疊ノ上ニ置之、

一常住並神人共、風之宮之前ニ祇候之、惣別少御供御幣モ移殿之外サヘノワキニ相待、備進事終、祝師ニ進之、

一諸人參詣衆頂戴之御幣共、社家出仕之時者、移殿東ノハタキタノ外ノ方ニテ御幣奉(捧カ)之、諸人ニ頂之、若宮方同ハタ板之外ニテ沙汰之、一向移殿內ヘハ不出之、但少々ハ入歟、是者神人沙汰之御幣事也、

一少神燈明事、廿九日一日ハ神主方ヨリ御油下行之、二日三日ハ自正預方下行之、土器者出納之役也、トウシミワ兩常住出之、揭事者、南北之末座神人役也、少神者スヽキ本社御分キヽモリ先規也、

一御出仕之砌社司評定云、今日神戸之御飯以外さ道也、仍常住召テ、大柳生鄉人並雜(當カ)常神人仁嚴密加下知了、於返條、明日御出仕之砌可申旨、同被加下知了、

一旬之八足下テ後、四足御前ニ持參事、兩常住沙汰之、若宮御分者彼常住沙汰之、

一若宮殿御供ヲ、西ノ遣戸口ヨリ參之、同神主モ其口ヨリ出仕之、退出同之、

二月一日、天晴、

一旬御神事、音樂在之、旬日並朝夕、

一見參社司、祐彌、家興、師和、祐辰、祐維、祐園、祐恩、祐智、

(二月以後ノ旬神事、正月ト異事ナキモノハ之ヲ略ス、)

中臣氏人、祐次、祐稱、祐資、

大中臣氏人、家統、時殖、師順、時就、經賴、家康、家賢、師重、時具、經榮、時宣、

一今日旬南郷方神殿守チハヤ引之、

〔春日社司祐稱記〕正月廿六日、天晴、

一今朝大東殿光臨被申云、來一日南郷旬禦禪等不可新調由、新坊申也、仍此條無勿躰旨、供目代邊可付書狀旨被談合間、如此認遣候了、

披露狀案、使者南郷旬之雜掌神人也、

來朔日南郷方旬御神供御替物事、于今一向不能御下行候由、雜掌神人申候、無餘日事候、早々可被仰付條、可目出候、殊神人禦禪等事、來一日南郷旬初之儀被新調候條、規模事候、則於庫院方者、當月ニ替物共御下行候哉、御神事無相違樣御成敗可目出候、以此旨可有御披露御集會候、恐々謹言、

南郷社務

正月廿二日　延光

供目代御房

二月一日、天晴、御神事如例、日並朝夕、白林以下所役南郷神殿守參也、

南郷旬ノ禦禪ハ新調ニ及バズ

披露狀案

若宮神主祐恩

十一日以前ニ新調スベシ

一見參社司祐彌、家興、師和、祐辰、祐維、祐園、祐恩、若宮神主、祐智、

一中臣氏人、祐次、祐稱、祐資、

一大中臣氏人、家統、時殖、經賴、時就、家康、家賢、師重、經榮、時具、時宣、

一今日南郷旬禦禪之事、自寺門無新調、自兼日名主色々寺門雖披露、號無物、無新調、古物之禦禪者、舊冬十二月廿一日御神事以後令支配、神殿守拜領云々、然間昨日神殿守等兩惣官へも此由申也、名主延光兩惣官罷出被申合、種々學侶ニ披露候處、所詮來十一日以前ニ可有新調候、今日之儀如何樣ニモ無爲之儀、可爲肝要由被申□、神殿守ヲ相宥、今日之儀、旬雜掌禦禪之布ヲ以、代物□借用テ著之、無爲也、此條先規披見候處、自然禦禪違亂之時、南郷北郷共以借請テ著之例多也、古今最要抄第二帖ニ委見え候了、雖然今日之儀者、損料以布計略之間、是モ無子細者也、

〔春日社司祐彌記〕二月十日、天晴、

一明日十一日旬出納代來テ云、明日旬ノ送物ノヒホ事、舊冬堅御下知之間、正月一日ヨリ去朔日迄者、色々致□(勠カ下同ジ)勞テ送申候へ共、至于今者、一向予ニ無之候之間、不及了簡候、尚以御不審候者、可被下見(檢ト同ジ)使之由申之、返答云、送

物ノシホノ干タヰノ事無之候間、以コカラスヲ可送之由申之歟、此段事者、舊冬及社司評定、コカラスノコトハ、不可仰之由下知之處、只今爲兩惣官者、難意得之間、惣社司ニ披露、可應社司之儀之由返事也、

同十日、於神主館集會在之、評定云、明日旬之送物ノヒホノコト難得尋之間、見使之事可被立條、尤可然、但先以今一反者涯分可致□勞之由、云兩惣官、云名主、嚴密被下知者可然之由評定之間、其趣彼出納ニ□(令カ)下知者也、

一十一日、

旬之雜掌代來テ云、昨日蒙御下知候送物ノヒホノコト、種々雖相尋候、難得之間、先以今日之事者、彼コカラスヲ御拜領候者、別而可畏存候、來廿一日之事者、涯分膳部衆致□勞、以本式可致其沙汰之由、堅歎申之間、先以兩惣官意得令領狀者也、

一旬御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕四種、師順、

〔春日社司祐稱記〕二月十一日、

一旬御神事如例、日並朝夕ニ本六種、祝薗庄、

一今日南郷禦禪自寺門新調候了、

南郷禦禪新調

一昨夕於神主館社司集會在之、子細者、今日送物ヒホノ魚事、今般コカラスヲ送條不可然云々、仍雜掌申云、今般干鯛一向難得也、誠御神供之分ヲ漸取合調進候之由申之間、所詮可立見使ヲ上者、今日送物ヒホ可相□旨、夜前下知候間、今日送物ヒホ不送之、

一今日御出仕砌、社司評定云、旬之御燒物幷串柿以外ソホン也、同若宮殿旬八足ノ下之ソヘ木新シク跌之候了、言語道斷之次第也、仍以兩常住ヲ、此條如何候由、雜掌方ニ問答候處、申云、御ヤキモノ幷柿等ソホン之事、自來旬可致奔走旨申之、八足御カケ候事、キツ頃ヨリ如此候哉、不存知ノ由申之、仍社司(密カ)社司評定云、何頃ヨリト申條大樣之至也、仍嚴密可有糺明云々、但今日之儀既藝能之上者、追而可有評定由、一決候了、

千鯛調ハズ

八足ノ脚添木損ズ

〔春日社司祐彌記〕卯月大分、

一朔日、天晴、旬御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕、

一見參社司、家興、祐辰、祐維、祐園、祐恩、祐智、

中臣氏人、祐次、祐稱、祐資、

大中臣氏人、經賴、師順、時就、家賢、師重、經榮、

若宮神主毎旬出仕

□(不カ)參社司、師種、輕服、祐彌、老躰、延光、自由、師和、輕服、延俊、自由、延家、自由、

一若宮神主毎旬出仕之事、朔日ハ先榎本參、慶賀門ヨリ移殿ニ參、東懸木ニテサシハサミノ御幣ヲ申也、如本社奉備者也、其後移殿ノ南ヲ經テ、西ノヤリ戸ヨリ入、内ニ於祝座、先件ノ御幣一本申、奉獻之シテ、座ニ著也、十一日廿一日ニワ、榎本參テ、慶賀門ヨリ入テ、移殿ノ西ノヤリ戸ヨリ入テ著座、之代々ノ先規歟、但今度ハ御供已後退出ノ次ニ、榎本被參者也、又此例モ在之歟、

一十一日、天晴、旬御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕、本六種、祐次、見參社司、兩氏人朔同前(日脱カ)也、白杖已下南鄕方、

一廿一日、天晴、旬神事音樂在之、旬日並朝夕四種、師順、見參社司兩氏人十一日同前也、

八足ノ脚破損ニ就イテノ下知

一今日旬奉下テ後、彼八足風之宮之後井垣ニ奉懸置之處、本朽損之間、タヲレテ一脚之足一方分モケ落畢之由、雜常(掌)以常住注進之間、則下知云、於已後ヨハキ所ニ不可置、幸御藏エン在之間、彼在所ニ可奉置之由加下知了、當社司備進之八足五脚之内、壹之足令破損候、早々被仰付、被加修復候者可目出候、殊來朔日已前出來候樣、御下知可爲珍重候、以此旨可有御披露御集會候、恐々謹言、

卯月廿一日　正預祐彌　神主師種

供目代御房

當旬以雜掌付了、

井垣顚倒ニ依ル

〔春日社司祐稱記〕四月廿一日、旬御神事如例、日並朝夕四種、恒例、

一見參社司氏人十一日ニ同也、

一旬御供以後、移殿ニ旬雜掌注進之、只今旬之八足風宮井垣ニ奉懸置處、井垣顚倒シテ、八足ノアシヲ打折候由申也、仍社司各評定、來十一日以前ニ可被加修理旨、自兩惣官、早々學侶へ御臨送可然旨評定、

五月旬神事

〔春日社司祐彌記〕五月、

一廿一日、旬御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕四種、見參社司兩氏人十一日同也、

旬粗苯ニツキ社司評定

一社司評定云、今日旬以外ソホン、殊大物カル物以下沒上篇者也、殊三月廿

一日嚴密被加下知、於已後、不可有故實之旨御一決之處、如此沙汰仕候條、
難遁罪怠上者、可被持科者也、則召常住祐園下知云、今日旬ソホン言語道
斷次第也、既三月廿一日嚴密被加下知之處、不致承引、如此沙汰上者、所詮
於出納神人被出仕者也、カル物等殊外ソホンノ間、今日カル物沙汰之膳
部同被止出仕之由、同下知之、隨而旬御飯此間モソホンノ上、殊今日之儀
一段慮外之間、午知代神人等雖可被持科、先以被故實者也、於向後者、雜仕
方ヲモキラキツメ、ホンソウキタスヘキ之由、加下知了、仍社司氏人退散
也、

一廿一日、寺內入堂也、

一廿二日、昨日被止出仕膳部等、就名主申云、昨日旬カル物ソホンノ儀付、奉
致其沙汰躰、每旬六人せンフノ內五人』シテ奉盛候處、五人ニ可被持科之
條歎存候、爰本之儀、御故實候者可然之由被申了、社司各申談、所詮名主シ
テ被取次御意之事候間、彼五人之內一人サクリニ被取、可被持科之由申、
則其通一決了、

〔春日社司祐稱記〕五月廿二日、

輕物沙汰膳部ノ出仕ヲ止ム

一昨日自社中被止出仕雜掌神人又三郎事無子細也、於膳部者、彼御輕物ヲ
ハ、六人之膳部之內一人者相迦(過カ)レ、五人シテ奉盛候間、然者乍五人可被止
出仕候哉、其段餘不便之由申歎、名主色々當社出仕之社司之衆ニ入魂之
間、所詮五人之內サクリヲ以、一人膳部可被止出仕旨治定歎、仍北鄉之職
事大藏件サクリニ取當候了、

一雜掌又三郎ハ若宮之神人也、然者可被出仕止旨、昨日社司之自評定若宮
神主ニ可被申送者歎、但爲惣評定科怠被持時、社務ニ可被申送歎否、樓門
評定トキハ不能職事ニ申付下知之行列連綿也、先規不分明者也、仍內々
自若宮神主、又三郎出仕事御下知候了、移殿參會同篇之間如何候、

〔春日社司祐彌記〕六月大、小、

一朔日、旬御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕、見參社司、家興、祐辰、祐維、祐園、祐
恩、祐智、

兩氏人先旬同之、

一北鄉兩□務披露云、先度旬之儀付被止出仕候出納並膳部、就兩名主種歎(々脫カ)
申候、所詮向後之儀涯分可致奔走之由、堅可申付候、先以被加御免除者、別

膳部出仕停止ヲ免ズ

而可祝著之由披露也、社司評定云、今度悲(歟カ)怠事一段之間、日數可雖(注カ)置候、名主分事於御披露之間、然者先以可加免除候、已後之儀堅可被仰之由申送者也、仍常住ヲ召下知云、先日被止出仕膳部之事、色々爲名主口入御披露之間、先以被加免除者也、則出納神人任評定旨、被加免除之由、可被下知之由、若宮神主兩常住牒送之、則被加下知了、

南門戸敷居覆板血氣アルニ依リ取替フベシ

一今日常住神人注進之、南門ノ戸サヽ血氣候了、則寺門ヘ披露之、社頭南門戸敷居之覆板令血氣之由、常住神人等注進候、早々覆板被取替候樣被加御下知候者、可目出候、以此旨、可有披露御集會候、恐々謹言、

六月一日　　祐彌
　　師種

供目代御房

神供到來遲引漸ク旬神事ヲ行フ

一十一日、旬雜掌來テ云、今日旬御白米無到來候間、可有御神供達調之時分、重而案內可申之由申者也、仍酉剋漸時分之由案內有之、入合之過ニ出仕也、

七月大朔日、天晴、夕ハ雨下、

七月旬神事

一旬御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕上役北鄉方、

日並臨時備進

見參社司、家興、師和、祐辰、祐維、祐園、祐恩、祐智、兩氏々人同前也、

一□(千カ)□(一カ)日、天晴、旬御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕本六種、祝園

見參社司、兩氏人七日同之、

一今日家興本社祝申已後、若宮殿ヘ渡テ旬備進也、奉下テ鯛御供奉備、祝已後、西ノ口ヘ出テ退出畢、於日並臨時御供者、經賴備進也、

供物缺乏

一今日出仕著座之時分、若宮神主以常住不參之由披露也、十七日ニ同也、

一廿一日、雨下、早朝旬出納來云、ハス、シヲ、ミキ、カラサケ已下無之之間、何モ以代可備進之由、幷旬御白米不持之間、可遲之由案內申者也、未之下剋旬御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕四種、見參社司、兩氏人同前也、

今日御役之次第十一日同也、

八月朔日、

八月旬神事

一□(旬カ)御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕、

□(若カ)宮神主朔日令啓白、御幣彼神主代經賴於東尻懸木申□(ケ、若カ)□(宮カ)神主御分一本ヲハ、御供已後經賴啓白之、

□(今カ)日御神事未下剋遂行、其故者、大炊殿ノ申事□大雨ニ水濁之間、飯ヲ不仕之由之間、則雜掌神人其分案内有之、

□(十カ)一日、天晴、寺中入道也、

九月旬神事

一旬御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕本六種、祝薗祐次、

一今日旬未下剋ヨリ執行之、子細ハ朝御供米未下之間、得下(マヽ)行□意之(マヽ)間、如此也、則前出納案内申之、

一□(廿カ)一日、天晴、旬御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕四種、師順、

九月朔日、天晴、但夕ヨリ雨下了、

一旬御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕、

一今日御神事、申貝ヨリ執行之、旬之白米當日ニ運上之間如此、則雜掌神人其旨案内申者也、

一十一日、旬御神事如例、音樂在之、日並朝夕本六種、延俊、本六種、師順、諸事朔日同之、

一今日御神事自戌剋遂行、昨日御白米不致運上故也、則其子細案内申也、

神無月一日、天晴、

十月旬神事

一旬御神事如例、音樂有之、旬日並朝夕、見參社司家與、師和、祐辰、祐維、祐園、兩氏人同前、

十一月旬神事

□(旬カ)祝已後、家與若宮へ參テ、旬備進之祝同奉獻、經賴本社奉獻、祐園若宮へ不及相渡者也、大社殿別不足故也、

午日酒

十一日、大雨下、

一□(旬カ)日御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕本種、延俊赤土器也、□□御白米不運上之、酉下剋ヨリ遂行之、

十一月一日、天晴、

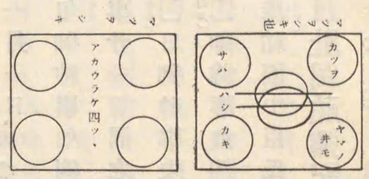
一旬御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕、見參社司、去廿一日同之、奉獻祐園諸事廿一日同之、

□(今カ)日御神事未下剋ヨリ遂行之、依不御白米運上也、

□(旬カ)□(旬カ)御神事如例、音樂在之、旬日並朝夕六種、延俊、見參社司、師和、東帶、祐辰、祐維、祐園、中臣氏人祐次、中臣氏人師順、時就、家賢、師重、時具、

〔春日社司祐彌記〕二月、

一廿六日、午日御酒如例、日並朝夕、次午御祓御供、



四足ノ上備之後、如常祝申之、御幣ハナシ、後奉下樣、彼四杯ノ上ヲ少ツヽ取テ、御サハニ奉下者也、カノ御サハヲハ、上ノ御サカツキニ入テ、下之下ノ御ハシハ、カワラケ共ニ奉下テ、面々ノ座ニスユル也、酒ハ旬ノ鍉ニ奉入也、見參師和、淨衣、神主代、祐園、正預代、淨衣、當番祐恩、時就、渡番也、若宮殿、

酌酒殿代、請テ出事常住役也、四ノ内一ヲハモリテ置之、今三ツヲハ祝著也、若宮殿ハ酌常住請事自身祝著也、事終テ退出也、

鍉役

〔春日社司祐稱記〕二月廿六日、天晴、

一午日御神事如例、日並之神供之後、御肴備進也、仍兩惣官代師和、祐園、各淨衣、祐恩、當番、祐稱、敬神、時就、延家渡番代、御酒各祝著也、鍉之役者、酒殿神人役也、土器四ツヽカサ子テ四ツ置之、土器ニ御酒請テ出テ事者、當季者北鄕常住役也、若宮方鍉役常住也、ウケテハ不出之、直ニ請祝著也、件御肴祝著之後、遠事者本社之分者、面々覺悟之神人沙汰之、若宮方者常住之役也、仍宿所ニ歸リ、古今最要抄第三帖披見候處、條々在之、

小祭

晦日、

一小祭之餐幷柏御供之甘酒等、正預殿へ送之、社務者縱雖無參籠、必送不□條先例也、仍社司參籠同進之、仍祐稱參籠候處、餐一杯同スヽキニ甘酒少シ入テ送之、

〔春日社司祐彌記〕二月、

一卅日、小祭如例、仍祐彌ハ上役ヨリ未參籠之間、舟戸屋へ喰膳送者也、万一不參籠者、私館へ可送者也、祐稱參籠之間、同送物進之、

千座祓

〔春日社司祐稱記〕正月十六日、小雨、

一今日一社千座祓恒例分延引、就頭役昨日若宮神主方ヨリ貳日延引通被申候了、

十八日、天晴、

一今日一社恒例之祈禱在之、去十六日分也、頭役若宮神主於卅八所屋沙汰之、

〔春日社司祐彌記〕正月廿一日、

一去十八日恒例惣社祈禱千座御祓在之、頭役祐智一獻如例、出仕之人數同前也、

三月、

一十一日、雨下、爲惣別祈禱社中千座御祓在、三十八所屋之大床ハ若宮神主祐智用意之、同茶湯在之、

十九日、

一於神主館一社集會在之、子細者、自寺門被命祈禱之事面々評定之、所詮自廿一日三ヶ日千座宛中臣祓可有其沙汰、大床之事初日神主、第二日正預、第三日權官十八、加若宮神主テ十一人、千座已前□文之筋目ニテ可有沙汰者也、同日ヨリ社司氏人五人ツヽ、五番ニ五日宛參籠之間、懃行之事者、人別中臣祓百座ツヽ、可有沙汰、大床ハ自身用意之、

權官大麻支配事去年筋目也、

權神主　百　十　座　　次預　　百　十　座
新權神主　百　　座　　神宮預　　百　　座
未補　　九　十　座　　今西權預　　九　十　座
乾權預　　七十五座　　加任預　　七十五座
上新預　　七　十　座　　辰巳新預　　七　十　座

權官大麻支配

若宮神主　百　十　座

以上千座也、

一廿一日、天晴、件祈禱千座御祓在之、大麻茶湯等師種沙汰之、

一廿二日、彼祈禱在之、千座御祓、大床祐彌沙汰之、同茶湯、

一廿三日、彼祈禱在之、大麻ハ如先々、權官衆、若宮神主等持寄者也、（異事ナシ、）○春日社司祐釋記

祈禱支配狀案文

四月五日、

一去廿一日ヨリ、一社祈禱支配狀案文、

社頭御祈禱條々事

一自廿一日至廿三日、毎日千座祓可勤仕之、初日大麻已下神主、第二日正預、第三日權官令支配沙汰之、若宮神主加之、

一參籠中百座宛勤修之、中臣祓大麻者、社司氏人各自分可沙汰也、

五ヶ日宛參籠結番次第

一五ヶ日宛參籠結番次第

自廿一日至廿五日、
一番師種　祐智　祐園

自廿六日至卯月一日、
二ゝ祐彌　延俊　延家　氏人不爲次、家統　祐次　時殖　師順

自二日至六日、
三〻家興　未補　祐恩　經賴　祐稱
自七日至十一日、
四〻延光　祐辰　時就　家康　家賢
自十二日至十六日、
五〻師和　祐維　師重　時具　延有

右、守結番之次第、無懈怠可有參籠、中臣祓勤修之事、各可被存其旨者也、
社頭安全御祈禱各可被致精誠之狀如件、

永正五年戊辰三月　日

歡喜院千座祓

辨講

九月九日、

一□六恒例社中祈禱千座祓在之、頭役延光、延俊一獻如例、

〔春日社司祐稱記〕六月十八日、

一今日於歡喜院千座祓在之、人數十人同道也、延光、延俊、時殖、經賴、時就、祐智、祐維、祐稱、祐次、師重、

中食幷布施十疋ッヽ在之、

〔春日社司祐彌記〕正月、

一廿六日、辨講在之、頭役師順一獻如例、

五月、

一七日、辨講在之、時殖沙汰之、樂在之、

〔春日社司祐彌記〕二月、

一三日、春日講年預祐次方ヨリ廻文到來也、

春日講御會之事、明日五日(四カ)、於正ゑ院館可致其沙汰候、無御指合候者、各御參會可目出候、恐々謹言、

二月三日　年預祐次

講衆御中

一四日、少雪下、

春日講會在之、新人祐辰、家賢、師重、延家、與三、祐辰、家賢者旬御供一殿ッヽ、出テ新入之、仍懸錢六月迄分、正月分枕(懸カ)セン十文、合廿八文、旬一殿百廿八文ニ當之、於講衆者、令祝著者也、

延家、師重、直榮者料足十疋ッヽ、出テ新入之、

一祐彌者不出之、仍送膳在之、

〔春日社司祐稱記〕二月五日、天晴、

一今日社中春日講之算勘在之、

地藏講
信讀大般若經
恒例水屋神樂

〔春日社司祐彌記〕二月廿一日、
一今日彼春日講之會在之、祐辰、家賢兩人旬御供ヲ一殿ツヽ、被出者也、酒直ハ各出錢也、
三月、
一廿五日、春日講出来、時殖分本米貳升、丙刁年ヨリ至卯年二ヶ年利平參升クワエテ五升、今日祐園ヘ被渡者也、利分ハ升別六合ツヽ、
〔春日社司祐彌記〕三月、
一廿四日、若宮神主殿地藏講、祐園頭役勤之、
〔春日社司祐彌記〕三月十一日、雨下、
一昨日十日ヨリ、於八講屋信讀大般若經在之、群參之、
四月二日、
一自今日恒例水屋神樂在之、
一三日、雨下、
祐園番參勤也、代官師種不參也、同四日五日代官不參也、
今日御神供砌自三方座中申云、就水屋神樂之儀、今日雨下候間、於著到殿可致其沙汰之處、御材木ニ指合候間、可然在所無之候間、舞殿中、不然者西ノ廻廊ニテ、可遂其沙汰之由申之、神主代時就返答云、先々著到殿指合之時者、方々別々於座致其沙汰候條、先規連綿之上者、以其筋目、可致其沙汰之由被申者也、正預代祐園先規尤之由令領狀、則職事ニ申付了、仍若宮座無之間、可如何候云々、仍於北鄉座、三方共ニ祝申者也、亂舞如例、

〔春日社司祐稱記〕卯月二日、水屋神樂自今日在之、
三日、雨下、
一就雨降、水屋神樂了、舞殿幷東之廻廊ニテ可沙汰旨、三惣官ヘ伺、既酒船等南門之脇ニ舁居候了、著到殿ニハ、當時御造宮之用木在之故也、仍自三惣官返答云、幣殿廻廊等事、內院之亂舞不可叶者也、殊□醉之上者、万無法量者也、其上無先規上者、曾不可叶者也、雨下時著到殿ニテ沙汰之事□(歟カ)以延祐之社務代ニ許可也、自性代之儀ニアラス、先規モ雨降者自方各別候、於座中沙汰之條先例之上者、其通可致沙汰旨下知之、則於北鄉之座中、三方寄合由申也、
〔春日社司祐稱記〕正月六日、天晴、

参籠

一今夕辻坊順長□屋前ニ來而申者、自夜前論講屋致參籠者也、仍其憚雖千万、明夕惣社夕飯用意可申、餘其ヲ不易間、宮廻之次之樣シテ、無相違御光臨可喜入旨、各一社之儀可預取合旨申候、殊雜掌者參籠之時モ、社中衆招請候、先例在之由申之間、各々申合、重而可返(障カ)條旨申候了、仍各ヘ祐稱申處、少々可有光臨被申候了、

〔春日社司祐彌記〕二月廿一日、

一今日御供已後、舟戸屋參籠祐善此間千日參籠仕之處、今明之間ニ可退出候條、祝著之間、社中各御酒ヲ申度之由ヲ申トテ、辰市祐次取次被申之間、各大宿所ヘ會合シテ一獻在之、肴豆飯其外取肴已下也、此庭ニテ惣社ヘ一獻ヲ申之條、祐善不取入沙汰之次第第九世事之由風聞在之、尤歟、

〔春日社司祐稱記〕二月廿五日、朝雨、

一自今日祐稱社頭參籠里宿、各月水之間、自今夕者、廿八日迄社頭ニ參籠、但飯ヲハ自運持也、夕者罷出里、々之館エン迄者罷寄候了、

〔春日社司祐彌記〕三月、

一去廿一日百日參籠始之、所願成就之由奉祈者也、

舟戸屋千日參籠

百ケ日參籠

七月三日、

一今日祐園百ケ日參籠結願、所願成就抽精誠者也、

仍勤行之事御間三百卅三度、榎本一万一千百十一度、金剛章三千三百卅三度、中臣祓七百卅座致沙汰者也、

一四日ヨリ祐園七ケ日參籠畢、

〔春日社司祐彌記〕二月、

一五日、天晴、呪師猿樂在之、兩惣官下行如例、日並御供朝夕ツヽ、瓶子一双ツヽ、口チツヽ、ム、

〔春日社司祐稱記〕二月五日、天晴、

一呪師猿樂如例於舞殿在之、仍今日日並朝夕幷瓶子一双宛□永下行之、

八日、天晴、

一今日猿樂於社頭如常在之、今(金)春大夫參之、七番沙汰也、仍長ヲキナメンノシテ、丑寅角ノ柱ノモトニ著候、仍以神人、如先規辰巳ノ角ノ柱ノモトニ可著座旨、自神前被加下知候了、

九日、天晴、

一今日金剛大夫參候、能五番沙汰也、

呪師猿樂

社頭猿樂金春大夫

〔春日社司祐彌記〕二月九日、

一今日社頭猿樂金剛大夫參之、五番沙汰之、社中一獻祐園沙汰之、

金剛大夫

十日、天晴、

一今日社頭猿樂觀世大夫參勤之、七番沙汰之、社中一獻時殖沙汰之、

觀世大夫

十一日、

一今日社頭、法生大夫參勤之、六番沙汰之、

寶生大夫

社中一獻頭役家康沙汰之、

〔春日社司祐稱記〕二月十一日、

猿樂見物ノ群衆若宮殿ノ垣ヲ破ル

一今日猿樂見物ニ、雜人等若宮殿南之井垣ヲヲシタヲシ候了、

〔春日社司祐彌記〕二月、

社頭法樂

一十三日、觀世大夫社頭法樂也、酒頭役師和沙汰之、

水屋社葺朽損

三月、

一十八日、學侶へ披露狀案文

水屋社御葺朽損之故候歟、師子狛犬之上雨滴候之由、常住神人等令注進候、可爲如何候哉、以此旨、可有御披露御集會候、恐々謹言、

三月十八日　　祐彌

供目代御房　　師種

社頭東回廊ノ聖床修理

一廿一日ニ、以前披露之水屋殿モリ給處ニ、鳥居ヨリソトニ足シロヲシテ、御殿ノ御前ニ雲形ヲ引テ、切懸ヲ沙汰シテ、上ヘ打キセテ奉置者也、御殿ヘハ一向不上者也、殊外葺朽損木ノ下故也、

〔春日社司祐稱記〕三月廿一日、

一此間水屋社東之軒令漏給候、仍キリカケヲ沙汰シテ、コナタヨリ其令漏給候上ニ、ソノマヽ置之奉行之、善圓常住ヲ以兩惣官ヘ申之歟、不可有子細旨御許可云々、

〔春日社司祐彌記〕五月廿六日、

一同披露之、

社頭東回廊之聖床事破損候、幷疊一向無之候、床事以御次被加御修理候者可目出候、疊事者十三重之役候、可被仰付候、此聖床事自往代被沙汰置候、十三重之衆幷甲乙僧侶捧法施候、在所々一向可退轉之條無勿躰候、被

仰付候者可目出候、以此旨、可有御披露御集會候、恐々謹言、

五月廿六日　　祐彌
　　師種

供目代御房

〔春日社司祐彌記〕三月、

一十二日、於神主館一社集會在之、子細者、昨日久留美庄政所爲參宮之次、職事代新四郎相尋テ云、如何樣下向ニハ必々可參之由、殊多人數一宿等之事可爲如何之由、職事代申之、所詮多人數之一宿等事ハ難調候間、定而旅宿へ可付之間、其時分兩種樋一荷被遣者可然歟、然者各出錢、兩惣官十四文宛、半之衆八文ツヽ、被出テ、合貳百卅九文在之、殘者惣ノ櫃在之間、被出テ三百計ニテ、樋ハ七升樋一荷兩種等被成取テ、宿へ遣サレハ可然之由、評定一決了、各來十六日執集テ用意之、

九月十一日、

一祐圍評定云、今日初度ニ參、本六種、以白土器備之條、爲如何事哉、此白土器ニテ備進ノ事ハ、就辰市家、代々就其一類之輩ハ、各白土器也、他之就家ニ、

參宮宿事

白土器ニテ備進ノ事ハ辰市家以外例ナシ

氏人ヨリ評定ノ事ハ曾テナシ　雜掌延家ノ出仕ヲ停ム

白土器備進之事者無覺悟之由、評定披露之、面々云、此條不審之處、御評定尤也、然間雜掌ニ子細ヲ可被相尋之由評定、召常住下知云、今日初參本六種之名主、幷彼雜掌等相尋可注進之由、加下知候也、□常住注進云、本六種名主上殿候雜掌北卿大藏與(延家)三候ト申也、重而加下知云、彼白土器ニテ可沙汰之由、自名主蒙下知、如此沙汰之由、自分ニ致沙汰歟之由、相尋可注進之由下知之、注進云、今日本六種土器ノ事、不入取、爲雜掌沙汰仕之由申之、然間社司評定此條先以雜掌緩怠也、然上者可被持科之由評定之處、氏人一兩輩ヨリ評定ニ、大東ノ家ニ白器(土脫カ)ニテ備進之例連綿候上者、縱雖被持科ヲ名主モ不可有承引、幷雜掌モ不爲承引之由評定之、社司評定、於御前而雖失面目、只今之事ハ、彼雜掌可止出仕之由評定、則常住ヲ召、彼與三不儀之間、被止出仕之由、加下知者也、

二十一日、天晴、

一出仕之砌、爲神主披露、師和披露云、去十一日被持科與三九就神(主)種々佗事仕候、同者可有御免候之由披露之、同社司評定曰、十一日之事者、氏人評

定菟角之儀及候間、無力□分爲神主執御披露之上者、可被加免除者也、則
御神供已前、召常住、彼與三九免除之由、加下知者也、
十月九日、
一同集會(學侶)披露之子細者、去月十一日、大東上方臨時之御供備進之、
一□白土器ニテ備進候御神供、白土器ニテ備進事、辰市幷□辰巳新
此面之外者、餘人之事ハ、皆赤土器ニテ備進候、但其外之社中若正預ニ解
任之時者、必々以白土器ニテ調進候、往古ヨリノ記(規)式令相違候、可預御成
敗之由、同以披露之、供目代被出テ返事云、御披露之筋目尤候、神前新儀無
出來樣沙汰可目出候、則其趣社中へ、爲集議可被進書狀候之由被申者、返
事云、御成敗色々畏存候、若先規背事候者、重々可致披露之由ニテ退散也、
辰市若輩之間、祐園同道也、
學侶折紙到來也、
先段於神前社中、被及高聲之諍論候子細之事者、依土器之申事候哉、於其
段者、社中而如往古先規御沙汰可目出候旨、學侶集會評定候也、恐々謹言、
十月九日　　供目代堯敏

土器ハ先規ニ據ル　白土器ニテ備進ノ可否　延家ノ出仕ヲ許ス

兩惣官御中
若宮神主殿
此狀以職事神人大東上殿へ入見參畢、成其意得之由返事、
十一日、(大雨下)
一今日彼學侶書狀筋目、雜掌神人與三方へ加下知畢、返事云、爲名主も、只今
赤土器ニテ可致用意之由、御下知候之由申候也、

〔春日社司祐彌記〕七月、
一十九日、御供已後、神人甚七少者ノカタニヨリカヽリ、笠サシカケサセ、社
頭ヨリ退散之處、卽見付了、則致糺明之處、少者申云、御酒ニヱイ如此之由
申也、仍(つゐ)令故實者也、惣ノ神人等笠サシカケサス事、堅以不可叶、自身サス
先規也、
一廿日、神人甚七昨日之禮ニ來者也、
廿四日、
一別帋(六方折帋)同到來也、
野田神人之內藤次禰宜爲沙汰、大童之躰入立御廊候條、前代未聞之亂吹

神人甚七小者ニ傘サシカケサセ社頭ヨリ退散　赤土器ニテ備進スベシ　自身傘ヲサス例　六方衆徒野田神人ノ社頭出仕ヲ停ム

學侶長谷川兩職人ノ名字ヲ籠ム

正遷宮莚

候間、解神職令停止社頭々出候、可被得其意之由、六方集會評定候也、恐々謹言、

七月廿四日　六方衆等

兩惣官御中

若宮神主殿

神無月、

一廿二日、長川(谷脱カ)兩職人名字之事、學侶ヨリ被籠者也、

一廿□日、長谷川衆名字學侶被籠畢、

十一月、○日闕ク、

學侶集會東室ニ在之、正預代祐稱、神主代師和同道シテ、集會所ニ寄畢、仍供目代被出候間舊記出畢、

□方被出記云、御内三分一二之御殿ニ御前分者、北郷ノ□(神人敷カ)□□之、三四之御殿之御前分者、南郷之神人敷之由見之、

□方出之記云、御内之分莚道之事、南北之神人敷之、此□會出之、種々及沙汰、雖然神主方被出之記懇之上者□方日記之旨、於正遷宮之莚道者、可致其沙汰之旨、爲兩惣官□(之下カ)□知之由被命畢、領狀シテ退出畢、○春日社司祐稱記異事ナシ、

下野二荒神社棟札

宇都宮元綱

土佐奈比賀村天滿宮棟札

〔栃木縣廳採集文書〕六

河内郡宇都宮町二荒山神社棟札　鹿沼今宮社ニモ同シモノアリ、

右意趣者、奉爲天長地久御願圓滿當國當所安穩泰平、殊者大檀越藤原元綱(宇都宮)當主

于時永正五年戊辰

棟上奉新建立社頭　太工朝人并朝宗小工綱兼敬白

六月五日物部吉家

丁巳歳、并堅綱弓家高運一門繁昌、當社守護神祇威光、城内豐饒、人快樂(脱アラン)、皆令滿足、如意吉、

〔古文書〕十○土佐

奉上葺天滿天神御寶殿永正五戊辰霜月十二日、名本物部正重、土與松女、同氏正光、宮楠女、同氏馬子女、道善三郎衞門、次郎衞門、佐伯若衞門、同内馬楠女、大工橘正吉、小工三郎衞門正吉、鍛冶助左衞門家次、

右一通、安藝郡奈比賀村天滿宮ニ藏ル棟札也、

奈路村十二所權現棟札

大隅一成大明神神體裏書

長門宮尾八幡宮緣起奥書願主源祐長

永正五戊寅(辰)歲公文越智則重、願主兵衞九郎重吉、

右一通、高岡郡仁井田鄕奈路村十二所權現ノ社ニ藏ル棟札也、

〔薩藩地理拾遺集〕中大隅國噌唹郡　市成

一一成大明神　神躰裏書　山田河內守忠盡

同　藤原久親

永正五年十二月十三日ト有リ、

〔長防風土記〕二百四十五　船木宰判　厚狹郡三　宮尾八幡宮○中略

万倉村今富村　神祠

一當社繪入之緣記(起下同ジ)御座候、奥書之所、爰ゟ記し申候、

右御緣記事、本願主社職源左衞門三郎祐長、當社八幡宮可奉寄附、雖勵懇志、繪師依不被非(マヽ)之、相滯之所、神慮引合ニ而、大隅國蒲生院控福寺住侶春傳公參詣之處、不思計依機緣、當世(地カ)逼(逗)留間、不顧辛勞、無心彼御緣記書寫事、憚申所無相違領掌之間、俄求料紙、從當春之頃、至御祭禮時分、緣記一部令遂書寫記(訖カ)、然則現當諸願成就滿足云ニ由ナシ、就中當社御緣記事、已前祐長師匠法玉院實雅公、以自筆遂書寫、令社納之所、院家依不慮之火災燒失畢、仍實雅今一度御緣記書立令寄進之、其太概相調候時分、實雅早世ゟ依而、祐長師方(マヽ)之限、重而書寫願令成就也、誠是繼絕興廢之根源ニ而、寂(マヽ)福實雅書寫余□云々、祐長再興書功力云々、殊又春傳公依先世機緣甚深、此大願令成就事、三身相應之儀、神慮感應之砌也云々、幷此言書愚老本書可書寫之由、祐長頻ニ申候間、不及□(辭)退書付畢、老眼云、惡筆云、彼是不可及正躰者也、後見之人々每度被直者、愈可應神慮者也、仍旨趣如件、

永正五年戊辰九月十一日　大願主祐長

繪師春傳　繪師　春傳

筆者善修　筆者圓頭比丘善修

〔建內文書〕三十四○山城

京都祇園社申案文

功程錢

〔端裏書〕「永正五年七月十八日申案文」

案文

一小將井御神輿喧咤之町事、先年被成御下知候案文うつし進上申、以筋目可預御披露候、

一御功程錢之事、

一神馬三疋之事、

明應九年下知

一御唐鞍三口、之事、

一御駒頭兩方相論之事、

一日吉御神事なた前ニ、當社御祭禮御座候、明應九年御下知うつし進上申候、

一御神幸道以下、堅可被仰付之事、

此外條々可申上候子細在之、然共先大方申上候、

先以目出度存候、未一通、

當社御祭禮之事、去四日被仰出候、然共御神輿被仰付候間、委細以一書申上候、殊日吉祭禮無時之當會執行候段、御下知案文進入候、此等之趣可然樣ニ預御披露、神事無爲御座候者、天下泰平可爲御祈禱專一候、恐々謹言、

七月十八日

飯尾近江守殿（貞運）

賀茂神事有無ノ事

〔京都御所東山御文庫記錄〕乙三十三

ゑい正五年九月十三日

かんろし中納言（元長）とのへ

東寺八幡宮宮仕職

東寺南大門一服一錢

みはゆき、みつおう申しやうをも、くわしく御らんをられ候、事おほき中にも、神事のありなしれやう、うんよふにて候、みはお申おもむき、大うこはる事にて候へとも、はめて候、はこ人のくをんこいにおちつき候て、なうしよくれあやまりうろく候へき、さ候うへわ、かいゑきまての事にはをよひはしきはこ人いこし候、神ようわこくしにめしはうひ候わゝ、いうにも しうるへうらぬ事にて候、みつおう申しやうにもさいうた候わぬほとに、ういふんはこ人をよたやうにしらへて、神事ふゐれはこ我いこし候へ、いさゝうも しきよく候わゝ、なとたもた人におほをつけられ候わんもるよし、みつゆきにおほをふくめられ候へく候よし申候へく候、

〔東寺百合文書〕そ三下之五上

○山城

（端裏書）「新宮仕九郎五郎請文永正五年八月廿二日」

謹請申、東寺八幡宮々仕識事、（職下同ジ）

一對申上樣、不可致狼藉振舞事、

一不可好鬪諍々論事、

一宮仕部屋不可預置一服一錢、南大門前、茶屋具足等不可懸茶屋煩等事、

一雖非番、隨召可專社頭奉公事、

一當番之時、傍輩之外不可用代官事、

右條々、背請文旨者、不日可被召放所識者也、仍請文狀如件、

永正五年八月十三日　九郎五郎(花押)

社領外宮領伊勢岩田御薗上分米

〔櫟木文書〕

可早任先規本數、致催促沙汰、令勤神役外宮御領朝明郡岩田御薗當年上分米之間事、

永正五年十月日

播磨一宮領大祝分指出注文

〔伊和神社文書〕三〇播磨

〔端裏書〕「野尻淨ー一宮領指出シ

一宮御領太祝分指出注文之事、

合　但染川内

二反　今ハ畠　在所むくの木元　作人左近

一反廿五代在所ゑん之前　同人作

一反　同所　孫六田

野尻淨勢

大和田原莊供米

補任

律師

廿代　在所入畑に　孫四郎作

一反五代在所石之前　掃部作

一反　今ハ畠　在所　板之元　九郎衞門作

廿五代　在所衞門屋敷前　掃部作

一反四十代在所　はなさき

又みそ代百又公文分内より出申、

右　已上九反廿五代、此分相違ハ有間敷候、仍指出如件、

永正五年十一月廿日　野尻淨勢(花押)

高井祝殿へまいる

〔春日社司祐彌記〕十一月、

□日田原庄御供米致運上、爲十月廿日定日之處、自寺門東山内依塞路次遲々、路次之儀雖無落居、披露寺門、迎ヲ遣者也、

佛事、

〔永正元年記〕永正五年　十一月、

一廿三日、淨懃房得業令轉任律師、參賀、

一廿五日、願實房得業令轉任律師、參賀、
十二月、
一十一日、舜實房得業令轉任于律師、參賀了、
〔永正元年記〕永正五年 二月、
一廿一日、別會五師參賀懷禪、教觀房、
十二月、
一十九日、行賢房得業令拜任于五師、被參賀了、
舜實房律師辭退之所云々、
一廿一日、品配之論匠參賀、宗恩房、良圓、宗賢、琳善、圓源、順文、
願眞房爲隨一之處、終無參賀慮外々々、
〔永正元年記〕永正五年 三月、
一廿七日、新供目代參賀、兼尹、淨恩房、
六月、
一廿二日、新供目代參賀、憲順、賢定房、寺務去十五日自京都被下向、被申付者也、
七月、

一廿八日、供目代參賀、堯敏、良顯房、兩瓶二種被送了、
十一月、
一十六日、新供目代實藝、宗識房、參賀、
〔實隆公記〕三十八 六月廿九日、乙未、晴、
三鈷寺僧來、宗純房（和泉堺光明院、稱入寺事、予以書狀、可入魂之由所望也、雖斟酌、書
一通遣之、茶廿袋被惠之、
〔永正元年記〕永正五年 十一月、
一同日（十六日）、松南院五郎令得度來、宗兼順教房、云々、
〔塔寺八幡宮長帳〕○五岩代
永正六年己巳正月八日開白十口結願、

初百內　稻荷堂
貳百內　彌勒院
參百內　初夜導師、可有後夜導師、畢八月　順炭畢、　實相坊
肆百內　後夜導師、畢八月配供アルヘシ、可有初夜導師、可有卷數、順炭畢、　千代殿
伍百內　鋺仙坊

仁王講
興福寺仁王講
心經會

陸百内　仁王講分
十部百座
十部百座
十部百座
寺僧分
大乘經分　順炭アルヘシ、安藝坊　順炭アルヘシ、彌次殿　筑後殿　次郎五郎殿
〈春日社司祐稱記〉三月廿二日、
一自今日、寺門仁王講讀講云々、
〈春日社司祐稱記〉正月十九日、天晴、
一今日心經會在之、去十三日延引也、三綱之所出三分一云々、
〈永正元年記〉永正五年正月、
一十九日、心經會施行、幡三立、兩門、寺務、
三月、

安藝坊
熊野宮
彌勒寺
秋津殿
中納言殿

三藏會
妓樂會
法花會
加行始

一廿一日、於寺家三藏會施行、竪義三口、
堯敏、良顯房、精義澄俊、行賢房、得業、實藝、宗議房、精義懷禪、敦觀房五師、信增、良春房、精義琳弘、眞觀房五師、
四月、
一八日、妓樂會施行、廻請昨日持來、進奉加判了、
六月、
一卅日、爲京都御禮上洛了、留守ニ法花會三口、加行者被來云々、玄蓮房、宗學房、延良房、
七月、
一十一日、法花會加行者、明賢房（勞分）來、令見參了、
一十九日、專實房加行始、參賀、
一廿一日、良順房加行始、參賀、
一卅日、松林院法花會始加行云々、
八月、
一十一日、東北院禪師御房法花會始加行、罷向見廻了、
九月、

一十七日、法花會廻請兩通持來、進奉加判畢、

一廿九日、如例法花會施行、

竪者 本宗海、(專實)精義善證房得業、副晃圓(東北院)精義實禪房五師、當門跡御同學、

東北院(晃圓)禪師、自一乘院可有出仕之處、依御公事邊、申次之躰無之間、以兼(修南)(院)繼內々案內ヲ被申入、直ニ院家ヨリ出仕畢、於威儀僧者、如先規出世奉(西南)行被相催畢、良家遂業之時雖爲副、先ニ遂之條、古今之規式也、今度其分也、予令裹頭大僧(良譽)正御房、御伴申、令聽聞畢、所作殊勝之由、皆々褒美之間、令安堵者也、

灌頂會

十二月、

一十一日、○中略今夜シ丁(灌頂)會如例、施行先日廻請持來、進奉加判畢、

〔永正元年記〕永正五年　正月、

新唯識講

一同日(十九日)、新唯識講廻請持來、進奉加判畢、

五月、

本唯識講

一十六日、當月本唯識講廻請持來、寺務去九日依老母之歡樂上洛、仍留守之間、予之判形計出之了、

廿八日、遂行之、

八月、

唯識講

一自一日恆例祈禱、唯識講施行、予之代官行勝房參懃了、

〔永正元年記〕永正五年　三月、

觀禪院三十講

一十四日、觀禪院卅講廻請持來、進奉加判了、

四月、

永久寺灌頂

一十四日、於永久寺灌頂(庭儀)有之、大阿闍梨顯秀(中院)法印、受者圓瑜律師、廿歲、兼繼令下向具物畢、

十月、

興福寺大供

一廿六日、今曉於寺家大供施行、經二卷供目代賦之、卽令轉讀返遣了、

延曆寺曼荼羅供

〔山門襍記〕○近江

曼荼羅供所　金剛界

日藏房法印權大僧都　金臺坊法印〻〻〻〻奉

行藏坊法印　靜泉坊法印〻〻〻〻奉

御導師大智坊法印〻〻〻〻奉　等覺院法印奉

常樂坊法印奉　眞如坊法印〻〻〻〻奉
金山坊法印〻〻〻〻奉　如藏坊法印〻〻〻〻奉
禪光坊法印〻〻〻〻　香乘坊法印〻〻〻〻奉
松林坊法印　乘藏坊法印
延泉坊法印奉　慶舜阿闍梨奉
右以來十四日、可被修恆例冬季曼陀羅供、依衆議之旨、所奉唱如件、
永正五年十月十日　勸進法印權大僧都木靜

東寺釋論

〔東寺百合文書〕よ十八 ○山城
永正五戊辰　釋論第二　春季分
四月
於眞如有覺不歟事、
在纏如來說法之事、
於眞如有能薰之義歟事、
同秋　疏第一末
九月

於佛有寒熱之患歟事、
拳正覺之事、
卽身成佛依宿善歟事、

四恩院造替祈禱

〔永正元年記〕永正五年　十月、
一自十五日、於四恩院、七晝夜卅頌施行、御造替之祈禱也、

〔春日社司祐彌記〕神無月、
一十五日ヨリ、於四恩院、七日七ヶ夜御祈禱七重(晝)夜在之、

歡喜寺歡喜天供

〔實隆公記〕三十八　五月十六日、癸丑、陰雨、夏至日也、
良秀大德歡喜天供今日結願、被送札、撫物等、
六月一日、丁卯、霽、
良秀大德歡喜天供結願、卷數、撫物等持來、

結願

〔實隆公記〕三十九　十月四日、戊辰、晴、○中略歡喜天供養事、申良秀、
五日、己巳、霽、○中略早朝令詣代官於歡喜寺、今日良秀大德歡喜天始行、
十一日、乙亥、自曉雨降、○中略歡喜天供今日結願、良秀札卷數等被持來、所願成
就、珍重自愛、祝著々々、

十二月九日、壬申、晴、歡喜寺代官雇申東庵了、天供至今日七ヶ日結願也、東庵光臨、終日雜談申了、

大黑天供

〔實隆公記〕三十九　十一月六日、庚子、雪降、寒嵐甚、十一月節、〇中略大黑天供如例、

十八日、壬子、晴、〇中略入夜大黑供(天脫カ)如例、念誦凝懇丹、

諷經　經供養作法

〔實隆公記〕三十九　七月九日、乙巳、晴、廬山寺僧衆來臨、獻粥、諷經、其後有經供養作法、淨土三部經飜遺札令摺寫之、昭運西堂導師也、事了羞齋、覺城(押小路師富)法師同來、右大丞、右少丞等指引之、於三□新大典侍以下各羞齋、其後□施物今日雖如形、追善無爲無事、自愛也、

夏看經

十八日、甲寅、晴陰、〇中略今日□夏看經滿散、夏中兩日有懈怠之事、仍至今日祈結願也、

忌日　後花園院聖忌

〔實隆公記〕三十九　九月廿七日、壬戌、〇中略於灯火誦法華經、昨日聖忌之間一段念誦也、

三條西公保忌日

〔實隆公記〕三十八　正月廿八日、丙寅、晴、入夜雨降、先公(三條西公保)月忌、齋食良秀大德(有小布施事)宗壽、覺城等來、示緣同齋食、終日念誦、民部卿、明孝等稱禮來、

二月廿八日、丙申、陰、及晚雨降、行水書三十頌、念誦看經、先公月忌、良秀大德就山上灌頂事登山、不可來云々、宗壽、覺城(押小路師富)等齋食如例、終日念誦、入江殿東庵光臨、

三月廿八日、丙寅、晴、先公月忌、良秀大德、宗壽等來、

六月廿八日、甲午、朝雨、則晴、有凉風、先公月忌、良秀大德、宗壽等來臨、相公讀經、第六、

〔實隆公記〕三十九　十一月廿八日、壬戌、晴、行水念誦、先公月忌、請僧皆有穢氣、仍近所齋料兩所遣之、又弘源寺兆西堂儲齋食、請伴談舊事、

實隆母忌日

〔實隆公記〕三十八　三月十四日、壬子、晴、先妣月忌、雲龍院來臨、

四月十四日、辛巳、齋(霽)、入夜雨、先妣月忌也、行水念誦、雲龍院有障之由被報之、遣齋料於近所野僧了、

五月十四日、辛亥、霽、先妣月忌、雲龍院所勞、秀憲大德來臨、小齋如例、自泉州昨日上洛云々、季綱朝臣返報被持來之、御卷數共則披露云々、

六月十四日、庚辰、先妣月忌、雲龍院光臨、終日念誦、

〔實隆公記〕三十九　八月十四日、庚辰、晴、入夜雨降、先妣月忌、野僧供一飯、雲龍

往生禮讃摺寫

實隆祖母忌日

三條西公秀忌日

同實連忌日

覺城

甘露寺親長忌日

院今日被參室町殿、其次來臨、不食之間、羞粟粥了、

九月十四日、己酉、霽、〇中略今日先妣月忌也、念誦如例、雲龍院不被出京、供養野僧、冷大入來、

十月十四日、戊寅、晴、三牧麥一俵納之、宗碩來、先妣月忌念誦、雲龍院、同順慶等齋食招請之、久米備前請伴兩僧、各施物表寸志、其外近邊野僧一飯供養、終日念誦、往生禮讃本令摺寫之、

十一月十四日、戊申、雨降、行水念誦先妣月忌也、雲龍院所勞云々、

十二月十四日、丁丑、晴、先妣月忌、雲龍院來臨、

〔實隆公記〕三十八　六月六日、壬申、霽、祖母月忌精進念誦也、

〔實隆公記〕三十九　八月二日、戊辰、天晴、八條殿(三條西公秀)御正忌也、念誦供養野僧、

十月廿日、甲申、晴、行水念誦、故相公(三條西實連)羽林殿正忌也、供養野僧、今日召番匠、令開爐小作事、覺城(押小路師富)法師來、

〔元長卿記〕六　正月廿三日、陰、常樂院殿御月忌、請金光院、扇子如例遣之、

二月十七日、晴、先人(甘露寺親長)御月忌如例、

三月一日、晴、後廣大寺殿御月忌如常、

法華經漸寫

浮土三部經頓寫

伊長阿彌陀經書寫

藤原房前忌日

勸修寺教秀十三回忌

宗祇忌日

肖柏

廿九日、晴、今日宿忌、廿五三昧執行、廬山寺僧衆八人酉剋許入來、秉燭之後事畢、遣布施、

四月一日、晴、僧衆如昨日、點心之後頓寫三部經、書終、經供養導師想蓮庵、奉作阿閦佛像一躰、漸寫法華經一部八卷、淨土三部經頓寫、伊長書寫阿彌陀經等、被載表白事畢、諷看々々、終行時後分散、遣布施、經供養加布施也、助筆衆中中御門大納(實胤)言、同中納言(實秀)、眞性院(宣增)、中御門中納言弟、覺城、師象(押小路)等也、各別搆座敷、

〔永正元年記〕永正五年　四月、

一十七日、三俣門(藤原房前)(戶)御忌日施行、予(筆繼)代官行勝房出之了、捧物杉原七帖、以請文請了、

〔元長卿記〕六　五月十一日、晴、寶樹御正忌、招金光院、

〔實隆公記〕三十九　七月八日、甲辰、晴、〇中略晚頭廬山寺僧衆六人來臨、廿五三昧修之、是故儀同三司(勸修寺教秀)追善明日修之、仍所行也、勸葛湯等、

十一日、丁未、晴、行水念誦、儀同月忌、壽首座來臨、齋後引小施物、

廿九日、乙丑、晴、宗祇法師正忌日七回之間、設齋食、請良秀大德、令誦梵網經了、

肖柏來話、

藤原定家忌日

八月廿日、丙戌、晴、〇略中今日京極（藤原定家）黄門月忌、有所思、廿首哥興行、題民部卿（冷泉為廣）入道也、

駿河鷲山寺仁王門棟札

九月廿日、乙卯、雨降、明日見了禪定尼十七回也、作善事於此亭可修之處、俄有子細停止、小施物遣廬山寺良秀大德云々、

〔駿河志料〕四十九盧原郡九

仁王門金剛力士古作、棟札云、

永正五年乙（戊辰）酉七月三日

大檀那　朝比奈太郎三郎春定

大工　澤瀬九郎三郎　頭領　左衛門三郎

別當修行　三光坊法印頼祐　奉行祐賢房敬白

朝比奈春定

〔永正元年記〕永正五年

一四日、未明仕丁丸來、而菖蒲畢、十疋三斗（會所計）如例令下行畢、

菖蒲ヲ葺ク

九月、

一十日、小門（興福寺光明院）之前七日掃除之事、塔内法樂屋後家之間、惣次之半分可致沙汰之由申、於此掃除幷極月餅臼二度之公事者、後家も可爲惣次之由、雖加下

門前掃除

年末餅

戒壇院經圓竊盜ノ疑ニ依リ切腹セントス

知、無承引間、去七月十二日六方之使を請乞、仕丁一人ニ市若丸相副、法樂屋へ付畢、然處宿借之六郎（東大寺安樂坊）被官之間、淨禪房六方へ惣地下之申狀無理之由披露之間、六方之儀及猶預令遲々畢、其後興善院堯禪房擬講無勿躰之由被申之間、兩人（安樂坊、淨禪房）、依坊主之敎訓、終ニ今日掃除之儀致其沙汰畢、

十二月、

一九日、南戒壇院坊主經圓（了房）、去月下旬西屋參籠之時、二觸之道具ヲ盜タルニ依テ、寺門ヨリ令罪科、剩縄ヲ懸テ斷頭サセントノ事也、餘口惜次第也トテ、八之過程腹ヲ切畢、サレ共ハヤク見付テ取障間、疵無殊事、二觸之物失墜更無之、一向令狂亂、力モツヨクナリ、不思儀（議）之働共先代未聞也、西屋之冥罰無疑、希代奇特之事也、爲恐々々、

寺領

東寺領丹波大山莊代官職

〔東寺百合文書〕ノ十八之三十二　〇山城

態以折帋申候、仍先日申候（大）太山之庄事、于今無御返事候、千萬無御心元存候、可然樣御調法候て、急度預御返事候ハヽ、祝著可被申候、然者寶（實）ゟん院殿寶言院殿へも御心得候て、御披露奉憑候、進藤方我々知引（證）事候間、如此申候、憑

存候、恐々謹言、

永正五 八月一日　　新見又三郎入道 政直(花押)

公文殿 御宿所

〔東寺百合文書〕リ四十七之六十 ○山城

尙々、御下向目出奉待候、

引違千疋

御折帋委細拜見申候、仍就大山庄御代官職事、御引違千疋ゟて可被仰付候由候間、其分進藤方へ申候處、今之時分迷惑候へ共、すてこ申合事候間、かいふん了簡仕、二三度にも可被參由候、可然存候、明日御參宮事候間、御下向候て、每事可申談候、又公文所ゟ之事、御念比承候、心得申候、恐々謹言、

永正五 八月八日　　新見又三郎入道 政直(花押)

公文殿 御返報

〔東寺百合文書〕に四十一之四十五 ○山城

(端裏書)「大山庄代官補任狀案永正五」

補任狀

補任

東寺領丹波國大山庄領家方大方分代官職事

年貢二十貫文

進藤信濃入道元廣

右以人所被補彼職也、於年貢者、每年貳拾貫文可被致其沙汰、既爲請切地之上者、萬一雖爲一錢、於有無沙汰者、任證文之旨、不日可有改替代官職者也、仍補任之狀如件、

永正五年八月十六日　　公文所上座淨成 判

法印權大僧都 在判

〔東寺百合文書〕に五十下之五十二上 ○山城

(端裏書)「遣大山庄代官進藤信乃(濃)入道方公文所折紙案永正五十十六」

長鹽元親違亂ス

東寺領丹波國大山庄領家分事、號中澤日向守知行、長鹽備(元親)前入道方違亂無謂之條、可被全所務之由、被成奉書云々、早々年貢以下、嚴密可有收納寺家由候也、仍下知如件、

永正五 八月十六日　　公文所上座 淨成 判

進藤信(元廣)乃入道殿

請狀

請申

請切地トシテ百姓未進不法ニ拘ラズ年貢二十貫文ヲ納ムベシ旱水風損等ニ拘ラズ國役公方國方段錢等ハ代官沙汰スベシ請人

請人制狀

東寺御領丹波國大山庄領家方大方分御代官職事

一御年貢事、爲請切之地、毎年貳拾貫文不依百姓未進不法之是非、十一月中仁悉可致其沙汰事、

一旱水風損幷天下國中等雖有不慮之儀、一切不可申事、

一定國役、公方國方段錢（但於段錢者四分一可有御下行事、）以下臨時非分課役等、請切申上者、爲御代官致其補、更以不可申本所ニ、次就請人有相違事者、以別人立替可申者也、

右條々、請定申上者、萬一雖爲一錢、有無沙汰之儀者、不日可被召放御代官職、若猶及異儀者、（議下同ジ）被訴申公方樣、堅可預御罪科者也、仍請定申狀如件、

永正五年八月十六日　進藤信濃入道　元廣（花押）

請仁常福寺　快心（花押）

請乞申

東寺領丹波國大山庄領家方大方分御代官職請人事

右此庄年貢者、爲進藤信濃入道方毎年貳拾貫文、請切被申者也、仍此公用雖爲一錢、於有無沙汰者、爲請人悉可辨申、萬一難澁仕候者、堅可預鑓（讃）責候、其時更不可及異儀者也、仍請文如件、

永正五年八月十六日　常福寺　快心（花押）

〔東寺百合文書〕に四十九之五十上　○山城

（端裏書）「大山事請人制狀案」

請乞申

東寺御領丹波國大山庄領家方大方分御代官職請人事

右此庄御年貢者、爲進藤信乃入道方毎年貳拾貫文、請切被申者也、仍此御公用錢雖爲一錢、於有無沙汰者、爲請人悉可辨申、萬一難澁仕候者、堅可預御鑓（讃）責候、其時更不可及異儀者也、仍請文之狀如件、

常福寺

永正五年九月十一日　、、

〔東寺百合文書〕ノ十八之三十三　○山城

折りとの躰恐入候、返々庄分御請文案文給候て調申、殘分をも了簡仕

毎年二十貫文請切

参可申候、御下知状等給候て、所務等事もうさく申下度候、所務成候之程者、御公用も御引違も被成事候哉、御心得被分候て所仰候、
先日者御返事委細示給候、祝著候、
一來納殘分調法仕、御補任をも給、御下知状等、可有心中候處、執行分引違候ても、惣の御補任いう様に承候、迷惑候、執行分御事、田地等荒候由申候、請切候へんと、如先々へん申うさき事候へ共、當年事へん入立申候共、可仕分と候、御坊御存知之由候間、此分と候、引違分事へ、庄分さへ無了簡候て、少相殘事候、返々執行分事へ御心得候て可給候、然者庄分殘近日致了簡可參候、
一御請文案文可給候、長祿文明分いせん披見仕候、令給候て調候て參候て、正文と引合申へく候、
一切田方へ庄之内よて候哉、各別と候哉、請文次第と可申含候、これへ安御事候、尚々御下知状等給候て、早々所務之儀申付、來月の來納をも可申事候、恐々謹言、

永正五
九月十九日

進藤
元廣(花押)

公文所
御坊

違亂之仁躰在之事間、いさゝの非疎略事候、自寺家も被仰候て、可然儀候へんゝ可申候へ共、先々公事之段、うういふん調法仕事候、依時儀、公儀をも、屋形邊へも可被仰事候、返々うういふん先我等調法仕事候、
御札委細拜見申候、仍御公用補任料殘分事蒙仰候、去月進級可申心中よ候、御補任御下知状等地下へ付候へんゝ、所務之儀不可有相違存候處、長鹽方違亂候て、お國者すてに可成取合分にて候つる、先口入之方よて、所務を百姓相拘候よし注進候、當月も又違亂等候、さ候間、於京都御公事、可被遂糺明分と候、公事のならひの事候間延引候、うういふん無爲理運之調法仕時分よ候、在所之所務手に入候へんぬ間之事者、御心得取分候て可有御待候、寺家御取合このみ存候、恐々謹言、

永正五
十一月廿二日

元廣(花押)

公文所上座御房御返報

進藤信濃入道

元廣

一色材延
實相寺判物
備中新見荘

〔東寺百合文書〕ニ（山城）百四十二之百六十三
（包紙）「永正五七十九到」

一色宮内少輔
材延

東寺年預御房御坊中

従三位方寺家ゟ急度雖可致披露、若輩之事候條、一筆令啓候、仍實相寺御判物爲寺家御存知由承及候、只今可備上覽之心中候、此等趣宜預御披露、則演說候者、可爲祝著候、恐々謹言、

七月十九日　　材延（花押）

東寺年預御房　御坊中

〔東寺百合文書〕ヲ（山城）五十五之六十五
（端裏書）「新見藏人方書狀案文　永正五戊辰七廿一　于今泰行宗演」

今春者、御上洛之時以面謁申承候、祝著之至候、仍就當庄之儀、御注進之趣、委細承候、驚入候、則於寺家令披露候、國方之御儀肝要之間、如何樣ゟも可然之樣可有御調法候、於公儀者、爲此方可令申沙汰候、只今之事者、御沙汰始于今無御座候間、諸篇延引候、近日御沙汰初候ハヽ、則可申入候、尚々於國御刷專一候、御入魂憑入存候、定雖不可有御等閑候、可然之樣以御調法、無爲無事ニ

西九條佐首分土貢米

女御田深草内檢帳

公用御寺納候者、可目出之由、各衆儀候所候、巨細猶自入道殿可被申間、令省略候、恐々謹言、

七月廿一日　　宗演（判）

新見藏（國經）人殿　進候

〔東寺百合文書〕テ（三十之十二）（山城）
尚々、此上万て御道行事、御申あるへく候、（元昌）（花押）

西九條佐首分之内、參段六十分土貢米假納仕候、爲御心得之、一筆令申候也、

永正五年十一月廿六日　　元昌（花押）

因中兵衛尉　康秀（花押）

福田與一兵衛尉殿

池内大膳進殿

〔東寺百合文書〕わ（五下之六）（山城）
女御田深草内檢帳

四斗二升代

永正五年分

永正五年雑載

稲荷前
二段　殘五斗四升　段屋六升　新左衞門方

同尻西
半卅歩　殘一斗七升六合　同一升八合　大工三郎五郎

横縄手
一段　殘三斗二升　本五郎二郎　同三升　赤塚方

同所
一段　殘三斗二升　孫四郎分　同三升　同方

同所
大　殘三斗二升　同二升　彌五郎

殘二斗一升三合三尺(分)三才　彌四郎分　同一升　彌九郎

同所
小　殘一斗七合　同一升五合　澁屋方

同南ヨリ
半　殘一斗　同一升五合　彦三郎

同所西
半

同所尻南
一段　殘一斗六升　同三升　五郎衞門

同所東
半　殘二斗七升　同一升五合　新右衞門方

同所東
半　殘一斗六升　又四郎分　同一升五合　孫九郎

同所東
半　殘一斗五升

以上

目野口

一段　殘三斗二升　同三升　二郎九郎

同所東
半　殘一斗六升　同一升五合　彌二郎

同所東
半　殘一斗六升　一升五合　彌五郎

三百歩二斗六升四合　四郎右衞門

以上參石四斗二升三合內

二斗　下司段屋引也

定殘三石二斗二升三合

十二月十六日　祐春(花押)

乘慶(花押)

淨成(花押)

船錢以下入覺注文

〔東寺百合文書〕ゎ七之九 ○山城

一　船錢以下入覺注文

十貫文　(義興)大內殿

廿貫文　兩郡代

二貫文　同兩奏者

三百文　稻田

五貫三百文　トヨ田方打渡方

一貫七百廿文　酒肴料紙代

播磨賀古莊代官職

滿德方下代分

一貫五百文　郡代中間衆三方

五百文　又稻田方

二百文　稻田奏者忠兵衞

百文　稻田中間

二貫文　美作方會所ヱ禮

五百文　善能寺ヘ禮

一貫文　寶蓮寺同

三百文　三聖寺同納所

以上四十五貫四百廿文也、

永正五十二月廿一日

〔京都帝國大學所藏文書〕七十 葛川文書二

(包紙)「永正五八九賀(古庄)□□年(貢)□事祐(乘)□請文被加□□泰□」

就播州賀古庄御代官職事、補任幷請文事被仰候、拙者儀者、藥師寺滿德方下代分候之間、御補任等可申給之事如何候樣候、縱又滿德方ヘ雖申候、御禮等之儀不可致其沙汰候哉、然時者無所詮御事候歟、自然被止滿德方綺、直被仰

公用四十五貫文

付候事候者、其時ハ御補任等事可任御意候、就中御公用事、自當年肆拾伍貫文仁請切申上者、毎年嚴重可直納申候、次滿德方得分參分壹事、渡付之候、子細事舊候了、將又請切申內八朔錢事、七月中致其沙汰事、爲先規由被仰候、無余儀候歟、雖然百姓無沙汰不可有其隱候、近日差下使者、堅致催促、可進納申候、此等旨委細可預御披露候、恐々敬白、

八朔錢

八月九日　宗琇(花押)

惣目代御坊參御同宿中

〔京都帝國大學所藏文書〕六十九 葛川文書一

(端裏書)「永正五祐乘坊書狀賀夫錢　□□□(五百疋カ)可有取沙汰之由事

祐乘坊

〃　岡次郎右衞門尉殿　御宿所　宗琇」

近日人を差下候間申候、御一行事御申候て可被下候、

昨日者被懸御意候、其刻下邊罷越候て、申合書狀延引申候、只今進入候、就中夫錢事、連々如申候、萬德方へ請切候上者、自餘之儀、更以不可存之由、覺悟仕候へ共、彼御房へ一奉公と存候て、五百疋分可致進納之由申候、可然樣御取合奉憑候、恐々謹言、

八月九日　□□(宗琇)(花押)

山城寶鏡寺惠聖院領攝津有馬郡上莊代官職年貢

〔寶鏡寺文書〕六〇山城

惠聖院殿御領、攝州有馬之郡內上庄御代官職之事、依望申、從戊辰(永正五年)歲至壬申(同九年)歲五ヶ年之間預り申候、但請切申上者、於御年貢者、毎年貳拾貫文分幷人夫一人、無旱水風損、雖爲國物忩、無未進取沙汰可申候、萬一不法懈怠之儀在之者、雖爲年季中、可被召放候、其時不可及一言子細者也、仍爲後日請文之狀如件、

永正五年戊辰十月五日　平備前守

惠聖院殿　吉

御奉行所

近江長福寺領

〔菅浦文書〕十一〇近江

定置長福寺領之事

壹斗五升　清撿孝(挍カ)

貳斗　北孫太郎
四斗九升　衞門太郎
壹斗五升　彌六
貳斗
壹俵　新二郎大夫
以上三俵貳斗五升

祐賢祠堂寄進

永正五年戊辰（神無）無神月日

〔尾張曼陀羅寺記錄〕

祐賢（延德庚戌六月廿七日上人記ニ作祐巖、是乎、）六世天承（マ）但水（ヽ）ヨリ已後三百文也、又ゑりして貳百文ニ成也、（天文十一壬寅ノヿカ、）地下左近二郎、（地下トハ其村一所ヲ云、）四名森殿寄進之下地、地下源六郎（此下知ハ祐賢逆修祠堂ナリ、）畠壹畝百五十文、犬山ニ有、油田也、祠堂ノ佛也、カノコ嶋彌二郎（鹿子島人、）小入ノ三郎左衞門、小作小牧村人、

永正五年十月吉辰　順智（花押）

〔大德寺文書〕（端裏書）「請狀之草案」　十一〇山城

大德寺養德院領山城散在田地

養德院雜掌申
當院領山城國所々散在買得田地（坪付在別帋、）事、當知行之處實正也、萬一於胡亂之儀者、任御法、可有罪科者也、仍請狀如件、

永正五年十一月日　某判

飯尾近江守殿（貞運）

丹後桂林寺志樂莊現米

〔桂林寺文書〕〇丹後

納　志樂庄現米之事
合永正五年分　西浦左衞門弁
一貳斗五升者小物弁　松二郎分弁
一捌斗玖升貳合五夕者小物弁　主分弁
一參斗七升五合者小物なし　武元名內弁
右所納如件、

永正五年十二月十二日　（花押）

甘露寺元長山城淨蓮華院田畠吉田社領ト混ズルヲ幕府ニ訴ヘントス

〔宣胤卿記拔書〕九月十五日、甘中（甘露寺元長）被來、淨蓮華院田畠混吉田社領間事、一門中以連署可申武家事、被問意趣、可然之由返答了、

十九日、淨蓮華院連署案被見之、嘉暦加姓事、前官書位事、

〈實隆公記〉三十　九　十一月廿七日、辛酉、晴、〇略中今日播州大田庄事、申遣建仁寺大昌院了、

廿八日、壬戌、晴、〇略中阿野相公來臨、勸一盞、播州事聊勅定旨相談之、

〈後法成寺尚通公記〉三　十二月二日、乙丑、晴、於松尾寺所申半濟之事、木幡執行眞如寺申合之了、

七日、庚午、晴、於建仁寺談合半濟之儀、源藏主來、

禁中、

〈實隆公記〉三十　八　二月廿三日、辛卯、雨降、〇略中相公（三條西公條）羽林當番參候、

二月晦日、戊戌、晴、〇略中相公羽林爲（萬里小路）秀房番代、參內、

〈實隆公記〉三十　九　十月廿八日、壬辰、晴、〇略中及晚當番參入、今日水鳥船被沈之云々、

〈元長卿記〉六　四月廿四日、晴、參內、當番之故也、

〈實隆公記〉三十　八　六月十三日、己卯、〇略中中御門新大納言（宗綱）來臨、折紙百疋、太刀携之、子息侍從宗藤同道、勸一盞、自此亭、令啓案內於長橋局、則參內、御對面

紅稻　甘露寺元
御料所美　長當番
濃舟木莊　松木宗綱
　　及ビ宗藤
　　參內

三條西公條番ニ候ス

山城松尾寺半濟

建仁寺大昌院領播磨太田莊

云々、

〈實隆公記〉三十　九　八月十一日、丁丑、晴、〇略中自蒲生紅稻二荷送之、又舟木庄御代官事有申旨、則令啓勾當局了、

九月廿一日、丙辰、晴、〇略中久米備前來、丹波御料所上村事有申旨、良秀來臨、

十月五日、己巳、霽、〇略中又上村事、阿野以使者有申旨、

十三日、丁丑、晴、阿野有使者、井田平左衞門也、上村御料所事被談之、愚意分報了、

十七日、辛巳、晴、〇略中上村事、阿野以書狀、今日申入之、傳奏（勘解由小路俊名）來談、又自是內々有申新典侍局之旨、

十九日、癸未、晴、〇略中上村事、今日以書狀有申旨、

廿日、甲申、晴、〇略中傳奏來臨、上村事、有被談之旨、

廿二日、丙戌、晴、〇略中傳奏來臨、上村事、阿野御代官之分御領狀也、

廿三日、丁亥、晴、〇略中早朝遣書狀於阿野許、上村事、濃州事等申了、濃州書狀昨日遣宗碩了、

廿四日、戊子、晴、〇略中上村御料所事、阿野有示送之旨、

阿野季綱　丹波上村
上村御料所ノ事ニ就キ實隆ニ問フ

上村御料所ノ事落著ス

伏見宮御領丹波弓削莊

内侍所御燈料三條町地子

朝餉陪膳

六位ヲ以テ御下代トナス

廿七日、辛卯、晴、〇中略波多野(秀長カ)來、上村事已落居之儀也、祝著之由所示也、折紙納之、不慮之儀且者不可然之事也、再往雖令辭、久米男頻申之間、先以留置了、

〔實隆公記〕三十九　八月十六日、壬午、晴、〇中略及晩參竹園(伏見宮邦高親王)、丹波國弓削庄事、可被申室町殿之間事、御談合也、申愚存分了、傾一盞退出、舊跡事在家又置之、件圖重種(半井)朝臣獻之、納加文書中、

十月廿三日、丁亥、晴、伯二位(白川忠富)來、内侍所御燈料三條町地子事、可申遣大内(義興)許之子細、有相談之旨、

〔實隆公記〕三十九　七月十四日、庚戌、雨降、及晩晴、〇中略抑伊長(甘露寺)來、勾當使也、朝餉御下皆有障、朝餉以六位可爲御下代之處、采女申所存如何云々、予申云、御下ハ六位相當也、采女申所存之條不可然、可被加問答之由申了、此事後案之、朝餉陪膳闕如之時、内々男衆懃仕連綿也、御下之代事□朝餉幷臺盤所等、無左右六位□參入事不可然、前々不可有此儀、□只自采女手中薦可被執之事歟如何、此事猶不審、不決之由以相公羽林、當番參仕之次、申送伊長了、

幕府、

伊勢貞宗將軍書札禮ヲ三條西實隆ニ問フ

貞宗將軍勸進奉加帳書樣ヲ實隆ニ問フ

慈照寺喝食周嘉幕府ニ出頭

〔實隆公記〕三十九　七月十一日、丁未、晴、〇中略貞宗(伊勢)朝臣送使者、室町殿御書札禮事尋之、大納言時御禮謹言、御判、日野(町資廣)前大納言殿、康正如此、表紙御名字也、又被遣中山之御書狀如件、御判也、此儀如何云々、謹言御判之分、通途可然歟之由報之、

十三日、己酉、晴、〇中略伊勢(伊勢貞宗)守送使者、室町殿勸進奉加帳□可爲如何樣哉云々、權大納言御判可然之由□、及晩在重朝(勘解由小路)臣來、勸一盞、

〔後法成寺尙通公記〕三　十月廿六日、庚寅、晴、慈照寺(周嘉)喝食今日始出頭、大樹、伊藏主、陶侍者兩人共也、

〔西野文書〕〇越前

公方御用之事、中屋常慶申つけられ候事、於とりく之儀申候者、りさく御さいくゐめされ候へく候、仍狀如件、

永正五年七月廿九日　いまいつミ(花押)

永珍(花押)

道一(花押)

ミんふ殿樣

源三郎重續加冠

往來小原某等近衛尚通ヲ訪フ

千本春光

萬里小路秀房

德大寺實淳

飛鳥井雅俊

同常慶ら

諸家、

〔阿蘇文書〕二十五 ○肥後

加冠

源三郎重續

從四位惟豐(阿蘇)(花押)

永正五年戊辰十一月十七日

〔後法成寺尚通公記〕三 詩歌梅枝遺(實淳)德大寺、

正月四日、壬寅、晴、○中略北方里江被行、小原判官來、令對面、大上東方等被來、各一桶被持、有一獻、

七日、乙巳、雨下、飛鳥井中(雅俊)納言、前藤中納言等來、各令對面、勸一盞、

八日、丙午、晴、龍仙寺、海藏院、康藏主、不斷光院、妙心院、松梅院、妙善院、大祥院、繼孝院、御靈殿等被來、各令對面、勸一盞、

十二日、庚戌、朝間晴、雪下、千本春光來、令對面、給一盞、

十三日、辛亥、晴、時々小雪飛、萬里小路右少辨(秀房)、松下等來、令對面、林筑後守父子來、

十四日、壬子、晴、德大寺上(ママ)二荷兩種被持之、有三獻、吉田侍從(兼俱)、上池院、松田豐前守(頼亮)、

冷泉爲廣

細川政誠

九條政基女

半井宗鑑短尺ノ禮ニ來ル

玄清等來、各令對面、有一盞、

十五日、癸丑、晴、前藤中納言、上野與三郎、長鹽又四郎、秋庭三郎五郎等來、令對面、勸一盞、

十六日、甲寅、晴、頂妙寺上人來、令對面、勸一盞、鴨光將等來、令對面、德女中被來、

從(頭書)臨川寺西堂、梅花被送之、

二月大一日、己巳、晴、民部卿(冷泉爲廣)、飛鳥井中納言、前中納言、半井入道(宗鑑)等來、令對面、勸一盞、理覺院加持ニ來、

二日、庚午、陰、風吹、小雨灑、及晚雹散、細川治部少輔(政誠)來、令對面、勸一盞、

(朱筆)「不斷光院尼宗始來事」

廿三日、辛卯、雨下、及晚晴、入夜不斷光院一荷被(尼宗也、九條准后(政基)息女也)持、始爲禮被來、令對面、

三月小一日、己亥、晴、入夜小雨洒、半井入道先度短尺書遣之間、爲其禮來也、令對面、給一盞、妙善院被歸、

廿二日、庚申、晴、飛鳥井黃門、覺城備後等來、各令對面、勸一盞、備後一荷兩種進上之、

廿八日、丙寅、晴、及晚小雨下、卽晴、長泰朝臣、淸重等上洛、

細川高國使者ヲ遣ス

高辻長直同章長

仁木政長

小槻時元

冷泉政爲

尙通聖護院ニ赴ク

四月四日、辛未、晴、林修理上洛、從民部少輔(細川高國)許使、祝著之由令返事、
八日、乙亥、朝間雨下、從未刻晴、石藏相模法師來間、ヲイ、碁盤机等預遣之、
十三日、庚辰、陰、從午刻晴、高辻大納言(長直・章長)父子來、令對面、勸一盞、
十八日、乙酉、晴、俊泰(大江)朝臣上洛、
五月十一日、戊申、晴陰、民部大輔來、申賀州替事、
十二日、己酉、晴、賀州之使來、阿野羽林(季綱)先日遣書狀之處、其返事只今當(朔)來、飛鳥黃門取次也、
六月十四日、庚辰、晴、細川治部少輔來、令對面、勸一盞、
十七日、癸未、朝間夜來雨降、猶下、從辰剋晴、又夕立、仁木左京大夫(政長)、飯川修理亮等來、令對面、
七月十二日、戊申、晴、時元(小槻)宿禰來、令對面、給一盞、山內宮內大輔近江瓜二十籠送之、祝著之由令返事、
八月一日、丁卯、朝間雨降、及晚晴、〇中略冷泉大納言(政爲)入道、細川治部少輔、小原判官等來、各令對面、勸一盞、
十二日、戊寅、晴、聖護院江罷向也、先度及度々同來間、爲其禮也、三荷三種送之、有

宵柏宗碩飛鳥井雅俊武者小路綠光

大江俊泰ヲ越前ニ下ス

清閑寺家幸

富小路資直

五獻、妙善院へハ罷向、令休息、及晚歸宅、留主ニ飛鳥井中納言、歡藏主來、實相院相模進上御盃、
廿日、丙戌、雨降、及晚晴、德女中、細川治部少輔來、勸一盞、
廿五日、辛卯、晴、從南都修南院、成身院祇候人等、就公事有注進之儀、
九月廿二日、丁巳、晴、〇中略攝津掃部頭來、近日從賀州上洛、今日始出頭來由申之、令對面、
廿三日、戊午、晴、宵柏宗碩來、令對面、勸一盞、
十月十五日、乙卯、晴、時雨、高辻父子、久昌院來、令對面、勸一盞、(日待也、飛鳥、武者、歡藏主來、頗及大飲、女中衆各一種一餅也、久我女中被來、)
繼孝院來、(頭書)
十六日、庚辰、晴、今朝德女中被來、久我女中、飛鳥井等被歸、家幸(清閑寺)朝臣來、令對面、
廿二日、丙戌、晴陰、風吹、雨下、繼孝院歸寺、
十一月十六日、庚戌、晴陰、風吹、俊泰(大江)朝臣指下越前、
十二月十七日、庚辰、雪飛、智園寺同宿來、勸一盞、明日依智園寺下向也、
十八日、辛巳、晴陰、時々雪降、智園寺下向也、資直(富小路)就渡領之義、禮ニ來也、

本滿寺日
立本寺日後

高辻長直
勸修寺尚顯等三條西實隆ヲ訪フ

冷泉政爲
甘露寺伊長
押小路師富
同師象
富小路資直

舟橋宣賢
高辻長直
玄清實隆ニ抄物ヲ託ス

東坊城和長
姉小路濟繼
半井宗鑑
高辻章長

冷泉永宣
四辻季經
鷲尾隆康
甘露寺伊長
白川雅業
五辻諸仲

濁醪

廿三日、丙戌、晴、本滿寺(日實)上人爲歲末之禮來、
廿五日、戊子、晴、有風呂、及晚雪下、立本寺(日俊)上人被來、
卅日、癸巳、晴、飛鳥井中納言來、吉良治部大輔以使申送歲末禮、不出頭之間、來春必可來由申之、

〔實隆公記〕三十八

正月四日、壬寅、晴、大工來、玄清、宗仲、宗坡等携一桶來、
六日、甲辰、雨時々灑、晴、右馬助來、不謁、菅大納言(高辻長直)、右大辨(勸修寺尚顯)三位等來、
十三日、辛亥、甘露寺黃門朝飡請伴、有象戲、御牧衆石原石見入道等來、
十八日、丙辰、月舟(壽桂)來臨、勸一盞、行水念誦、
廿日、戊午、○略中晚飡、三位局、新大典侍御乳人兩人來臨、又入夜、上臈局携一荷來臨、奉勸一盞、自長橋一桶到來、
廿二日、庚申、昨日差下人於御牧、今日上洛、禮物且到來、自今日精進念誦如例、
廿六日、甲子、天晴、○略中冷泉大納言(爲綱)入來、西林院來、梅牟喜桶一送之、
二月一日、己巳、天晴、月朔幸甚、行水念誦如例、伊長(甘露寺)來、勸一盞、覺城法師來、師象當年始來、
二日、庚午、晴、入夜微雪、○略中資直來、北向爲方違來臨、有一盞事、

七日、乙亥、宣賢(舟橋)來、當年初度菅大納言來會、勸一盞、
十日、戊寅、晴、玄清法師來、近日可令下向攝州、抄物以下少々預置之由申之携來、
十一日、己卯、晴、入夜雨降、○略中
勸一盞、姉小路濟繼(姉小路濟繼)三位來、
廿日、戊子、晴、○略中宗鑑(半井明重入道)來、出家後初度也、携一荷盃酌、前右大辨(高辻章長)三位來會、及昏北面爲方違來臨、勸一盞、
廿三日、辛卯、雨降、梳髮、珊首座自防州上洛、冷大同道入來、勸一盞、喝食書狀等到來、
廿四日、壬辰、晴、○略中入夜亞相(東坊城和長)來臨、下國請暇云々、勸一盞、皆明寺同道、
廿六日、甲午、晴、雨時々降、相公羽林、西室等參詣御靈、今宮、北野、歡喜寺等、歸宅之後、人々於中將方朝飡、請伴、冷泉宰相(永宣)、四辻中將(季經)、鷲尾中將(隆康)、藏人辨(甘露寺伊長)、白川少將(雅業)、內藏頭(東坊城和長)、携櫃、源(五辻)諸中、同前、午後予向彼方、又勸一盞及晚向大納言許、爲請暇也、傾數盃歸宅、參伏見殿、數刻御雜談、
三月十四日、壬子、晴、○略中入夜廿露寺中納言(元長)入來、酌一壺之濁醪、有興、三位局、

雲龍院善紋
廬山寺良秀
眞光院尊海

東方等來臨、
十六日、甲寅、晴、〇略中菅大納言父子、冷泉宰相、覺城法師等來、〇略中今日差下鶴
若於天王寺了、
廿四日、壬戌、雨降、〇略中式部大輔(高辻章長)來、鶴若今日差下天王寺、昨日上洛之間、加勘
發又差下了、
廿八日、丙寅、晴、〇略中伊勢(伊勢貞宗)守昨日遣書狀之處、返事蜷川三郎持來之、謁之謝遣
了、雲龍(善紋)院來臨、
四月二日、己巳、晴、廬山寺良秀、聖敎等携來之、
四日、辛未、〇略中自天王寺鶴若上洛、
廿一日、戊子、晴、〇略中今朝差下人於南都、又差下御牧、富森等、
五月六日、癸卯、晴、早朝差下鶴若於天王寺了、菅大納言父子、統秋(豐原)、宗仲、理性院
等來臨、勸一盞、世間幷堺沙汰等、皆以雜談也、今朝眞光(尊海)院僧正來臨、被携一桶、
勸一盞了、
十三日、庚戌、陰、入夜雨、〇略中大納言母儀、右府之室等來臨、差夕飡、季國來、勸盃、
〇略中宗仲所望色紙廿枚、六今日書之、明日下向越前之由申之來、

姉小路濟繼
高辻章長

持明院基春
尊圓親王御筆
菩薩名號ヲ持參ス

五辻諸仲
半井明孝
中御門宣秀

轉法輪三條實香
般舟院善統

十七日、甲寅、陰雨、統秋來、亞相母儀、右府室家等來臨、被携赤飯、湯桶等、有興、〇中
略鶴若自天王寺上洛、鋸一遣甘露寺、入夜黃門來話、
廿六日、癸亥、陰雨、姉三位、式部大輔等來、鶴若退出之由、書置書狀逐電、不可說
事也、
六月三日、己巳、晴、〇略中亞相母儀來臨、滋野井(持明院)装束事談合也、
十一日、丁丑、晴、夕立、雨則晴、雷鳴、行水念誦、壽首座、覺城小齋請伴、基春卿入來、
勸一盞、慈悲萬行菩薩名號尊圓親王筆持來、令見之、無疑筆之由示之了、冷大、
資直等來話、遣使者於蜷川三郎許了、
十三日、己卯、阿野折紙早朝納之、以重種(半井)朝臣遣太刀於阿野許了、
十九日、乙酉、晴、〇略中勸一盞之處、新中納言(五辻)、諸仲、明孝(半井)、中御門中納言(宣秀)、姉三位等
來、又理乘坊誘引木阿來、各勸盃、伯二位冷泉亞相等來、數盃尤有興、及晚又伊
勢下總守(貞仍)一荷兩種携來、則勸一盞、甘黃在座、經師良椿同來、今日終日酒宴、頗
窮屈了、〇略中隆繼(西大路)朝臣一荷兩種隨身來、客來時分忩之間歸了云々、
廿日、丙戌、晴、〇略中入夜內府(轉法輪三條實香)來臨、被携一桶、勸盃雜談、
廿四日、庚寅、晴、〇略中般舟院善統坊來、亞相母儀、滋野井西向等來臨、勸一盞、

高辻章長世尊寺行季
龍興寺使者伊賀ニテ山賊ニ襲ハル
水無瀨英兼
眞光院尊海
參鈷寺宗純
外郎

廿六日、壬辰、晴、〇中略式部大輔、行季(世尊寺)朝臣、統(豐原)秋等來、吉田來、明日可下向若州云々、先日龍興寺使者於伊賀會山賊、被取書狀云々、仍又書遣之了、前頭右中(烏丸)辨冬光朝臣來臨、卅六才云々、數年隔面謁之處、尤本望云々、內山僧正(良春)故公熙卿舍弟、(阿野)七十五云々、來臨、勸一盞之處、北畠宰(政郷)相入道來臨、

〔實隆公記〕三十九　七月五日、辛丑、晴、善統般舟院僧、來、携一壺、宗純房上洛事、予可申之由示之、水無瀨少將英兼携一桶來、勸盃、及晩御牧衆上洛、

九日、乙巳、晴、〇中略眞光(尊海)院僧正來臨、今日可被向阿野許、出仕之間相待、後退出於此亭雜談、

八月十六日、壬午、晴、〇中略參鈷寺長老宗純上人來臨、卷數□被携之、暫言談、今日參內被宿南□(院カ)云々、

廿一日、丁亥、晴、行水念誦良秀大德入來、藤民部□駿河入道來、近日自駿州上洛云々、今朝儲朝飡、招大納言母儀、滋野井後室等、右府室家自夜前被宿、各請伴、

九月七日、壬寅、霽、入夜雨濺、眞光院羞小齋、午後被歸、菅中納言來話、中御門黃門來、諸仲(五辻)三十六人內畫□(圖カ)五色帋哥所預置了、外郎(陳組田)來、

北畠政郷伊勢ニ下向ス
飛鳥井雅俊
肖柏下國暇請ノ爲メ實隆ヲ訪フ
富小路資直

廿五日、庚申、陰、入夜雨、入夜梳髮、玄衞藏主來臨、明日可下向堺云々、可遣了(桂梧)庵和尙之書狀等、於灯下調之、下三栖庄內檢事、福井兵部丞有申送之旨、〇中略播磨局書狀、一昨日皈參云々、珍重事也、庚申暫不眠、但不及終夜、

廿六日、辛酉、霽、朝間雨、玄衞藏主來、勸一盞、遣書狀等了、英兼來、北畠宰相入道來、今日下向云々、

十月一日、乙丑、天晴、〇中略今日來臨人々、飛鳥井中納言、左衞門督(持明院基春)、姉小路三位、右大辨(勸修寺尙顯)宰相、攝津掃部助、數年在國也、明智上野介、祐乘法印、吉田、其外人々來臨、終日忩々焉、

二日、丙寅、晴、入夜雨、〇中略長九郎來、勸一盞、龍崎中務丞來、貳荷折二合携之、官位方事不審、綿密宏才之者也、粗示愚存、短慮可恥々々、勸一盞清談、

三日、丁卯、晴、行水念誦、肖柏今日下國爲暇請來臨、勸一盞、宗磧有閑談之事、雲龍院僧順慶來、昨日携一桶之間、勸一盞、彼院領女房奉書事被申請之、愚意分示合了、杉原伊賀守來、勸一盞、

四日、戊辰、晴、資直(富小路)來、覺城法師來、〇中略良椿來、賜盃了、今日遣使者於問田五郎(胤世)幷神代紀(貞綱)伊守許、各遣太刀了、

實隆曇華院ヲ訪フ
南昌院宗棟ヲ訪フ
滋野井季國
松殿忠顯
壽桂

十五日、己卯、時雨時々濺、天霽、參曇花院、細川右馬助舊宅也、（政賢）著小直衣乘輿、數刻御言談、賜御盃、述數年之蟄懷、歸路南昌院謁宗棟和尚、盃酌不慮之儀也、其後向德（實淳）大寺、又有小盃酌、數刻閑談、斜陽歸宅、沈醉了、高辻父子、無量壽院等來、抑大內母儀（今小路）送消息、先年遣狀返事也、丁香一函惠之、祕藏々々、

廿一日、乙酉、晴、○中略菅大父子來臨、（高辻長直、章長）大納言（三條）母儀來臨、彼家領事宛行、上洛之程可被相待之由、爲禁裏可被仰出武家趣懇望、其子細以書狀申入了、又亞相乳母自加田上洛來、各勸一盞、西室乳母今日歸參、喪母之後所參也、

廿四日、戊子、晴、○中略久米來、同間事相談了、覺城法師來、大納言母、右府室等來臨、

十一月一日、乙未、天晴、○中略今日來臨人々、滋野井侍從（季國）、松殿三位（忠顯）、親就朝臣、左衞門督（持明院基春）、姉小路三位、丸七郎右衞門、大隅、盛弘、康俱等也、

四日、戊戌、晴、○中略江南院濃州下向、爲暇請來臨、勸一盞、潤躰圓一粒遣之、松殿左少丞等同道、同勸盞、○中略齋藤彥三郎、玄淸等來、亞相母儀來臨、菅大來、勸一盞、入夜伯二位來、灰方荒野新田事、春峯法師違亂事、支狀被談之、

八日、壬寅、晴、○中略月舟和尚來臨、詩文事雜談、有感、

信花坊
東坊城和長
實隆邦高親王ヲ訪フ
烏丸冬光
四辻公音
冷泉永宣
甘露寺元長ヲ訪フ
贈答近衞尚通ト諸家
報恩院久喜梅漬ヲ贈ル
智恩寺鏡餅ヲ送ル

十七日、辛亥、晴、信花坊來臨、於爐邊閑談、法文等聽聞、頗有興、有智之人會合尤有巨益之事也、

廿九日、癸亥、雪降、○中略菅中、（東坊城和長）冷宰等來、（冷泉永宣）勸一盞、道堅來、中御門（松木宗綱）新大納言入來、

十二月一日、甲子、天晴、風靜、臘朔幸甚々々、早朝行水念誦如例、大隅、康貞、加田次郎左衞門來、松殿三位、言綱（山科）、玄淸、宗悅、宗坡來、

三日、丙寅、晴、○中略入夜參伏見殿、數刻御雜談、有一盞、爲孝卿來、

七日、庚午、晴、信花房今日還向南都云々、

廿日、癸未、晴、西院來、又自南都有使者、桂宮院印板事等申下之了、

晦日、癸巳、晴、右京大夫來、（細川高國）左京大夫、（大內義興）吉良等送使者、飛鳥井、（雅俊）烏丸、（冬光）藤侍從、（四辻公音）阿野（季綱）等來、其外賀來人濟々焉、內府來臨、（轉法輪三條實香）中御門亞相來臨、（實秀）

〔元長卿記〕六　二月十四日、晴、冷泉宰相、（永宣）景通（木神）等來、同召留了、

三月十九日、陰、入夜前內府亭有酒宴、（三條西實隆）曉二人歸宅、

〔後法成寺尚通公記〕三　正月十三日、辛亥、晴、時々小雪飛、○中略自報恩院久喜二桶、梅漬一器進上之、

十五日、癸丑、晴、○中略從智園（恩）寺有音信、御鏡被送之、千秋萬歲來、如例年給祿物、

仁木政長ノ女中ニ土器物ヲ贈ル
西園寺公藤物ヲ贈ル
一條冬良ヲ贈ル
櫻ヲ贈ル
松田賴亮ニ食籠ヲ贈ル
牛井宗鑑ニ物ヲ贈ル
大内義興太刀ヲ贈ル
大聖寺慈勝女王ノ御所望ニ依リ歌ヲ書ス
天野酒細川政賢ニ庭草ヲ贈ル
補任料百正

十八日、丙辰、晴陰、時々小雨灑、仁木(政長)女中江土器物三荷遣之、飛鳥井黃門大上江招請、

廿八日、丙寅、晴陰、入夜雨下、〇略中從西園寺五荷五種送之、民部少輔許江三荷三種遣之、

三月廿一日、己未、晴、風吹、從一條前關白(冬良)櫻枝被送之間、遣一首、

四月廿九日、丙申、晴、松田豐前守(賴亮)有吉田邊間、一荷食籠一遣之、宗鑑(牛井)許へ一荷兩種、清法印許江百疋藥種物遣之、

八月三日、己巳、晴、及晚雨下、〇略中從大內左京大夫許、先度遣使、爲其禮送大刀、何樣必可參之間、遲候間、先以使者申由申送也、使安富修理進云々、申虫氣由、不對面、

五日、辛未、晴、大聖(慈勝女王)寺殿御所望卷物ニ和歌書進之、

十一日、丁丑、晴、〇略中惣殊院天野一荷兩種進上之、令祝著之由御返事、

十月七日、辛未、雨下、庭筆(章力)數莖遣典厩(細川政賢)許、

九日、癸酉、晴、及晚時々時雨、康藏主ニ申付草米一分、代官今朝禮ニ來補任百疋、料間、令對面、給一盞、松三位、桂中路兩人來、各御樽進上、遣扇一本、令對面、給一盞、

三條西實隆ト諸家道應法親王ヲ贈ル
王歡喜園ヲ贈ラル
建仁寺興藏主目藥ヲ贈ル
轉法輪三條實香樽ヲ贈ル
獸炭
柳葉
打疊
薯蕷
姉小路濟繼紙ヲ贈ル
甘露寺元長ニ法華經提婆品一卷ヲ贈ル
盆假山

〔實隆公記〕三十八

正月八日、丙午、統秋來、携樽賜盃了、自聖護院(道應法親王)歡喜園送給之、

九日、丁未、建仁寺興藏主目藥持來之、

十二日、庚戌、內府被送一樽、不慮芳志也、則遣長橋局了、

卅日、戊辰、晴、〇略中定法寺僧正被送獸炭、有和哥贈答事、

二月四日、壬申、雪降、杉原伊賀(孝盛)守携柳葉、携一荷來、盃酌、師□來會、富松庄去年年貢到來、大野有書狀、

十二日、庚辰、霽、寒雨時々降、〇略中遣二荷兩種於甘露寺北向方、打疊廿枚被送、

十三日、辛巳、晴、霜凜々、氷結、〇略中蒲生送鳥、薯蕷等、

三月廿四日、壬戌、雨降、覺城(澄胤)法師來、姉三位紙三束送之、自去年爲和歌集書寫、所約束也、

廿八日、丙寅、晴、〇略中提婆品一卷百疋折紙遣甘露寺、入夜入來、被謝之、

四月十五日、壬午、雨降、自入江殿、賜紅藥、則揷瓶、自愛々々、杉原伊賀守來、又送芍藥、則令獻中書王了、松田豐前(賴亮)盆假山一惠之、近日有出奔志歟、終日念誦、

五月八日、乙巳、陰、因幡堂香水到來、

外郎松茸 藕根ヲ贈ル 豐原統秋 笋ヲ贈ル

詩歌ヲ書シ甘露寺元長ニ贈ル

轉法輪三條實香 藕根ヲ贈ル

土岐政房 美濃紙ヲ贈ル

姉小路濟繼 布ヲ贈ル

阿野季綱 物ヲ贈ル

松木宗綱ニ太刀ヲ 季綱ニ酒ヲ 等ヲ贈ル

十四日、辛亥、霽、〇略中陳外郎松茸、藕根等送之、

十五日、壬子、霽、入夜雨、宣賢來話、終日念誦外無他事、統秋送笋、近來見事物也、賞翫々々、

廿三日、庚申、陰、雨降、入夜甚、〇略中今日遣一桶於女王許、母喪籠居也、羽林則爲伯卿使來、謝此事、〇略中圓滿院西坊送笋、

廿四日、辛酉、宿雨洪水以外也、〇略中越前書狀遣之、謝作事、又詩歌二所望之間、同早朝染筆、遣甘露寺了、良秀大德來臨、中將讀經、公宴懷紙共付進長橋局、自內府有書狀、藕根一折被送之、及晚伯二位來、携一桶、盃酌有興、

廿五日、壬戌、陰雨、念誦如例、內府記(轉法輪三條實香)錄樻所用之由被申送之間、取寄遣之、〇略中

持明院(基春)自濃州昨日上洛、今日來、美濃紙卅帖土岐美(政房)濃守送之、祝著、十帖則令割分持明院了、

六月五日、辛未、霽、〇略中濟繼卿布一端送之、不慮之芳志爲悅々々、

十二日、戊寅、阿野三荷三種被送、青女方則又來臨、太刀五百疋折紙携之、相公羽林方同太刀送之、面謁謝之、

十五日、辛巳、早朝梳髮、遣使者於松木許、太刀遣之、三荷三種送之、他行云々、又

理性院宗永圓扇ヲ贈ル

北畠政鄉 裏斗鮑海苔ヲ贈ル

阿野季綱 瓜ヲ贈ル

良春ニ扇面詩歌ヲ贈ル 宗長實隆ヲ訪フ

御牧莊ヨリ瓜茄子ヲ贈ル

遣柳五荷五種於阿野許、謝先日之儀了、南都密乘坊上洛、樋、索麵、桃等進之、又獻樽於西室方、兩人對面賜盃了、

十八日、甲申、招密乘坊羞齋食、及晚圖書頭來、硯一面惠之、西院同來、設一獻、賜盃了、

廿三日、己丑、〇略中自伊勢龍興寺用脚三結、到來、糀、五袋、茶十袋韶藏主同惠之、則書返事謝之、伯二位記錄拾送之、理性(宗永)院來臨、團扇一被惠之、式部大輔(高辻章長)來、〇略中左大丞(廣橋守光)來臨、入江殿御庵爲待月來臨、

廿五日、辛卯、晴、及晚雨灑、〇略中今日內山僧正送樽、北畠(政勝)入道於熨鮑、海苔等送之、阿野送瓜、

廿八日、甲午、朝雨則晴、〇略中內山僧正被官扇面詩哥二所望、以覺城遣之、宗長法師來、携一稱、勸一盞雜談、

廿九日、乙未、晴、〇略中良椿水打料紙等持來、早速神妙也、

卅日、丙申、夕立灑、天陰、早朝沐浴、自御牧瓜茄子等到來、

〔實隆公記〕三十九 七月三日、己亥、晴、念誦如例、伯二位來談、一桶携之、對酌、泉涌僧順桂來、携五色、勸一盞了、

押小路師象酒ヲ贈ル
統秋鯉ヲ贈ル
明智頼明美濃紙庖丁ヲ贈ル
大内義興二物ヲ贈ル
九條尙經樽ヲ贈ル
萬里小路秀房樽ヲ贈ル
西林院芋莖引茶ヲ贈ル
紅稻

四日、庚子、晴、師(押小)象朝臣送一桶、不慮之芳志也、招冷泉(爲相)相公、直衣大帷折重申付之、中御門新大納言來、先日裝束等爲悅之由被謝之、自□被送之、統秋送鯉魚、宣賢□
九日、乙巳、晴、○中略明智(頼明)上野介美濃紙十帖、包(庖)丁一携之來、勸一盞雜談、伯息女送一桶、當月祝著嘉例也、
十日、丙午、雨降、風吹、○中略五荷五合遣大内左京大夫許、相副書狀、阿野同相副使者、及晩自問田(弘胤)大藏少輔許、相副消息、大内返事到來、祝著之由報之、
十二日、戊申、晴、○中略自九(尙經)條嘉例樽到來、
十三日、己酉、晴、萬里小路嘉例樽到來、若州栗屋彌一郎故左衞門尉跡、鯖魚送之、不慮之芳志也、
十七日、癸丑、晴、○中略自三寶院二荷食籠等被送之、□相謁謝之、
八月九日、乙亥、晴、及晩夕立、入夜雨、勸修寺之西林院來、芋莖、引茶等持來之、
十日、丙子、天晴、佐首座可被下御帷代物、五法、可傳遣之由□昨日申遣之處他行、今日給人之間自□直渡之了、
十一日、丁丑、晴、○中略自蒲生紅稻二荷送之、

宗碩美濃ヨリ上洛シ紙ヲ贈ル
苧闕用脚
肖柏松茸ヲ贈ル
朝倉貞景ノ妻鮭ヲ贈ル
龍崎道輔木綿ヲ贈ル
勸修寺尙顯鯉ヲ贈ル
陶興就折帋二百疋ヲ贈ル

十八日、甲申、晴、大慈庵歡西堂來臨、被携茶十袋、□一盞清談、忠顯卿來、有象戲、
廿九日、乙未、陰雨、宗碩自濃州上洛、帋十帖持來之、苧闕用脚齋藤彈正運送之狀持來、自愛也、入夜青女向新大典侍局、當年初度也、頗遲引也、桂陽所望之十三佛出現、自繪所(土佐光信)送之、自愛也、
九月十九日、甲寅、霽、○中略玄衞藏主入來、可下遣周防國之物共、今日渡之、同引物遣之、帶扇等也、
廿四日、己未、陰、○中略於三位局有一盞事、新典侍來會、肖柏被送松茸一折、甘露寺來臨、自越前朝倉妻送鮭魚、不慮之芳志也、冷泉宰相來、
十月十八日、壬午、晴、○中略大内甘葛所望事、統秋朝臣傳申之間、申勾當局遣之了、
十一月十一日、乙巳、雪降、○中略龍崎(道輔)來、木綿サウセン、一端惠之、不慮之儀也、
十八日、壬子、晴、○中略右大丞(勸修寺尙顯)有消息、鯉魚被送之、
廿二日、丙辰、晴、○中略陶三郎興就折帋貳百疋持參之、
廿六日、庚申、晴、○中略自天王寺直垂地布一端到來、

潤體圓ヲ德大寺實淳ニ贈ル

尙通近江吉田社御靈社北野社等ニ參詣ス

三條西公條御靈社今宮社北野社等ニ參詣ス　公條眞如堂等ニ參詣ス

公條嵯峨釋迦堂ニ詣ヅ

實隆墓參

十二月七日、庚午、晴、〇略中自新大典侍東向、年達餅、兆子等被送之、不慮芳志也、

十七日、庚辰、雪降、潤體圓一粒遣德（實淳）大寺許了、

〔後法成寺尙通公記〕三十　九月廿二日、丁巳、晴以密々、吉田、御靈、北野等參詣、

十月十八日、壬午、晴、時々時雨、北方被參春日社、德大寺女中同道、從今夕被行德大寺亭、

十九日、癸未、晴、從德大寺、今朝參社云々、

〔實隆公記〕三十八　正月三日、辛丑、晴、天氣和暖、行水念誦令詣代官於歡喜寺、

十四日、壬午、霙、〇略中青女詣御靈、今宮、北野、祇園、因幡堂等、

廿六日、甲午、晴、雨時々降、相公羽林、西室等、參詣御靈、今宮、北野、歡喜寺等、

廿八日、丙申、陰、及晚雨降、〇略中相公羽林詣眞如堂、慈照寺御座敷等歷覽云々、

三月十九日、丁巳、霙、〇略中相公羽林詣嵯峨釋迦堂、若輩等誘引、當時異躰雖不可然、今俗之風標也、聊爲令慰窮屈許容之、歸路於甘露寺晚飡、又禁裏女中衆嵯峨參詣、下向之迎各罷向云々、及晚陰歸來、

〔實隆公記〕三十九　七月十四日、庚戌、雨降、及晚晴、早朝詣嵯峨墳墓、便路詣釋迦堂、於二尊院傾一盞、惠曉論師相逢、歸路向志乃坂墳墓、廣澤池蓮葉藕花尤奇也、又賀茂蓮池其興不淺、及晚歸宅、乘興頗窮屈了、

十二月十二日、乙亥、晴、〇略中於此亭奉羞朝飡了、

〔實隆公記〕三十八　三月廿三日、辛酉、晴、秀憲大德被讀誦仁王經、

四月廿一日、戊子、晴、行水念誦如例、良秀大德入來、相公讀法花經、

〔實隆公記〕三十八　二月廿二日、庚寅、晴、〇略中毗沙門像木、沽却、古物殊勝之間買得之、

廿四日、壬辰、晴、良秀大德入來、毗沙門修補事誂付之、

三月廿八日、丙寅、晴、〇略中毗沙門像修補出來、歡喜無極者也、

〔後法成寺尙通公記〕三　正月九日、丁未、晴、有風呂、前藤中納言、飛鳥井等入之、

立本寺上人、淨土寺西坊、三位等來令對面、

〔實隆公記〕三十八　三月二日、庚子、晴陰、召大工兩人、小便所以下有小修理事、

裏屏修理之、

四日、壬寅、晴、令葺屋、又有小作事、

公條法華經ヲ讀ム　實隆毘沙門天像ヲ購フ

三條西實隆厠及ビ屛修理

屋根ヲ葺ク

風呂

五日、癸卯、晴、令葺屋、雜舍北方葺殘也、已及黃昏之故也、
六日、甲辰、陰、雨降、屛事普請如連日、
四月廿七日、甲午、宿雨晴、築垣掩令葺之、富森人夫上洛、堀掃除事等申付之、
〔實隆公記〕三十　九　十月七日、辛未、召大工令修理門、其外有小作事、
十二日、丙子、晴、及晚時雨、門前搆土橋水門等令堀之、小普請事在之、
廿二日、丙戌、晴、午後風吹、相公方部屋西妻破損、則加修理了、
十一月一日、乙未、天晴、〇略中北向明障子新造、今日張之、
二日、丙申、晴、新月鮮、召大工二人、園城新造、其外所々小造作普請、御牧人夫一人上洛、
〔實隆公記〕三十　八　六月廿一日、丁亥、晴、〇略中今夜爲方違宿中將方、獨宿也、相公宿予方、
〔實隆公記〕三十　九　八月三日、己巳、天晴、〇略中今夜方違宿中將方、八月節也、
九月十六日、辛亥、土用事、早朝遣使者於祐乘(明智翔明)法印、福井兵部丞、太田藏人等許了、今夜方違宿中將方、今日念誦別而致懇祈、
〔後法成寺尙通公記〕三　四月五日、壬午、晴、小雨灑、小風吹、昨曉小童誕生、德女

堀掃除
門ヲ修理ス
土橋水門ヲ造ル
障子新造
方違
誕生婚姻

中等被來、飛鳥井黃門來、賀小童誕生事、
十五日、壬午、雨下、〇略中產所江俊泰朝臣妻女持參銚子提、有祝言、
五月九日、丙午、晴陰、時々雨下、相定民部少輔家督、去六日申沙汰、一獻云々、
〔實隆公記〕三十　八　四月十八日、乙酉、晴、〇略中後聞、今夜雅(白川)業有嫁娶事云々、
六月五日、辛未、霽、早朝小浴、今日吉曜之間雜色男小四郎始置之、
〔實隆公記〕三十　九　十二月三日、丙寅、晴、〇略中相公正月直垂事、一昨日申付之、繪樣者定仰之了、
廿一日、甲申、晴、〇略中今日吉日之間、令拂始煤、依故障、後日可掃之也、
〔後法成寺尙通公記〕三　八月十八日、甲申、晴、及晚雨下、一昨日聖門喧嘩之由聞及間、遣書狀、
〔實隆公記〕三十　九　九月四日、己亥、霽、夜雨、〇略中於眞光院一昨日彼靑侍法師於常盤有喧嘩、生涯云々、訪此事了、
十二日、丁未、陰、〇略中鹿苑院門前有喧嘩事、
〔後法成寺尙通公記〕三　二月十日、戊寅、晴、筑後宿所江入畫盜人、卽召籠之、三好被官人云々、盜人實否之事令問答也、

近衛尙通ノ子誕生
白川雅業嫁娶
實隆雜色男ヲ雇フ
三條西公條直垂ヲ誂フ
煤掃
喧嘩
盜賊

十二日、庚辰、晴陰、雨降、雷一聲、盜人之事市原出雲方へ被種々申遣處、可致堪忍之由申候趣、從飛鳥井申送間、祝著之由令返答、彼間事無爲之調法祝著之由、以使申遣禮也、

〔主殿寮雜々〕三〇宮内省圖書寮所藏

主殿督領城州大嘗畠（會脫）事、

補任

右任請文之旨代官職令補任訖、者早守先例、可有執沙汰候、萬一不法懈怠之儀在之者、不日可令改易者也、仍補任之狀如件、

永正五年十二月十三日　入江又三郎　久光

神崎小太郎　久行

播磨坂越莊

峠七郎殿

〔後法成寺尚通公記〕三

三月七日、乙巳、雨下、松田豐（賴亮）前守許江申遣坂越莊奉書之事處、可書進之由令返事、

八日、丙午、晴陰、時々小雨洒、妙善院被來、奉書今日書進上、

九月十七日、壬子、晴陰、雨降、一昨日以重陽軒、守護不入下知事遣處、右京（細川高國）兆可申付由有御返事、早速屆間祝著此事也、

〔後法成寺尚通公記〕三

進之由申之、

五月十日、丁未、晴、賀州從安江保有便狀、年貢可致直

七月十三日、己酉、晴、大館伊（尙氏）與守來、船橋敷地事、種々義申之、物詣之由令返事、

廿一日、丁巳、從昨夜雨下、今朝參隅殿、二條敷地淺山稱畠山與次郎違亂、然間申合飛鳥井黃門、

廿九日、乙丑、晴、飛鳥井許江申遣五ヶ庄事、

八月十一日、丁丑、晴、飛鳥井黃門來、五ヶ庄事申合之、

〔實隆公記〕三十八　二月二日、庚午、晴、入夜微雪、〇中略　甘黃（甘露寺元長）來臨、越前田野村用脚運送之由有狀、自愛々々、

廿二日、庚寅、晴、〇中略　富森年貢小到來、

廿九日、丁酉、晴、〇中略　大山鄉年貢相殘分到來、遣東庵了、

三月十九日、丁巳、霽、差下彌三郎於城州小所了、御牧事、北村又入部、彼是無正躰云々、富森年貢少分收來、

四月十二日、己卯、天晴、遣書狀於內府（轉法輪三條實香）許、民部少輔邊事、就知行分事、有申談旨、

近衛尚通領加賀安江保年貢

船橋敷地

二條敷地

越前五ヶ莊

越前田野村用脚

山城富森年貢

丹波大山鄉年貢

山城小所

山城塔森公用ヲ進納セズ

轉法輪三條實香河內鞆呂支莊ニ下向

福井兵部丞紀伊三栖莊代官ヲ望ム

若狹松永保

苧課役

魚市塔森公用到來

轉變之世、隨風波之條、不知進退、爲之如何、

卅日、丁酉、晴、五月節、〇中略信濃中將法印宗詢送書狀、紅燭五丁惠之、抑塔森差下人之處、當月一向彼所不致其沙汰之間、公用不可進納之由申之、言語同斷也、

五月七日、甲辰、霽、〇中略內府今日下向河州知行鞆呂支庄云々、理覺院來、三栖庄代官事、福井兵部丞所望事申之、得其意之由報了、

六月十三日、己卯、〇中略理覺院、福井兵部丞同道來、是三栖庄代官事契約也、一荷兩種持來之、如形一獻用意勸盃了、

〔實隆公記〕三十八　五月廿七日、甲庚子、陰雨、兵部卿(田向重治)入夜來、若州松永保事有相談之事、

六月十九日、乙酉、晴、未明磯山彌三郎下向天王寺、苧課役事、堅申含、

廿七日、癸巳、晴、〇中略抑青侍自天王寺上洛、公用事只可待來九月十月之由注進、不可說事也、彌三郎給分、去年殘別給切符之處、件用脚其外少分到來也、每事無興也、

卅日、丙申、夕立濺、天陰、〇中略魚市公用且到來、塔森公用且到來、於請取者已遣了、

山城御牧莊

丹波山國ノ田地

山城石原莊飯米

丹後大山莊年貢

大山莊年貢皆濟

〔實隆公記〕三十九　八月十二日、戊寅、晴、殘暑甚、眞光院(尊海)僧正來話、武者小路散地事可□(半井)重種朝臣伺申之間、不可有子細之由申付之、今日差下人於御牧所了、

九月二日、丁酉、陰、入夜又雨、伯二位來、山國田地事、有相談之旨、勸一盞之處、阿野相公羽林來臨、同勸盃、覺城法師、宣賢等在座、佐首座出世事、鹿苑(金溪)被申入之、愚存被尋下之間申入了、宗磧紬送之、苧課役齋藤彈正公用方也、

十月十八日、壬午、晴、〇中略石原莊飯米送進之、

十一月七日、辛丑、晴、伯二位來、灰方事有被談之旨、

十八日、壬子、晴、〇中略石原莊收納珍重、大山莊年貢送狀到來、珍重、

十九日、癸丑、晴、大山租且到來、青侍男今日差下天王寺、早速皆濟念願也、

十二月三日、丙寅、晴、〇中略西室元興寺用脚三緡、到來、大山鄉年貢今日皆濟、五百疋則遣東御庵了、請取等渡商人了、

十八日、辛巳、雪、田野村公用五百疋且到來、

廿日、癸未、晴、〇中略自天王寺用脚千疋且到來、寶積債返之了、

攝津富松莊公用

十二月廿七日、庚寅、晴、洗髮、彌三郎上洛、富松莊公用到來、則給分宛行之、

長門福田村

〔萩藩閥閲錄〕三十七之二 中川與右衛門

我等知行分福田村之內、原田名、き三郎大名、大さしかはら、此三ヶ所事、有子細、近年雖被召置候、依忠節返被下候、外聞實儀、連々本望目出存候、仍彼參ヶ所之事、爲無役預御扶持候、忝畏存候、彌涯分奉公之儀不可存無沙汰候、此等之趣奉憑御披露候、恐々謹言、

忠節ニ依リ再ビ與ヘラル

赤穴郡連

永正五年つちのへ六月十五日　郡連(赤穴)

小次郎殿

但馬温泉莊

〔林田文書〕○但馬

湯泉(温カ)庄竹之內名田之事、大分者如近年可相拘候、但そし分等之事者、可爲如前々候、猶委細中村形(刑)部右衛門尉可申候、恐々謹言、

永正五年六月廿七日　清續(花押)

北村兵庫助殿

土佐津埜分限帳

〔津野片岡兩分限帳〕○土佐

津埜分限帳

永正五年八月ニ改ル

定目

一地壹萬五千八百七拾壹石(但本地)

外ニ加ヘ

一同貳千百六拾石

佐竹領うち取、久禮仁井田之內、

一同四千六百五拾貳石三斗貳升

中發讃岐守玄馬(マヽ)領伐取、是戸波甲原浪介村之內、

一同貳千參百五拾石

一條冬房公ゟ加增地仁井田之內、

〆地貳萬五千參拾三石三斗貳升

右之內

壹萬貳千百貳石五斗貳升公領、

八千三百七拾石家老九人江被遣、

貳千百九拾八石中老貳拾五人江被遣、

一條冬房加增地

公領

千百三拾石馬廻り五拾壹人江被遣、
貳百貳拾八石近習騎馬拾六人へ被遣、
參拾石太夫貳人へ被遣、
貳百四拾四石八斗七ヶ寺江被遣、
八拾石諸職人頭とも七人江被遣、
八廉〆地壹萬貳千九百參拾石八斗知行ニ被遣也、
一地千參百廿石　津野藤藏佐
一同千貳百石　市川佐渡守
一同千石　山內藤左衞門
一同千石　山內外記
一同千石　大藏助
一同千石　佐竹信濃守
一同千石　佐竹彥次郎
一同七百四拾石　下元備後守
一同七百石　久松越中守
一同五百石

〆九人家老中
一三百石　津野新介
一百六拾石　津野監物
一百貳拾石　中野田佐(マヽ)近右衞門
一百石　牧野千滿丸
一百石　長山佐兵衞
一百石　下元彌五郎
一百石　長山久兵衞
一百石　久松藏丞
一九拾石　戶田大炊之介
一八拾石　田部又三郎
一八拾石　市川平次兵衞
一七拾五石　高橋三郎右衞門
一七拾石　篠岡藏人
一七拾石　市川藤佐

一　六拾石
一　六拾石
一　六拾石
一　五拾石
一　四拾石
一　四拾石
一　四拾石
一　五拾石
一　六拾石
一　四拾石
一　四拾石
〆中老貳拾五人
一　三拾石
一　三拾石
一　三拾石

市川內記
津野彥次郎
市川紀伊
深瀨主水介
久松三郎兵衛
下元勘介
津野彥左衛門
津野民部
下元與次兵衛
吉岡勘助
下元主計

高橋傳右衛門
味元庵領
上井田加賀

一　三拾石
一　三拾石
一　三拾石
一　三拾石
一　三拾石
一　三拾石
一　三拾石
一　三拾石
一　三拾石
一　貳拾石
一　貳拾石
一　貳拾石
一　貳拾石
一　貳拾石
一　貳拾石
一　貳拾石
一　貳拾石

下城帶刀左衛門
奧田孫之進
門屋隼人佐
高橋惣兵衛
吉屋越前
岡崎忠兵衛
松浦出羽
武田康之助
長橋八良右衛門
戶田兼右衛門
下元治部
高橋清兵衛
市川左馬之丞
長山丹波
市川志摩

一　貳拾石　長山藏人
一　貳拾石　長山孫六
一　貳拾石　高橋三郎右衞門
一　貳拾石　田代市之丞
一　貳拾石　吉田勘介
一　貳拾石　長山長兵衞
一　貳拾石　下元式部
一　貳拾石　市川喜平
一　貳拾石　市川與右衞門
一　貳拾石　市川源六
一　貳拾石　市川六郎右衞門
一　貳拾石　市川藏之丞
一　貳拾石　森部安介
一　貳拾石　中平藏太夫
一　貳拾石　谷新右衞門

一　貳拾石　高橋甚助
一　貳拾石　藏田七郎兵衞
一　貳拾石　深田源之丞
一　貳拾石　高野善兵衞
一　貳拾石　中平左近右衞門
一　貳拾石　中平市之丞
一　貳拾石　久川治部
一　貳拾石　中城平次
一　貳拾石　井上彌右衞門
一　貳拾石　長橋兵部進
一　貳拾石　市川源七郎
一　貳拾石　市川六兵衞
一　貳拾石　下元與一兵衞
一　貳拾石　田神清左衞門
一　貳拾石　長橋關之助

一 貳拾石　小川七郎右衞門
一 貳拾石　中平四郎右衞門
一 〆馬廻ノ中五拾壹人
一 拾石　高橋久右衞門
一 拾石　高橋市之丞
一 拾石　□山作之丞
一 拾石　田上太郎兵衞
一 拾石　高橋孫兵衞
一 拾石　明神次郎兵衞
一 拾石　竹崎佐右衞門
一 拾石　川田三郎右衞門
一 拾石　野見市之丞
一 拾石　井上龜善
一 拾石　奥田庄五郎
一 拾石　市川庄兵衞

一 拾石　市川主馬太夫
一 拾石　猪原彌太夫
一 但此二行文字傷申ニ付、名不知候、
一 〆近習騎馬拾六人
一 百貳拾石　中平駿河
一 五拾五石　中平左京
一 〆貳人檮原番人頭
一 五拾參石　中越四郎兵衞
一 參拾五石　中越三河
一 參拾五石　森部左馬進
一 參拾五石　下元式部之介
一 參拾石四斗　津野彌藏
一 貳拾五石　笹村平六

一　貳拾石六斗　下村與助
一　拾貳石　村田太郎兵衞
一　拾七石六斗　中平千達
一　拾六石八斗　中平彥八郎
一　拾四石三斗　三本源次
一　拾六石六斗　三本治部
一　拾貳石八斗　檮原藤右衞門
一　拾壹石貳斗　谷宇太夫
一　拾貳石七斗　戶田新右衞門
一　拾壹石貳斗　弘瀨六兵衞
一　拾壹石貳斗　中越辰兵衞
一　拾石九斗　下元傳助
一　拾壹石七斗　西村藤六
一　拾石　明神八右衞門
一　拾壹石　谷田新藏

一　九石九斗　竹崎助左衞門
一　六石貳斗　戶田藏之丞
一　五石三斗　前田新兵衞
一　八石三斗　戶田孫兵衞
一　五石五斗　森部甚介
一　四石六斗　廣瀨平兵衞
一　五石　西村與次右衞門
一　六石壹斗　中越久治郎
一　五石八斗　村田喜右衞門
一　三石六斗　長山彌七兵衞
一　四石五斗　西村三次郎
一　三石八斗　前田又右衞門
一　貳石四斗　高里主馬太夫
〆檮原番人參拾六頭共
一　拾五石　掛橋右太夫

三嶋大明神社領

一　拾五石　　吉川民部太夫

三嶋大明神社領

太夫貳人江已下檮原番人へ加置、

一　百貳石　　須崎　長林寺

一　三石貳斗　　四万川　員文院

一　壹石四斗　　應羽院

一　五石九斗　　繁國寺

一　八石　　長福寺

一　貳拾壹石　　聖音寺

一　三石三斗　　吉祥寺

〆七ヶ寺

一　拾石　　白鐵也　村上源四郎

一　拾石　　京太夫　山中主水

一　拾石　　大工頭　中越越後

一　拾貳石　　鐵砲鍛冶　桂木隼人

無爲齋禪柏芥河信方靈松寺ニ攝津牛飼山ヲ寄進ス

一　拾石　　杉ノ川名元　竹村彌兵次

一　八石　　白石名元　與介

一　貳拾石　　商人頭　武正吉左衞門

〆諸職人商人頭共七人

都合地高貳萬五千三拾三石三斗貳升

右之通改

長山久兵衞

市川倉之丞

奥田藏近

永正五年八月定目

寄附、

〔靈松寺文書〕○攝津

寄進申

(攝)接州嶋上郡之內牛飼山之事

四至限　東芝築地、南堀溝、西岸肩、北自南貳壇目芝築地、

右件山者、自先規、領中雖爲牧地、爲山林、靈松禪寺ゟ永代所寄進申實正也、然上者、於子々孫々、不可有違亂煩者也、仍爲後證寄進狀如件、

于時永正五年戊辰初夏廿七日　　禪柏(花押)

無爲齋

芥河彥太郎

信方(花押)

正岡經成伊豫佐禮伊豫寺ニ夜燈田ヲ寄進ス

〔仙遊寺文書〕○伊豫

奉寄進佐禮寺夜燈田之事

合一段者在所小鴨郡ひの口、眞永名也、

右件田地者、雖爲經成相傳之私領、永代奉寄進所實也、於子孫而、造亂妨輩者、可爲不孝仁者也、仍爲後日寄進狀如件、

永正五年戊辰六月十二日　　正岡左衞門太夫

經成(花押)

馬場長眞備前本蓮寺ニ靈供田ヲ寄進ス

〔本蓮寺文書〕○備前

奉寄進本蓮寺靈供免田之事

合壹段者　分米五斗賣買計而已、

在所鹿忍山田村椿井里廿一坪吉末拘分

是友來壹段內貳拾五代公田、貳拾五代山地、臨時諸公事等除之、

右意趣者、慈父源秀聖靈文正元四月廿二日、悲母妙泉聖靈文明十三年正月八日、爲此兩人靈供免、吉末名內從尾々坊令買德、長眞寄進所實也、然上者聊於子孫不可有其煩之者也、仍爲末代之狀如件、

永正五年十二月十三日　　馬場平右衞門尉

長眞(花押)

畠地直錢

賣買、

〔本蓮寺文書〕○備前

永代賣渡申畠之事

合肆拾代者、直錢壹貫貳百五拾文也、

右彼畠之事、依有用要、永代賣渡申所實也、在所者、天神山西法花堂上、四至東北ハ限天神ヤフチ、南ハ限本蓮寺畠ノ岸チ、西ハ限大石岸也、但公事錢每年

公事錢

執行坊江可有納所候、其外諸公事不可有候、公事錢者五拾文也、然上者親類他人之爲儀違亂煩不可有也、萬一何角申輩出來候者、爲上可有御成敗者也、仍爲後日賣劵狀如件、

永正五年戊辰七月十二日　石原次郎左衞門尉(花押)

幸一座頭房

爲隆家靈(太一座頭)供免本蓮寺常住奉寄進者也、

□正月廿七日

〔京都帝國大學所藏文書〕八十三 大德寺黃梅院文書甲

賣渡申永代田ノ事

合半ハ、字(藥カ下同ジ)藥山御領東久世ひしりか地、東ハミそお限、南ハ籔お限、西ハ道限、北ハミそまて、

相傳私領直錢

右件下地ハ、道珍相傳私領たりといゑとも、依有要用、直錢四貫文仁鷄冠井長源方永代限賣渡申處實正明白也、若此下地おゑ(い)て違亂申物(者)出來候ハヽ、其時公方樣より、いろやうの御さいくヲ物(マヽ)おこなヲるゝ物也、藥山御領也、此內貳斗伍升御宮神田也、たんこ殿か地子伍升、其外諸公事なし、仍後日賣劵狀如件、

神田

永正五年戊辰拾月六日　賣主道珍(略押)

子小太郎(略押)

百姓作職

永代賣渡申百性(姓)作職之事

合貳段者、大宮鄕之內、字辻カウチ、

直錢

右件田地者、雖爲買得相傳、依有要用、並(直)錢七貫文仁彌九郎方へ永代賣渡申處實正也、但本支證を相副候て可進候へ共、去永正三年十一月廿七日火事ニ粉(紛)失仕候、若號本支證出來之輩在之、任賣劵之旨、可爲盜人者也、但年貢紫野長勝庵へ壹石九斗五升可被納候、仍主分三斗五升七合可被納候、此外諸公事有間敷候、仍而爲後日之永代賣劵狀如件、

永正五年拾月吉日　星野三郎次郎宗久(花押)

私領田地

〔京都帝國大學所藏文書〕九十七 大德寺塔頭文書

直錢

賣渡進私領田地新放劵文狀事

合一段者、直錢拾貫文請取申庄貞□五郎、

四斗二升　八幡御供米ニ入、

料六升七合公文ニ入、

近江蒲生下郡本郷

五升麥加地子政所ニ入、

在蒲生下郡本郷内、

六条卅七里六坪在之、

右件田地、元者長田太郎左衛門宗悟先祖相傳私領、雖然依有要用、宗昌坊へ賣渡進文在地明白實正也、仍後日支證放券文狀如件、

長田太郎左衛門尉

永正五年霜月廿六日　宗悟 判

跡書

代錢

年貢段錢

〔立政寺文書〕一〇 美濃

永代立政寺祠堂方ゟ賣渡申下地之事、

合壹段者、有坪ミそれこ當寺東講田、北之角也、

右彼下地者、依有用要、代錢三貫文ニ永代賣渡申候處實正也、彼下地者禰宜地之事ニ候間、年貢段錢共ニ、貳百文可有御納所候、此外臨時之諸役壹錢ゟても候へ、御座有間敷候、於子々孫々異亂申仁候ハヽ、惡盜之可被成御成敗候、仍而永代支證狀如件、

抹香田

近江田川莊

桝

私領田地

納米俵十二石

永正五年戊辰十一月廿八日　賣主禰宜與九郎(略押)

立政寺參　檀那妙道

此下地者、檀方當寺へ抹香田ニ寄進也、

〔京都帝國大學所藏文書〕八十三 大德寺黃梅院文書甲

ゑひたひうりわさし申てんちれと

合壹段壹畝者、ありとろ(ここカ)、ろうしうあさいのこうまたかわのしやう、かわけのかうのうち、いさゑ山のしさまへ口にしのならをとも、ゑり一反をひてせき、一反目をゑまふり、とくふん三たわら一斗二升一ゑんふり、まをハ十二合ふり、このゑろまんさうくしなし也、

みきくさんのてんちれもとハ、とやミろにしによか、わさくしまやうにて候へとも、よう〳〵あり候まゝ、のふまひゑうろ十二石ろきりニ、ゑひたひろわけきしとれゝ、御ふさひのちやちによゝ、うりわさしまいらせ候、このしさちにをひて、いらんわけらひたのけいとうあるまじく候、いちほひとして、なほけいとうあほましく候、それためにゝ一ふてをわさしまいらせ候、よけてこにちのためのせうをんしやう、くさんのとし、

ちやによへまいる　うりぬしとやミれにし女

ゑいしやう五年十二月十七日　（略押）

〔山本文書〕○紀伊

賣渡申下地之事

合九十分者、坪者西穩寺彼納所分

右件下地者、仍有用要、直錢貳貫五百文、限永代を賣申處實也、萬一永地有相違子細候共、於此下地ハ、違亂有間敷候、若於後日違亂之方候ハヽ、盗俗人（賊）るへく候、仍爲後日狀如件、

直錢

永正五年戊辰十二月廿八日　石松

平松

俊滿（花押）

登侍者御前

山本撿校大夫殿

但馬牧田鄕道俊庵及ビ田畠

讓與、

〔牧田文書〕○但馬

但馬國朝來郡牧田鄕內道俊菴幷屋敷田畠山林等之事、任老父若狹入道平盛光戒名道俊、寄附狀之旨、見盲喝食所付囑也、次大雲菴之事、同前ニ所讓與也、御判證狀之數通相添、目錄見別紙、一々嚴重之文言明鏡無疑乎、萬一有押妨之輩者、爲公方可有究明者也、然間當菴勤行無其怠、以可報檀恩法界也、群生同圓、種智速越彼岸、直證菩提果、珍重、幸甚々々矣、

等ノ讓與

旹永正五祀戊辰八月念又七日

道俊住持比丘朴菴見淳叟（花押）

暮齡七十七載筆之

〔幸田文書〕○武藏

永代讓與田地之事

合壹段者、在所中村鄕內字號瓦田、

伊勢中村鄕瓦田

相傳私領

右件田地者、善樹相傳私領也、雖然愚僧就看病、懇切無比類之間、彼田地本證文六通相副、光一房仁限永代、所讓與實正明白也、更不可有他妨者也、萬一於此田地、號親類、違亂煩申輩有出來者、盗人罪科堅可被行者也、仍永代所讓與狀如件、

朱印